

O ZO YA SHIKI
於曾屋敷遺跡

—於曾公園整備事業に伴う発掘調査報告書—

2017年3月

甲 州 市
甲 州 市 教 育 委 員 會
公 益 財 団 法 人 山 梨 文 化 財 研 究 所

O ZO YA SHIKI
於曾屋敷遺跡

—於曾公園整備事業に伴う発掘調査報告書—

2017年3月

甲州
甲州市教育委員会
公益財団法人山梨文化財研究所

序

本書は於曾公園リニューアル整備工事に伴う於曾屋敷遺跡の発掘調査報告書です。於曾屋敷は県指定史跡となっており、土壘や堀の痕跡がみられ、現在でも往時の面影を留めています。また、市民が憩う公園としても長く利用されてきました。

このたび、於曾公園リニューアル事業の一環として、隣接地を公園の一部として整備することとなり、工事等の施工に伴う発掘調査を実施することとなりました。調査地点は於曾屋敷の北東部で指定範囲の外でありましたが、於曾屋敷の外堀（流路跡）や掘立柱建物跡、石積みの地下倉跡など、於曾屋敷に関連すると考えられる中世～近世の遺構が検出されております。於曾屋敷の成立した年代についても、13世紀前後の渥美焼甕やかわらけなどの出土遺物から、鎌倉初期にまで遡る可能性が出てきており、於曾屋敷の歴史について、新たな知見が加えられた調査成果であるといえるでしょう。また、大正～昭和初期の陶磁器・ガラス製品など、近代の遺物も多量に出土しており、於曾屋敷が廃絶された後、戦前の頃の塩山駅周辺の様子を窺える資料といえます。

このような調査成果を報告書として刊行できることはまことに喜ばしいことであり、本市の歴史を研究するための書物としてご一読いただければ幸いです。

最後となりましたが、遺跡発掘調査ならびに報告書作成に關係して、多大なるご理解とご協力を賜った関係諸機関および関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成29年3月15日

甲州市教育委員会

教育長 保坂 一仁

例 言

- 本書は平成28年度に発掘調査を実施した山梨県甲州市塙山下於曾所在の於曾屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は於曾公園整備事業に伴い、甲州市より委託を受け、公益財団法人山梨文化財研究所が実施した。
- 本書の第3章第4節は佐々木由香・バンダリスグルシャン(バレオ・ラボ)が執筆した。その他の原稿および編集・校正は柳原功一(公益財団法人山梨文化財研究所)が行った。
- 発掘調査における基準点測量、空中写真撮影、全体図作成業務は株式会社テクノプラニングが実施した。石製品の石質については、河西学氏(公益財団法人山梨文化財研究所)が鑑定した。近世～近代の陶磁器類については堀内秀樹氏(東京大学)からご教示いただいた。
- 本書に関わる出土品、記録類は甲州市教育委員会が保管している。
- 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい(順不同、敬称略)。
甲州市役所都市整備課 上矢敏彦(課長)・村田政仁(公園道路担当リーダー)・武藤剛・戸鶴大輔(公園道路担当)、甲州市教育委員会文化財課 曾根浩(課長)・小野正文(文化財指導監)・飯島泉(歴史まちづくり担当リーダー)・八巻一也(文化財保護担当リーダー)・入江俊行・北井靖人・柳通めぐみ(文化財保護担当)、岩間大介・齊藤陽介・萩原麻由(歴史まちづくり担当)、佐藤拓也(山梨県教育委員会学术文化財課)、御山亮清(山梨県埋蔵文化財センター)、佐々木満・山下孝司・鷹野義朗・志村憲一(甲府市教育委員会)・宮澤公雄・平野修・望月秀和・中山千恵・河西学・畠大介(山梨文化財研究所)、堀内秀樹(東京大学)、室伏徹・三枝哲雄(三枝興業)、森谷忠・柴田直樹(テクノプラニング)、佐々木由香(バレオ・ラボ)

凡 例

1 遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系(原点:北緯36度00分00秒)、東経(138度30分00秒)に基づく座標数値である(世界測地系数値JGD2011)。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北で、真北の方向角は西偏 $-0^{\circ} 08' 10''$ である。

2 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

全 体 図	1 : 100, 150
石 組 ・ 集 石	1 : 60
土 坑 ・ ピ ッ ト	1 : 30
土 器 ・ 石 器 ・ 石 製 品	1 : 3
土 製 品 ・ 鉄 製 品	1 : 2
錢 貨	1 : 1

3 堪穴建物等、遺構平面図、断面図における各種記号は遺物の種別を(下図参照)、実線・破線等の各種線種は掘り方、硬化面、粘土分布、焼土分布等の範囲を示す。

凡例

● 土師器・かわらけ	★ 金属製品	◎ 骨
■ 陶磁器	□ 土製品	◇ 粘土
▲ 瓦	◆ 須恵器	☆ ガラス
△ 石製品	▼ 織文	○ その他

- 土層説明における土色表示は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を用いた。
- 遺物番号は、遺構図版中の番号、遺物観察表番号と一致する。
- 本書の図2は甲州市都市計画図、図3は1/25,000地形図を使用した。

本文目次

第1章 経過	1	第4図 調査区等高線図	34
第1節 調査の経過	1	第5図 1号河道および1号集石	35
第2節 発掘作業の経過	1	第6図 1号掘立柱建物跡(1)	36
第3節 整理等作業の経過	2	第7図 1号掘立柱建物跡(2)	37
第2章 遺跡の位置と環境	3	第8図 1号石組	38
第1節 地理的環境	3	第9図 1号河道・1号土坑周辺	39
第2節 歴史的環境	3	第10図 2・3号河道	40
第3章 調査の方法と成果	7	第11図 ピット(1)	41
第1節 調査の方法	7	第12図 ピット(2)	42
第2節 層序	10	第13図 ピット(3)	43
第3節 遺構と遺物	10	第14図 ピット(4)	44
第4節 於曾屋敷遺跡から 出土した炭化種実	15	第15図 1号河道(1)遺物	45
第4章 総括	17	第16図 1号河道(2)遺物	46
参考文献・註		第17図 1号河道(3)遺物	47
報告書抄録		第18図 1号河道(4)遺物	48
奥付		第19図 1号河道(5)遺物	49

挿図目次

図1 遺跡の位置(1)	4	第24図 1号河道(10)・ 2号溝(1)遺物	54
図2 遺跡の位置(2)	5	第25図 2号河道(2)・ 3号河道(1)遺物	55
図3 遺跡分布図	9	第26図 3号河道(2)遺物	56
図4 於曾屋敷古絵図	18	第27図 3号河道(3)・ 1号石組(1)遺物	57
図5 山梨県内出土の手づくね土器	19	第28図 1号石組(2)・ 1号土坑 遺物	58

表目次

表1 遺跡一覧表	8	第29図 1号集石(1)遺物	59
表2 ピット一覧表	14	第30図 1号集石(2)遺物	60
表3 於曾屋敷遺跡から 出土した炭化種実	16	第31図 1号集石(3)・ 6～51号ピット・ 2～4号溝 遺物	61
表4 土器・陶磁器類観察表	22	第32図 5・6号溝・遺構外 遺物	62
表5 石製品観察表	29		
表6 土製品等観察表	29		
表7 金属製品観察表	29		

図版目次

第1図 於曾屋敷全体図	30
第2図 調査区全体図	31・32
第3図 調査区遺構図	33

写真図版目次

図版1	1 調査区全体写真(合成) 2 調査前風景 3 調査区全景 4 調査区西側 5 調査区西側 6 調査区中央
-----	--

- | | | | |
|-----|--|------|---|
| 7 | 調査区東側 | 20 | 56号ビット |
| 図版2 | 1 1号河道調査風景
2 1号河道矢穴をもつ礫
3 1号河道内1集石
4 1号河道内1集石
5 1号集石中の五輪塔
6 1号集石中の五輪塔
7 1号集石中の五輪塔
8 1号集石中の五輪塔 | 図版6 | 1 2・3号河道完掘状況
2 2号河道土層断面
3 2号河道完掘状況
4 2号河道調査風景
5 2号河道完掘状況
6 3号河道内矢穴をもつ礫
7 3号河道内茶臼出土状況
8 甲州市文化財審議会視察
9 見学会風景
10 ポール撮影風景
11 1号石組養生状況
12 埋戻し風景 |
| 図版3 | 1 1号石組作業風景
2 1号石組内礫出土状況
3 1号石組完掘状況
4 1号石組南側石積
5 1号石組西側石積
6 1号石組北側石積
7 1号石組東側石積
8 1号石組北東隅 | 図版7 | 遺物(1) |
| 図版4 | 1 1号石組南西隅
2 1号石組北東隅出入口
3 1号石組と周辺ビット群
4 1号土坑出土状況
5 1号河道南側五輪塔等出土状況
6 1号河道南側五輪塔等出土状況
7 1号河道内五輪塔等出土状況
8 1号河道内五輪塔等出土状況 | 図版8 | 遺物(2) |
| 図版5 | 1 4号ビット周辺
2 5号ビット
3 6号ビット
4 8号ビット周辺
5 9号ビット
6 10号ビット
7 14号ビット
8 15号ビット周辺
9 22号ビット
10 27号ビット周辺
11 40号ビット周辺
12 44号ビット内集石
13 44号ビット集石下層
14 44号ビット
15 46号ビット
16 46号ビット出土銭貨
17 51号ビット周辺
18 55号ビット
19 56号ビット | 図版9 | 遺物(3) |
| | | 図版10 | 於曾屋敷遺跡の1号石組から出土した炭化種実 |

第1章 経過

第1節 調査の経過

於曾屋敷遺跡は、甲州市に所在する山梨県史跡、於曾屋敷の周辺に存在する遺跡である。この県史跡於曾屋敷は二重土塁を巡らせた山梨県を代表する中世土豪館跡として知られる。

甲州市は於曾公園内の整備にともない、老朽化した公園内トイレを県史跡指定地外の北東郭外へ移設するため、公益財団法人山梨文化財研究所に移設先用地内の発掘調査を委託した。対象地は甲州市塩下於曾525-5、526-3で、山梨県史跡於曾屋敷の北東外郭部にあたり、開発面積843m²のうち、調査対象面積は330m²である。

平成28年7月27日付けで甲州市と公益財団法人山梨文化財研究所との間で「於曾公園文化財発掘調査業務委託」を締結、同日より10月31日までを履行期間とした。7月28日付けで文化財保護法第92条に基づく発掘届を山梨県教育委員会あて提出、8月8日に山梨県教育委員会より「埋蔵文化財発掘調査について」の通知受理、9月7日より現場調査に着手した。

調査にあたっては甲州市、甲州市教育委員会、公益財団法人山梨文化財研究所の3者間で「於曾屋敷遺跡発掘調査の取り扱いに関する協定書」を締結し、教育委員会作成の発掘調査仕様書に基づき、教育委員会の監理監督のもと調査を実施することになった。

11月2日に現地調査を終え、出土遺物については平成28年11月10日付けで発見届を日下部警察署に提出、11月14日付けで日下部警察署より山梨県教育委員会に文化財認定に関する通知、11月29日には県教育委員会より出土品に関する通知があった。

整理・報告書刊行については調査終了後、別途契約とし、12月1日、「於曾公園発掘調査整理作業・報告書作成業務委託」として甲州市、公益財団法人山梨文化財研究所間で委託契約を行い、平成28年12月2日～平成29年3月15日を履行期間として文化財研究所内で整理作業を実施した。

第2節 発掘作業の経過

発掘調査は平成28年9月7日～11月2日に実施した。重機による表土剥ぎのち、人力による遣構確認面の精査、遣構の調査を行い、調査区全体の完掘後、図化用写真のためのポール撮影を実施した。

調査終了後、重機により埋戻しを実施し、現状復旧を行った。その際に1号石組は土圧から保護するために土蓋で養生した。なお、本調査部分については、今後の県史跡追加指定を視野に入れ、トイレ建設場所については設計変更を予定している。調査経過の詳細は以下のとおり。

【調査日誌抄録】

平成28年9月7日(水)晴

重機による表土剥ぎを東側より掘削開始。教委・都市整備課立ち会う。外周に柵・バーを設置。

9月8日(木)雨

表土剥ぎ。西端に堀らしき落ち込みがあり、掘削続行。巨石が多く入り込むため、一部掘り抜いて地山を探す。教委・都市整備課来訪。

9月10日(土)晴

重機のみ稼働。本日にて表土剥ぎ終了。

9月12日(月)晴後曇

本日より作業開始。器材搬入。調査区壁の精査など開始。地元区長など3名来訪。都市整備課、教委来訪。

9月14日(水)曇

シート内の水抜き。鋤籠掛け。堀(権兵衛川)内より陶磁器、ガラス製品多数出土。都市整備課・教委来訪。見学者数名。

9月15日(木)曇

堀内掘り下げ続行。北側壁面に沿ってトレーナを入れ、堀の広がりを探る。堀底より五輪塔空風輪、地輪出土。トレーナ内で集石検出。

9月16日(金)晴

堀内掘り下げ継続、堀東側の掘り下げ。堀内出土遺物の選別。

9月21日(水)曇

鋤籠掛け。河道内掘り下げ続行。権兵衛川の部分を「河道」、河道東脇の河道内(段差で浅くなった部分)を「河道脇」とする。河道脇底面から五輪塔地輪、水輪出土。かわらけの完形品出土。見学者4名。

- 9月26日(月)曇
河道内掘り下げ。五輪塔空風輪、地輪など新たに出土。
北壁セクション精査。分層、写真、図化。教委来跡。
- 9月29日(木)曇
北壁の断面図作図、土説、写真。溝、攪乱の掘り下げ。
1・2号溝、1・2号ピット、1号土坑設定。見学者1名。
都市整備課来跡。
- 9月30日(金)曇
1号集石付近拡張。確認面精査、2~4溝掘り下げ。
柱穴列確認。攪乱の掘り下げ。
- 10月3日(月)曇のち雨
確認面精査、遺構掘り下げ。見学者1名。
- 10月5日(水)曇
石組遺構確認。ベルト設定、掘り下げ。5・6号溝
掘り下げ。
- 10月6日(木)晴
6号溝掘り下げ。1号集石エレベ作図。1号石組掘り
下げ、断面図作図、写真撮影。1号土坑写真、断面
図作図、遺物上げ。渥美、土器皿出土。1号土坑の拡張、
掘り下げ。都市整備課・教委来跡。見学者1名。
- 10月7日(金)晴
1号土坑拡張、掘り下げ。1号石組掘り下げ。2号河
道トレチ設定、掘り下げ。教委来跡。
- 10月12日(水)晴のち曇
1号石組内掘り下げ。礫多数出土。道沿いの3号河
道掘り下げ。陶磁器、2号河道ベルトを残して掘り下
げ。見学者8名。
- 10月13日(木)曇
1号石組内掘り下げ。石積み精査。写真、実測用写
真撮影。2号河道断面図作図、写真。3号河道掘り
下げ。陶磁器類多数出土。茶臼出土。建設課、都市
整備課、教委来跡。
- 10月14日(金)曇のち晴
1号石組内断面図作図、礫の除去、完掘。2号河道
ベルト土説のち完掘。1号掘立半截。断面図、写真。
- 10月19日(水)晴
1号石組周辺の再精査。1号河道内のベルト除去。1
号集石の写真撮影、小礫除去。確認面再精査。1号
掘立柱穴断面実測、完掘。柱穴確認、半截。見学者
6名。見学会用遺物の抽出、洗浄。都市整備課来跡。
- 10月20日(木)晴
ピットの半截、写真、実測、完掘。1号集石の巨礫除去。
10時より市文化財審議会の遺跡見学会。教委など7
名参加。都市整備課来跡。見学者数名。
- 10月21日(金)晴
確認面再精査。午後1時半頃、文化財研究所職員約
25名、遺跡見学。教委、都市整備課来跡。見学者な
ど9名。
- 10月24日(月)晴
ピット断面図写真、作図、土説、完掘へ。1号河道
内の掘り下げ。見学者4名。
- 10月26日(水)晴
遺構外を精査。半截、写真、図化、完掘。
- 10月28日(金)曇のち雨
水を撒き、精査。半截のち実測、写真、完掘へ。教委、
都市整備課来跡。見学者2名。見学会時に展示する
遺物の洗浄、注記。
- 10月29日(土)晴
10時より見学会実施。約70名来跡。出土遺物・器材
の搬出。
- 10月31日(月)曇
ポール撮影実施。遺構写真撮影。その他、補足の追
加実測、遺物取り上げなど。重機による埋戻し開始。
土囊により石組遺構を保護。器材撤収。
- 11月1日(火)雨のち晴
重機稼働。教委来跡。
- 11月2日(水)曇
重機稼働。本日にて埋戻し作業は終了。器材撤収、
トレチ追加分の調査。写真のち実測。器材洗浄
など。地形測量のための単点測量。都市整備課立会
い、終了状況のチェックを行う。本日で現場作業終了。

【発掘作業参加者】

岩崎誠至・河西元彦・河西町男・岸本美苗・菅沼芳治・
武井美知子・筒井聰・樋川芳久・柳通めぐみ

第3節 整理等作業の経過

整理作業は平成28年12月より開始した。出土遺物の
洗浄、注記、接合、実測遺物の選別、実測、パソコン
での図版作成、遺物の実測用写真撮影、遺構写真選別、
原稿執筆、観察表作成、遺物図版番号決定、図版番号
順収納、遺物写真撮影などである。

幕末以降、昭和初期の陶磁器類、ガラス類、その他
歯ブラシ、櫛などについては、報告書掲載遺物を完形品
または完形に近いものに限定したが、文字資料などは図化
した。図化方法としては、陶磁器の場合、絵柄を除く
外形、断面等を通常どおり実測したのちスキャナーで取
り込み、パソコン内でトレースし、400mmレンズで正位撮

影した写真をトレース図と重ね合せるというものである。必要があれば内面、上面、下面の写真も撮影し、貼付した。中世土器・陶磁器に関しては小破片でも実測し、五輪塔のうち破損が著しいものは図化していない。

科学分析としては、1号石組が地下式貯蔵庫(穴倉)の可能性があると考えられることから、床面に近い面に堆積した土壌を採取し、整理段階で乾燥、

水面投下による浮遊選別法で炭化種実の回収を行い、同定作業を行った。

【整理作業参加者】

岩崎満佐子、岩崎誠至、川口三和、岸本美苗、鷹原ゆかり、佐野真雪、末木美保、武井美知子、林紀子、藤原五月、古都明、田中真紀美

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

甲府盆地東部に所在する甲州市は塩山市・勝沼町・大和村が平成17年（2005）に合併してきた人口3万余の市である。北側の奥秩父方面から南流する笛吹川が形成した扇状地と、北東側の大菩薩嶺から南流する重川形成による扇状地が複合した緩やかな南傾斜面、標高400m付近に旧塩山市の市街地がある。遺跡が所在する塩山下於曾周辺はその中心地にあたり、周囲には西側に甲州市役所、北側にJR塩山駅が所在し、駅からの距離は100m程度と近い。

館跡は現在「於曾公園」として東側半分を甲州市が管理し、西側半分は広瀬重治氏の宅地ほか3世帯の宅地となっている。緩やかな南傾斜面上に立地し、傾斜面に盛土し、二重土塁を巡らせた一辺100mほどの平らなテラス面で、南側土塁の中央やや西寄りには土塁が切れて広瀬家の門があり、東側の土塁中央の切れ目には隣の佐藤家に通じる通路となる。公園内や広瀬家の西側から裏手にかけては樹木が生い茂り、森のようになっている。

二重土塁は「内土手（うちどて）」「外土手（そとどて）」とよばれ、西側には北西角から南へ流下する水路がある。東側にも北東角から南流する堀跡があり、地元では権兵衛川とよばれ、昭和40年頃まではきれいな流れがあったという。南側土塁は屋敷外から見ると高さ数mの比高差をもち、屋敷の格の高さを誇る。

土塁内部は、南側半分がほぼ水平に造成され、北側は緩傾斜面となる。平成25年実施の帝京大学の考古学調査により、中世以前の遺構面は自然傾斜に沿った地形上に存在することが確認され、覆土中か

らは近世磁器類が出土したことから、現在の姿になったのは、近世の大規模な造成によるものと考えられる。また戦前まで土塁に盛土するなどの手が加えられたことが聞き取りによって確認されている。

館跡は長らく広瀬家の宅地であったが、昭和38年、県史跡第1号として指定を受け、昭和49年に東半分が広瀬家から市に寄贈されると「於曾公園」として整備された。さらに南側外郭も県史跡に追加指定ののち「於曾第2公園」となり、現在に至る。

館跡周囲は都市化を免れ、歴史的環境、遺構の保存状態は良好で、駅から至近距離にありながら館跡周辺は畠地が広がる農村風景を留めている。館跡の土塁上や周辺にはケヤキ等が巨木群として生育し、中でも館跡の東北隅、外郭部にある「下於曾の櫻」は市指定天然記念物として保護されている。

館跡はかつての外郭部の地割を残すように道が取り巻く。また西側には塩山駅前から勝沼方面に至る通称西街道が南へのび、西街道周辺にはいくつかの中世館跡の存在が知られている。

調査を実施したのは、駅前から南に下った道路に面した碎石敷きの駐車場である。

第2節 歴史的環境

県史跡於曾屋敷はわずかに東偏した100mほどの方形区画で、敷密には南辺84m、北辺95m、西辺122m、東辺108mで、北側が東に偏した長方形となる。後述する古絵図（図4）に描かれているように南側に外土手が巡る形で復元すると、南北推定145m、東西推定110m程度となる。北側と東側には二重土塁が残るが、北側は道沿いに外土手がほぼ完存し、内土手は東端、西端にわずかに残る。また東側

は内土手が完存するが、外土手は隣の佐藤家の敷地内にわずかに残存する。北辺の大半の内土手を欠くのは、聞き取りによれば戦中戦後の食糧増産の際、内土手を崩し、堀を埋めて畠地としたためといわれ、かつての土塁間の堀は大人の背丈ほどの深さがあったという。また北東の内土手の一部は公園造成後、土俵として盛土したものを再度土塁として復元したものという。広瀬家と公園の境には、南北方向に直線的にフェンスが設置されているが、そのラインがこの館跡の主軸方向と概ね一致する。また北西隅の丸土手と呼ぶ外土手の北西角は、広瀬家の屋敷墓裏にあたり、広瀬家によると手を付けてはいけないとされる場所という。現状では水路が北側から回り込み、道路と隣地との角に丸い塚状の地形を残している。

広瀬家内には民家3軒および土蔵、客舎（書院）がある。この於曾屋敷は戦前、政治家として活躍した広瀬久忠氏の宅地で、久忠氏は昭和14年に平沼内閣の厚生大臣、昭和15年に米内内閣の内閣法制局長官、昭和19年の小磯内閣の厚生大臣、昭和20年国務大臣等を務めた著名な政治家である。当時の於曾屋敷を知る池田光雄氏は戦中・戦後の留守宅の管理人であった方だが、同氏によればかつて中央南側には明治期に建てられた主屋があり、東側の玄関前は畠地で、ウメなどが植えられていた。玄関に入ると土間があり、土間裏には水溜があって西側の風呂場からの排水を流す水路が通じ、さらに東の土塁の切れ目から権兵衛川に排水する水路があったといい、現在東側虎口の外側には2条の石列が確認できる。池田氏によると、屋敷地内は3段造成されていて主屋裏には2段の水田面があり、水田には北東の土塁の切れ目より水路が引き込まれていた。また裏側には物置1棟があったという。主屋は昭和30年以降、解体されて3軒分の家の建築材として移設、再利用されたといわれ、現在残る門は明治頃のもの、客舎は昭和になってからの建立という。昭和49年、東側半分が市に寄贈された後、昭和54年の公園造成時にブルドーザーで東側を平らにならしてしまったというが、当時のツバキ、ウメなど、当時の庭木が残るという。また西側宅地側にはもとの地形が残り、社参道南に段差が認められる。

広瀬家北東にある屋敷神は於曾氏を祀る。社はもと、北東内土手の角にあったもので、屋敷地分界に伴い現地点に移設した。参道には石灯籠が6基ずつ

並び、社は木造の流れ造りである。石灯籠には広瀬久忠氏が国会議員として当選した記念銘等が刻まれている。広瀬家の宅地内、南西隅には池があり、久忠氏の頃整備したものと思われるが、西側の土塁に沿って巨石が配列し、古い庭園の一部と考えられる。庭園の一角には石碑があり、杉孫七郎（聽雨）筆の北条時頼の詩歌を刻む。昭和40年、久忠氏没後、渋谷の家から移設したものといわれ、もとは東京の伊藤博文邸にあったと伝えられる。北西隅内土手内には広瀬家の屋敷墓地があり、10数基の墓石、観音像等の石造物がある。中央には古手の宝鏡印塔、五輪塔があり、宝鏡印塔は14世紀代、五輪塔は16世紀の所産とみられる。それらについては、於曾屋敷東北の「五輪畷」と呼ぶ畷に五輪塔が散乱していたものを屋敷地内へ移したという。この五輪畷の場所こそが今回本調査を実施した地点付近にあたる。

屋敷墓地内に建つ「経光院殿」と刻んだ自然石の供養塔は、戦後、切腹石付近にあったものを移設したといわれる。切腹石とは、現在でも於曾屋敷南東の道沿いにある自然石で、於曾氏の家臣、板垣権兵衛が織田氏に攻められた際に腰を掛けた石、またはその石のところで切腹したという伝承をもつ。かつ



図1 遺跡の位置(1)

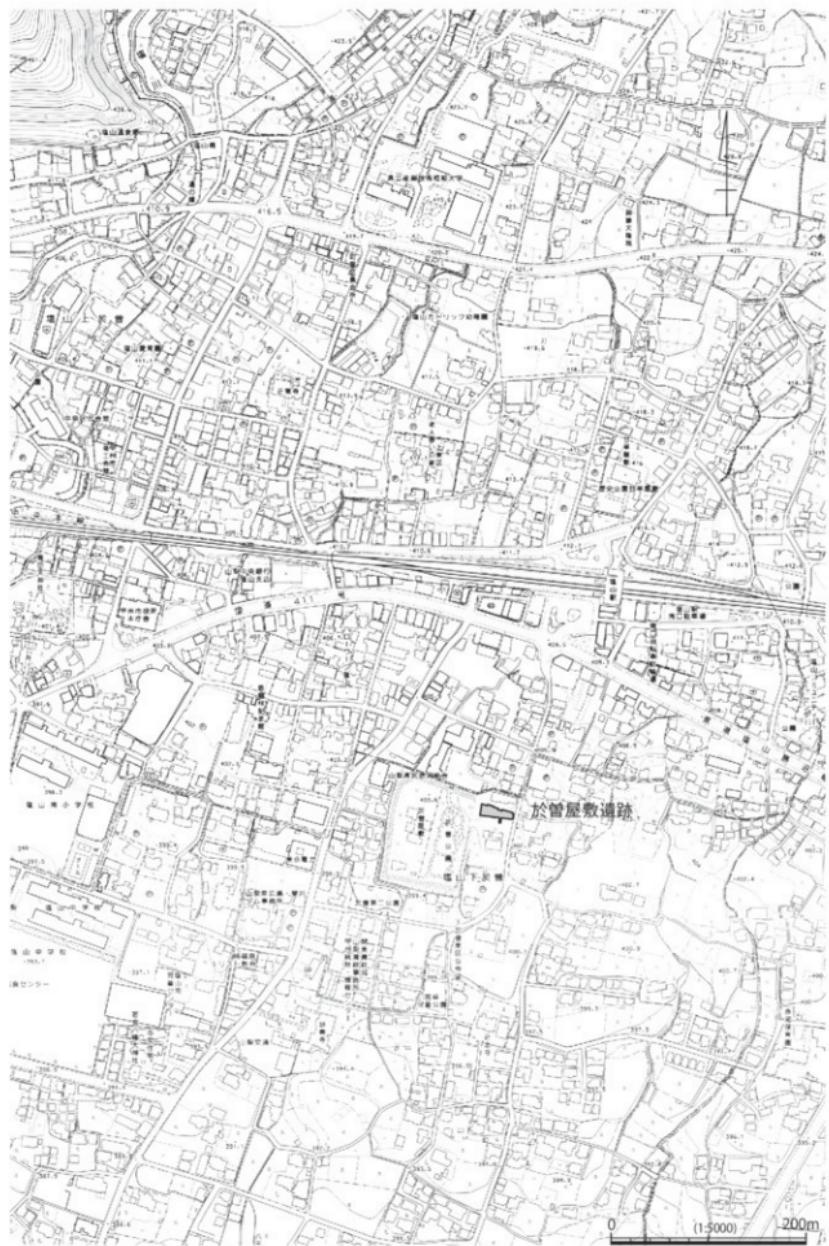


図2 遺跡の位置(2)

ての石は大正年間の塩山駅開設の頃破碎され、線路の碎石（バラスト）に用いたといわれる。また供養塔自体は明治期の所産とみられる。板垣氏は広瀬家の口伝によると、戦乱時に館を焼き、一時萩原山に潜んでいたが、徳川幕府の懷柔により再び当屋敷に戻ったさいに、旧姓於曾氏を名乗らないで母方の姓「広瀬」を名乗ったという（広瀬家の説明板による）。

於曾屋敷が所在する場所は、下於曾字元旗板（はたいた）と呼ばれる。「於曾」の名称は10世紀前半成立の『和名抄』に山梨郡のうち東郡五郷（於曾・能呂・林戸・井上・玉井）中にみえる郷名で、現在の甲州市塩山上於曾、下於曾が遺称とされる。また旗板とは中世土豪屋敷の土塁上などに設置する板状の遮蔽物のこととされ、下於曾村検地帳等に「はたいた」「畠いた」「旗井田」「幡板」がみえるという（塩山市 1977）。

於曾屋敷に関する直接的史料は少ない。『甲斐国志』（文化11年、1814）による伝承には、「於曾・萩原ハ三枝ノ分流ナリ」とされ、古代豪族三枝守國の5人の男子がそれぞれ石原・能呂・林戸・立河・於曾各氏の祖であり、最初の於曾氏は隱曾曾ノ介守繼であったという。守国伝説はともかく、古代甲斐国の大三枝氏、三枝一族が甲斐国在庁官人として権力をもち、於曾一帯との関わりがあったことを示唆する。また甲斐源氏の祖、逸見冠者黒源太清光（源清光）の男、信義（武田）、遠光（加賀美）、義定（安田）のうち、遠光の四男光経が於曾四郎（加賀美四郎）、五男光俊（経光とも）が於曾五郎と呼ばれ、建久5年、頼朝による安田義定滅亡後の於曾一帯を加賀美の地域とともに基盤としつつ、於曾の地を兼領したとされる。四郎光経は、秋山経塚（南アルプス市加賀美）出土の経筒銘に「信心大施主 源朝臣 光経 幸芳縁源氏 所生愛子等 現在非母 桧定比丘尼 建久八年十月十一日」とあることから、頼朝に排斥された兄秋山光朝の十三回忌供養を光経が執行したことが判明し、建仁元年（1201）死去とされる。於曾屋敷が四郎光経の館、あるいは五郎光経の館、現在のJR塩山駅周辺に於曾五郎の館があったといわれる。三枝・安田が重視した於曾の地域を加賀美が兼領した点については、山梨市牧丘町付近に比定される馬牧の存在および黒川金山の採金ではなかったかと推測する向きがあり、また光経らが進出したのは応保2年（1162）の熊野権現社領

八代荘での争いで国司側の三枝氏が弱体化した後ではなかったかと指摘されている（塩山市 1977）。

室町後期から戦国期にかけての於曾氏の動向については、『大塔物語』、『信陽雑志』などの文献に隠曾、尾曾、小曾、於曾として断片的に現れる。また『一蓮寺過去帳』の永享6年（1434）、康正・文明年間に於曾氏の名が見え、文安2年（1445）の武田信重寺領目録には板垣松溪法貞禪定門による寺領寄進、文明18年（1468）2月の向嶽寺（甲州市塩山）での開山抜隊得勝禪師百年遠忌諱に板垣備前守信定が見える。以上のほか向嶽寺への寄進状はいずれも寄進者は板垣氏である。したがって文安年間（1444～1448）以降、於曾氏に代わって板垣氏が於曾郷を支配したと考えられている。この点について『大塔物語』に、信濃国守護小笠原氏のもとで於曾氏が有力な武将として登場することから、於曾氏は信濃国内に分封を受けた可能性が推測されている。また永祿年間（1558～1569）には於曾郷内の菅田天神社、向嶽寺、松尾神社に発給された板垣信安寄進状があるが、信安は於曾左京亮信安を名乗っている（塩山市 1977）。

近世の於曾屋敷について、正徳3年（1713）検地帳によれば下於曾村名主、広瀬文左衛門の屋敷地は「三拾八間 三拾五間 屋敷四反四畝拾歩 文左衛門 外五百七拾坪 四櫻除」とあり、下於曾村の村高998石余のうち、広瀬家の持高は95石余で村一番の大高持であった。また上於曾村内にあったとされる於曾三郎（五郎か）、宮原修理、橋爪和泉の各屋敷地は、享保9年（1724）の上於曾村明細帳に慶長検地時に畠として記載され、慶長以前にすでに整地されていたことが推測されている（塩山市 1977）。

於曾屋敷は『甲斐国志』（1814）に「於曾四郎屋敷」として次のようにある。

「村長文左衛門居之慶長年中繩請ノ地ナリ 同人ハ広瀬内匠助ナル者ノ胤ト云 南北八十五歩東西六十四歩 四方ニ土堤ニ重ニ築キ南面ヲ欠ク 左右ニ清流ヲ帶ビ門ハ西南ニ開ク 乾隅ニ高塚アリ 異位ニ屠腹石アリ 上ニ觀音石像ヲ置ケリ 相伝云於曾氏臣板垣惟兵衛ト云者故アリテ此ニ自殺スト」

この国志編纂事業に伴い提出されたと考えられる『山梨郡下於曾村 屋敷居住 文左衛門』と記した古絵図2枚の存在が知られている（図4、塩山市 1977）。絵図によれば屋敷は「内土手」「外土手」

の二重土塁に囲まれ、南面中央に橋を架け正面口とし、西側中央にも土塁の切れ目があることから虎口があったようである。外土手のうち北西側および南東側、南側は土塁を欠き、とくに南側は「堀土手跡作場」とあることから、もとは堀と土塁があったことがわかる。また東側には内土手、外土手の土塁間に「權兵衛川」が流れる。また外土手の北西隅は「丸土手跡」、側の土塁には「土手高壱丈六尺」と付記する。屋敷内には中央に東西に長い切妻茅葺きの主屋（12間×3間か）、その背後の右手に東西棟および南北棟の付属屋、主屋南東に1間×2間の建物、計4棟を配し、北東隅には土宮神・祝神（屋敷神）を祀る。

北側外土手脇には「外堀跡道」とあり、現在でも道がある。また南東隅の巨岩には「板垣權兵衛腹切石 観音」と記され、現在は織田勢攻めで自害したという板垣權兵衛を祀る。南側内土手の上面には松を左右に4本ずつ描き、そのうち門掛かりの中央左手の松はひとつわ大きいが、現在でも門の左手に松がある。また屋敷地内西・北側、北側と東側の土塁間、祝神周辺に落葉樹系の林を描き、北側土塁付近を中心に現在みられるケヤキ類が存在していたとみられる。なお屋敷内北西および東側隣地の墓所は図には描かれていない。

昭和53年（1978）、小野正文氏らにより平板測量が実施され、二重土塁が囲む構造が明らかになった。

昭和60年（1985）には塩山警察署長の官舎建設計画に伴い、南側虎口外側を山梨県教育委員会が調査

し、現在の南門右脇に幅3m以上の堀跡および土橋が検出されたほか、土橋南側の空間には東西方向の構列と柱穴列が検出され、開口3間以上の門と推定された。また南側には幅5m以上の版築状造構が見つかり、外土手の土塁痕跡と考えられた。また現在の広瀬家の門は、現状では館跡の中央より西に寄るため、本来の位置ではない点が指摘されている。

平成5年（1993）、広瀬家宅地内で住宅建設に伴い、塩山市教育委員会により3箇所で発掘調査が行われた。その結果、平安時代の堅穴住居1軒と重複するように礎石掘方と考えられる根石を伴う柱穴4本が検出された。堅穴は3.5m×4.1mの方形で、北竈をもつ平安時代9世紀後半代の住居である。また『塩山市史 史料編』には、土器皿2点の図があり、館跡の年代を示唆している。なお、柱穴列については近現代の住宅に伴うものと推測され、戦後まで存在した主屋の柱痕か、近世の主屋礎石列と思われるが、中世の礎石建物の基礎の可能性も捨てきれない。

平成25年と27年には帝京大学考古学総合実習を於曾屋敷内で実施した。第1次調査は平成25年9月7日～13日に行い、東側公園の花壇内5ヶ所を調査した。その結果、広瀬家の井戸から東にのびる水路跡、小ピットなどが見つかったほか、南側では厚い造成面が中世の確認面上に存在することが明らかになった。第2次調査は平成27年8月27日～9月14日に西側、広瀬家の裏で行われ、戦後削平、埋め立てられた土塁、堀の痕跡を確認したほか、平安末とみられる堅穴状造構を検出した。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

「発掘調査の取り扱いに関する協定書」には、教育委員会が提示した発掘調査仕様書に基づいて実施することとされる。調査仕様書によれば、於曾屋敷遺跡で想定されるのは平安・中世の遺構1面、地表からの深さは約30cmで、県史跡に隣接することから関連する遺構・遺物が検出される可能性が高く、遺構の保存も視野に入れた調査方法をとること、測量は世界測地系より設定したグリッドに準拠すること、包含層、遺構覆土の遺物は全点ドットを基本と

すること、耕作土、攪乱、2次堆積土中の出土遺物は一括で取り上げること、見学会の実施等についてである。

基準杭は、世界測地系に基づき調査区脇に3本を打設し、光波測量時の基準点とした。出土遺物についてはパソコンをつないだ光波測量機で3次元測量し、遺物は通し№で取り上げた。調査用ソフトは「遺構くん」である。遺構については、ピット・土坑は南北分を半截、やや大形の遺構はベルトを設定し、土層堆積状況を確認、図化したのちに完掘した。

1号河道とした権兵衛川（堀）については、昭和40年代の造成で埋められているため、重機で一部下層まで掘り下げたところ、巨礫などがゴミ類とともに埋められていた。重機で礫のいくつかを除去し、下層を調査したが、河道を引き込んだ堀のため、堆積土は水流にともなう堆積砂層を主とし、堀としての掘り方面を確認することはできなかった。覆土中

からは多量の大正～昭和初期（戦前）の陶器・ガラス類が出土し、それらは一括で取り上げた。また2・3号河道については深い溝状遺構であるが、これも水流による形成を示し、覆土から幕末・明治・大正～昭和初期の遺物が多量に出土したため、一括で取り上げた。遺跡中央付近では掘立柱建物跡が確認され、その南北方向の柱穴配置を確定するため、

甲州市塙山	
No.	遺跡名
1	前田遺跡
2	牛農道跡
3	溝上遺跡
4	西原遺跡
5	住蓮木平遺跡
6	西田遺跡
7	東田遺跡
8	芦原田遺跡
9	下豊田遺跡
10	村北遺跡
11	向原遺跡
12	崩田A遺跡
13	崩田B遺跡
14	崩田C遺跡
15	壬王前遺跡
16	町田遺跡
17	斎藤平道跡
18	清水田遺跡
19	道骨井跡
20	知光田遺跡
21	上塙後原遺跡
22	中道遺跡
23	鷹野道遺跡
24	鷹野八反田遺跡
25	鷹野神社遺跡
26	桜畑A遺跡
27	桜畑B遺跡
28	ケカチ遺跡
29	坂之上・堀保遺跡
30	五反田遺跡
31	石骨A遺跡
32	石骨B遺跡
33	横井・大戸遺跡
34	池田遺跡
35	下於曾八反田遺跡
36	正泉A遺跡
37	正泉B遺跡
38	横道跡
39	影井遺跡
40	久保田遺跡
41	下西畠遺跡
42	横畠遺跡
43	受地遺跡
44	林間遺跡
45	天神原遺跡
46	宮沢遺跡
47	宇賀原遺跡
48	西畠A遺跡
49	於曾尼遺跡
50	神之木遺跡
51	神之木遺跡
52	西畠B遺跡
53	相ノ田遺跡
54	南畠遺跡
55	稻荷林遺跡
56	宮之前遺跡
57	清水尻遺跡
58	千手院前遺跡

No.	遺跡名	時代
61	高林遺跡	縄文（中）・中世
62	塙山中道跡	縄文（中）
63	金山遺跡	平安・中～近世
64	青ヶ沢遺跡	平安
65	番江原遺跡	平安
66	上三乳神道跡	平安
68	向原寺庭園	近世
69	向原今方丈跡	近世
70	乙川戸前遺跡	縄文・平安
71	星敷法A遺跡	縄文（中）・平安
72	武士前下道跡	縄文・平安
74	諏訪神社遺跡	平安
75	東林遺跡	平安
76	原敷谷B遺跡	縄文（前）・奈良・平安
77	矢込道遺跡	縄文・平安
78	天神前遺跡	縄文（前）
79	籠垂遺跡	縄文・近世
80	幾越遺跡	平安
81	中原A道跡	平安
82	中原B道跡	平安
83	宮之下道跡	平安
84	大神道跡	平安
85	中原遺跡	縄文・平安
86	松原田遺跡	縄文・平安
87	溝之上前遺跡	縄文（中）
104	梅ノ木道跡	平安
105	中村遺跡	縄文
106	獅子之前遺跡	縄文（前）・弥生・平安
107	小山平道跡	縄文（前）・中・平安
108	札之内東A道跡	平安
109	札之内東B道跡	縄文（前）・平安
110	鶴音堂東道跡	縄文・平安
111	八委田西道跡	縄文（中）・平安
112	青田A道跡	平安
113	青田B道跡	縄文（中）・平安
114	中原遺跡	平安
115	身渕田道跡	平安
116	御前田前遺跡	縄文（中）
117	洗の東遺跡	縄文（前）・中・平安
118	宮之前遺跡	平安・中世
119	安道寺遺跡	縄文（前）・中・平安
122	牛久保遺跡	平安
123	原中割遺跡	縄文
173	馬場平道跡	旧石器・縄文（前）
180	切付平道跡	平安
181	斐切塚	中世・近世
182	おせん福荷塚	平安
183	おまん福荷塚	平安
184	下萩原浅間塚	平安
185	跡の宮塚	平安
189	お丈丸福荷塚	平安
190	梅ノ木塚	平安
191	奥栗福荷塚	平安
192	草塚	平安
197	西野原彌九工跡	近代
199	田草川氏屋敷	平安
201	西の屋の塚	中世

No.	遺跡名	時代
202	瀬代氏原敷	平安
204	中村氏原敷	平安
205	風間氏原敷	平安
206	依田宮内佐衛門屋敷	平安
207	田辺氏原敷	中世
208	池田氏原敷	中世
209	宇賀星敷	平安
210	於曾星敷	平安
211	八代氏原敷	平安
212	保坂氏原敷	平安
213	於曾三郎星敷	平安
214	橋爪氏原敷	平安
215	内藤清佐衛門屋敷	平安
216	平城	平安
217	武田信昌館跡	中世
218	村田氏原敷	中世
219	古屋氏原敷	中世
220	綱野氏原敷	中世
221	佛師原墓地	平安
222	綱野新五佐衛門屋敷	平安
223	千紙星敷	平安
224	武田兵庫助星敷	平安
甲州市勝沼		
1	大塚南遺跡	縄文
2	大塚北遺跡	平安
3	松原遺跡	平安
4	若林遺跡	縄文
5	山富塚	中世・近世
6	上野經塚	中世
7	天神遺跡	縄文
8	塙穴古墳	古墳
9	總尾敷遺跡	平安
10	下立石西遺跡	縄文・弥生
11	下立石東遺跡	縄文・弥生
12	下立石遺跡	縄文
15	上中居遺跡	平安
17	大門後遺跡	平安
18	坂上遺跡	平安
62	大塚經塚	平安
63	塙穴遺跡	平安
67	立寺古墳境内	近世
68	休息經塚	平安
69	本立寺後	近世
70	大型蛇跡	近世
山梨市		
83	十王堂遺跡	奈良・平安
84	中沼遺跡	平安
85	神明遺跡	奈良・平安
95	阿弥陀堂遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
96	天神原遺跡	平安
97	宮ノ西遺跡	古墳・中世
103	大領遺跡	平安・中世
104	猪口星敷	古墳・平安・中世
107	三ヶ所遺跡	平安・中世
109	東後屋敷遺跡	縄文・奈良・平安
123	宮ノ前遺跡	平安
171	武田金吾星敷跡	中世
175	通方星敷	中世

表1 周辺遺跡一覧表

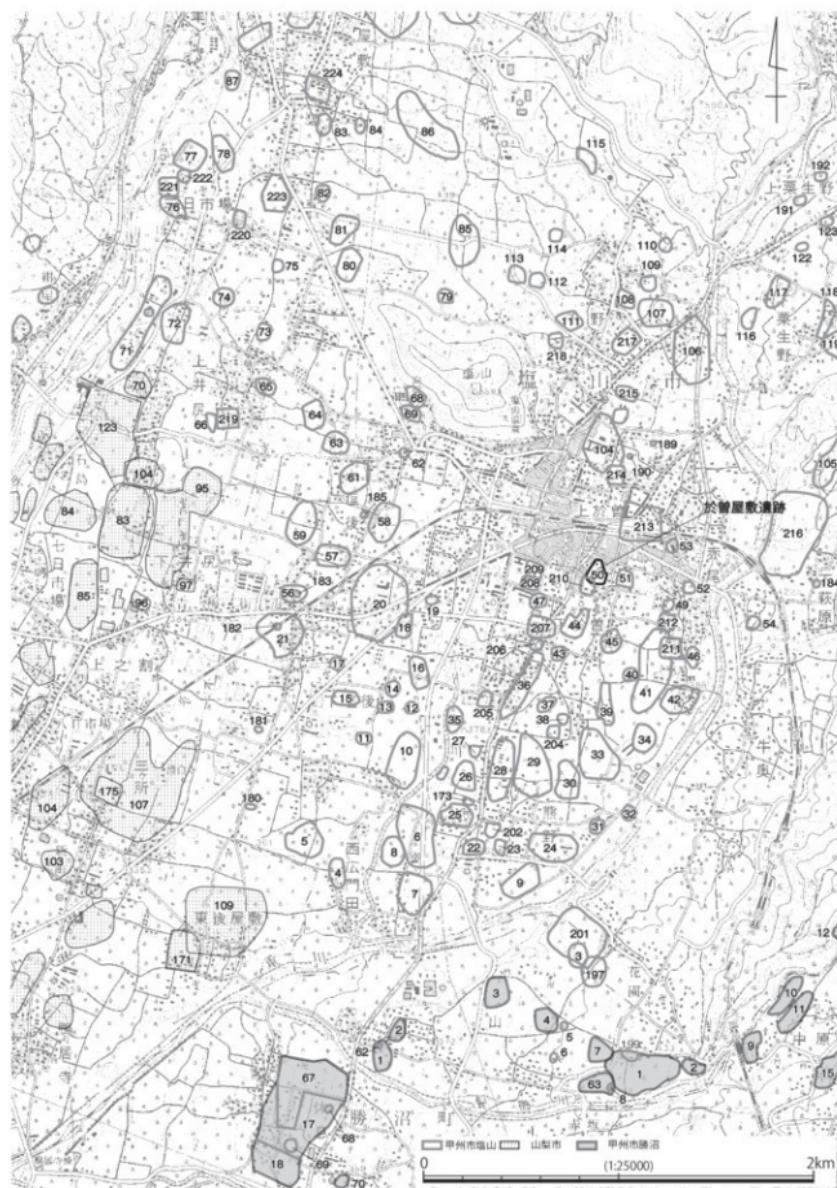


図3 遺跡分布図

一部南側へトレンチを設定したところ、南へは柱穴が続かないことがわかった。また1号河道内とその脇には集石・土坑があり、調査区外に一部かかるため、可能な範囲で拡張してその性格把握に努めた。

第2節 層序

調査区は現状で碎石の駐車場で、西側の堀（旧権兵衛川）などには盛土、整地が行われている。中央部分では削面があり、全体として東側に傾斜した土地である。遺構確認面までの深さはまちまちだが、調査区南壁では約20cmと浅い。また遺構までの深さは、1号河道北壁側で約1.5m、2号河道で約2mと深い。基本層序としては、碎石層直下に暗褐色土または褐色土の旧表土層があり、下層がすぐに遺構確認面の黄褐色土（花崗岩礫混じり）となる。これは旧表土面から地山面までの間が非常に浅いため耕作による搅乱で表土下層の土層が單一化した状況が考えられる。

第3節 遺構と遺物

1号河道（第5・9・15～23図、図版2）

調査区西端に位置する河道路で、東側よりL字状に南に屈曲する。底面には花崗岩の巨礫が多量に堆積し、河道の底面は未確認だが、砂層や泥層となる。調査区の西壁長は約12mあるが、河道路は幅を越えて存在し、北側では幅6m以上、南側は幅3m以上を測る。北側では調査区北壁に沿って東に幅15m程度のびるが、1号集石、1号土坑の一部を流路として取り込んでいる。川底、壁面の巨礫は2～3mの大きさのものが多数あり、最大のもので長さ約4.5mある。中でも注目されるのは、北壁寄りの川底の2.6×1.6mの花崗岩礫で、礫を3分割するようにクサビ（矢穴）列がT字状に穿たれている（幅6～7cm、長さ5～8cm、計23箇所）。ただし途中で分割を断念したらしく、放置された状況である。

土層断面図は北壁で作図し、1号集石、1号土坑付近までを河道とみた。この断面図によれば河道の流路中心は北西隅から約3.5m付近にあり、深さ1.45m、幅4.7mのV字状断面を呈する。堆積土は最も厚い13層が暗褐色土で、大正～昭和初期（戦前）の陶磁器類、ガラス瓶類を多量に含んでいる。その上層の5・11・12層が昭和40年代以降の埋め土であろう。14層以下32層にかけて砂層、砂質土層、黄色土などが堆積するが、巨礫に阻まれて下層を十分に

調査することはできなかったが、礫層面の砂層中から五輪塔部材や土器類が出土し、明治期を中心とした陶磁器類も混在している。したがって最下層面が中世面とはいがたく、聞き取りで戦後まで水流があったということから、遺物出土層位を遺物の時代と判断することはできない。ただし五輪塔は河道底面で出土する傾向がみられた。

また、河道の東側が段丘状に低いのも特徴で、その面に五輪塔部材や土器類等が点在する。完形品の皿が2点ほど出土したこと、巨礫の上に載った状態の地輪があることから、供養塔として堀周辺に五輪塔が設置された可能性がある。ただし地輪下面にはとくに掘り込み等の構造はなく、原位置をとどめるものではない。河道の東側は二重土塁の外土手の延長線上に相当するが、土塁の痕跡を見出すことはできなかった。

この河道は、古絵図にある「権兵衛川」である。塙山駅方面から南流する自然流路を屋敷北東方面で南西向きに曲げ、屋敷北東隅で内土手と外土手の間に流している。かつては堀の中に滝のような段差があつたとも、その水流を利用して佐藤家の脇には水車小屋があったともいわれている。

遺物の出土状況を整理すると、1号河道の覆土を中心に大正～昭和初期の遺物が多数出土した。それらは河道の窪みや斜面一帯が町内の割れ物の捨て場として利用された際の廃棄物であったと考えられる。佐藤家の西側には土塁の外土手の一部が遺存し、竹藪となっているが、調査区内もそうした状況だったろう。広瀬家の聞き取りで「五輪畠」と呼ばれる場所がこの一帯に相当するが、河道内では、五輪塔は覆土下層から河道底面で出土する傾向があるほか、東側の巨礫の上や礫の間から出土している。

遺物には1の土師器壺、20・21の縄文土器片、22～25の須恵器片、26の土師器壺片は混入遺物とみられるが、2～19の土器皿（かわらけ）、27の瀬戸美濃系の鉄釉三筋壺、29の常滑窯は中世遺物として重要である。これらのうち4・5・8は完形品である。土器皿で注目されるのが2・3の手づくね土器で、2は浅い皿状、3はやや深い杯状である。ともに12～13世紀頃か。それ以外のクロコ成形の土器皿（土師質土器）は、体部に強い稜をもつ5、口唇部がやや尖った10・11、やや丸く肥厚した8・11・18などがあり、時期差が存在するとみられる。大中小のサイズがあり、4・6・7は小形、19は大形で、

とくに大形皿を含むのは館跡の性格が公的な場であったことを意味する可能性がある。

近世のものには32・33の培烙、30の七輪などがある。近代のものは35~45の陶器類、46~106の磁器碗皿類、107~165のガラス瓶、容器・人形・機械栓などの類、166~172のセルロイド製櫛・かんざしの類、173~177の歯ブラシ、178~180のその他の土製品、181・182の丸瓦状土製品、183の打斧、184の石鉢、185~191の五輪塔、192・193の石臼、194~197の錢貨・キセルがある。

37は油徳利。38~40は汽車土瓶で、41も汽車土瓶か。42はいわゆる鳩徳利。44は「□山駅」と記された酒徳利で、駅関連資料である。磁器碗には丸碗系と角碗系があり、それぞれ大小の大きさがある。またさらに小形の杯（81~89）、湯飲み茶碗（90~94）に区別できる。磁器碗類は文様の絵付方法で区別でき、幕末頃の手描き染付、明治頃の型紙摺絵、明治~大正期の銅版転写、大正5年頃始まったというゴム版などがある。小形の杯には戦時中の資料がある。83は飛行機を載せた鉄兜形で、正面には陸軍の象徴である星章が陽出され、内面には「武勇」の文字がある。また81は内面に「満州派遣」「凱旋記念」、「歩四九」、底に「矢崎」とあることから、歩兵第49連隊に所属した矢崎某が満州派遣のち凱旋した記念盃である。歩兵第49連隊は甲府に設置され、昭和11年（1936）頃、満州に派遣されている。80は247と同じ田邊酒造の「塙乃山」の印を内面にもつ碗。外側には「しほの山差出の磯にすむ千鳥君が御代をば八千代とぞなく」（「古今和歌集」）の歌を印す。塙の山は甲斐の国の歌枕であり、枕詞である。104は内面に国鉄の動輪マークとレール断面形をデザインしたもので、裏面の印文から大正10年10月14日の鉄道記念日の記念プレートと判る。

小形のガラス瓶は丸瓶と偏平瓶に区別できるが、107~117が前者、118~126・129が後者である。また陽刻文字をもつものでは毛染め（110~113・120・124）、ラッカー（116）、痛み止め（122・126）があり、そのほか側面に目盛があるものは薬瓶とみられる。また129は目薬瓶で、下の孔にゴムのキャップ状のものが付いていた。130~134は甘味飲料瓶で、瓢箪形（130~132）、人形（134）、瓶形（133）がある。ニッキ水、ミカン水などの駄菓子系の容器である。140はピストル形の金平糖入れ、137・138は化粧クリーム瓶。135はインク瓶

か。141は底部に「味の素」と陽刻があることから調味料入れである。145は磁器製のフック。143・144はパレットで、性格は不明。147・150は牛乳瓶。142は洋酒瓶か。

158~160は機械栓。161は水兵の人形。162は日傘を持つと思われる着物姿の女性像。163は靴を履いた脚片。164は亀だが、性格は不明。165は生糸の紡織に関する集録器。

166~171の櫛は、側面上からみるといすれも湾曲したセルロイド製で、いくつかの分類が可能である。

178は泥面子（めんこ）の類で、表面に型押しによる文様をもつが、絵柄は不明。179は完形の土鈴。180は碁石墨。

181・182は側辺に調整痕をもつ丸瓦らしき土製品で、内面には布目痕ではなく、表裏面とも無文となっている。中世の丸瓦の可能性があり、この付近に寺院跡を想定すべきかもしれない。

185・186は空風輪、187は水輪、188~191は地輪。空風輪2個、水輪1個、地輪4個を図示したが、そのほか、風化、破損が著しい大形の火輪1点がある。空風輪はノミ痕が明瞭で、185が空輪部を丸く成形するのに対し、186は溝を彫って空輪と風輪を区別する。時期差であろうか。地輪は大中小3サイズがあり、小（188）は幅18cm、高さ11cm、中（189・190）は幅21~22cm、高さ15~16cm、大（191）は幅21cm以上、厚さ15cm以上であり、大形の191は石材が凝灰岩で、古手と考えられる。小・中形では整形痕が残り、下面是中形で大きく窪む傾向にあり、粗い加工痕が残っている。大形の191は風化しやすい石材のためか整形痕がほとんど確認できない。

石臼の192は半欠の穀臼の下臼で、裏面は深く窪み、溝が切ってある。

194・195は遺物洗浄時、ひとつガラス瓶内から半分に折れた状況で見つかった寛永通宝、文久通宝。196は明治10年（1877）銘の半錢。

2号河道（第10・24図、図版6）

調査区東側の落ち込みで、東端の南流する3号河道から分岐するようにしてローム面を深くえぐり込んでいる。この上層に1~5号溝同様の幅1mの耕作溝が存在した（6号溝）。それを掘り下げていく中で大形土坑状の落ち込みがあり、「2号土坑」

したが、最終的には河道とした。南北7m、幅4m、深さ約2mのやや南西方向に向いた落ち込みで、3号河道との境には花崗岩の巨礫が多数存在している。

遺物は土器皿類、陶器類、磁器碗皿類、土器擂鉢、土器焰烙、瓦、砥石、茶臼、凹み石などがある。

土器皿類（土師質土器）は器壁がやや厚く、口唇部が丸いものがみられる（198～201）。203は土師質の3足をもつ香炉片。204は志野鑄皿、206は天目茶碗で、中世末～近世初頭。217の土器擂鉢も中世か。222の茶臼は2号河道、3号河道の境付近の河道覆土中出土の下白で、半欠品である。そのほか図示しなかったが、風化が著しく銘が全く判読できない銅鏡1点が出土している。

3号河道（第10・25～27図、図版6）

調査区東端、道路に面し、2号河道と隣接する落ち込みである。規模は不明だが幅2.5m、長さ5.5mにわたり南流する河道状を呈している。底や2号河道境には花崗岩の巨礫があり、そのうち1.7×1.3mの巨礫には上面割れ口に矢穴列（幅3.3～5cm、長さ5.2cm、10箇所）があり、上側を割って除去したものと思われる。河道内には幕末、明治、大正、昭和にかけての陶器やガラス瓶などがまとまって出土した。

遺物には土器皿類（224～226）、土器灰もらい（228）、内耳土器（227）、陶器（229～239）、繩文土器（240）、縄羽口（241）、磁器碗皿類（242～259）、ガラス瓶（260～262）、錢貨（263）、金属製蓋（264）がある。228はハート形の窓、背後に円孔2つがあり、側面、上面に型押しの文様が付く。239は涅美常滑系の中世陶器壺で、竹管による沈線文をもつ。磁器碗類には型紙摺り、銅板転写、ゴム印を主とするが、250のように手描きでブドウを描いた皿もある。247は清酒「塙乃山」の杯。259は円筒形を呈した白粉入れ。261・262はインク瓶。263は文字判読が難しいが、文久通宝とみられる。264はメッキを施した金属製蓋で、近代の所産。

1号石組（第8・27・28図、図版3・4）

調査区中央、南側壁寄りに位置する方形石組遺構で、西側に9号ピットが接する。当初、重機での表土剥ぎのさいに地山を見極めるために壁際に深掘りを入れたが、1号石組の覆土内であったため、黒色

土が下層まで続き、何らかの遺構と考えられた。1号溝（耕作溝）南側を調査中に石積が確認され、ベルトを設定して掘り下げたところ、四面を石で積み上げた方形石組が見つかった。石組内の覆土中には礫が多数入りこんでいたが、それらは主に東壁面の石積みが崩落したものと考えられる。

石組は内法で南・北壁の幅2.0m、西・東壁が2.2mあり、北壁では3段、高さ0.5m、西壁では4段、高さ0.85m、南壁では5段、高さ0.95m、東壁では5段、高さ0.8mを測り、幅30～45cm、厚さ15～20cm程度の円礫（河原石）を平積（重箱積）にしたもので、石の隙間に拳大の小さな礫を詰めている。底面はほぼ水平の土間で、全体に硬化している。覆土は確認面以下3層が認められ、上から2層（暗褐色土）、3層（黒褐色土）、4層（暗褐色土）となる。水溜石遺構に類似しているが、サビの形成などはない。北側壁の東寄り（北東隅）には、幅70cm、長さ80cmの傾斜面があり、床面は硬化した状態であった。その部分の石積みが内側にせり出し、五輪塔地輪が握えられているが、これは土圧で押されたものではなく、当初からの配石とみられる。したがって、傾斜面と石積みのせり出しを合わせて考えると、この部分がこの遺構への出入口と考えられ、本遺構は半地下式の貯蔵庫ではないかと思われる。床直にあたる覆土4層には炭化物や焼土ブロックがやや多く含まれていたため、現地で2袋程度の土壤採取を行い、整理段階で炭化種実抽出のための水洗選別を実施した。その結果、イネを中心栽培植物の炭化種実が得られた（第4節参照）。それらがこの遺構に貯蔵されていた可能性もあるが、おそらく周囲からの流れ込みによる混入とみられ、遺構廃絶頃の於曾屋敷および周辺屋敷地の食糧事情を示す資料といえる。本遺構は主軸の類似から重複する1号掘立柱建物跡と同時期か、ほぼ同時期の重複と考えられ、前者に立てば建物の床下構造として収納施設が設けられていたと考えたい。なお、出土した焼土ブロックは被熱した壁土の可能性があり、石組に伴う建物が火災を受けた可能性がある。なお周囲からの導水のための溝や石組に伴うようなピット等は確認されていない。

遺物には土器皿類（265～269）、灰釉皿（270）、内耳土器（272）、五輪塔地輪（275）、繩文土器（273・274）がある。土器皿類は器壁がやや厚く、口唇部がわずかに丸く肥厚気味のものがある（267

～269）。270は瀬戸美濃大窯の第3・4期頃、16世紀後半と考えられる。275は北側出入り口から降りたステップとして設置されていた地輪。

1号土坑および周辺遺物（第9・28図、図版4）

調査区中央西寄りで、北壁にかかるようにして確認された土坑状の落ち込み。1号河道の延長上にあたり、河道岸のえぐり込みと考えられるが、中世の渥美片などがこの付近からまとめて出土したため、北壁を50cm幅で拡張し、土坑の広がりを探った。ここでは現場での遺構名を残して遺物などを報告する。調査区外にかかるため、北壁断面では約2×1.5m、深さ40cmの半円形として把握したが、本来は円形土坑か。土層断面は1号河道東端と重なるように同じような位置で作図しているが、1号河道の26層（暗褐色土）を覆土とし、覆土から底面にかけて礫が多い。

遺物は土器皿類（276～282）、白磁？壺（283）、渥美甕（284・285）、瀬戸美濃甕（286）、キセル（288）があり、279は完形品である。土器皿類はやや口唇部が丸く、器壁は厚い。283は外面施釉し、近世磁器かもしれない。284・285は渥美甕の胴部下半大形片で、外面粘土接合部に叩きを疎らに施したもので、叩き目の範が同じことから同一個体とわかる。県内では、渥美甕は笛吹市西田町遺跡（一宮町ほか 1997）、大善寺境内（柳原 2015）、深山田遺跡（明野村ほか 2000）などでまとめた出土例があるが、出土遺跡は割と少ない。12～13世紀の比較的短い時期の資料で、手づくり土器とともに時代の指標となる遺物である。286は肩に縦の竹管文を施文した渥美の製安樂文甕片。

1号集石（第5・29～31図、図版2）

1号河道内、調査区北壁にかかるようにして検出された集石遺構で、巨礫の上に小礫を多数重ねたような状況を呈し、周囲や礫の間に五輪塔がいくつか点在した。

集石の規模は3.5×2.5m程度で、立石状の石の高さは50cm程度ある。下層には40～50cm大の礫を組合せたような構造があり、その上層に15cm程度の礫をまとめている。それらを除去し、一部礫を外して下層を探ったが、とくに下部構造や遺物の出土はない。下層の配石状石組については人工的と判断するのは難しいが、上層の礫のまとまりは人工的といえ

る。五輪塔は上層の礫間から空風輪や水輪などが散在した状態で出土したが、最下層の礫脇から出土した空風・火・地輪は3点がまとまって出土したことから、原位置付近で倒壊した状態の可能性がある。そのほか、鉄袖筒などが集石付近で出土している。

遺物は土器皿類（289・290）、陶器碗（291）、常滑甕（292）、渥美甕（293～295）、常滑甕（297）、内耳土器・焰烙（298～301）、石鉢（302）、凹み石（303）、五輪塔（304～309）、石臼（310）がある。

五輪塔は空風輪2点（304・305）、火輪1点（306）、地輪3点（307～309）である。これらのうち305・306・308は集石南側下層から出土し、水輪を欠くもののセットの可能性がある。地輪は上面を側面同様に調整して仕上げ、下面是粗い成形痕を残す傾向があり、308・309にそうした状況が認められる。ただ1号河道のように裏面を深く抉ったものはない。大きさとしては幅16cmの小形、20～21cmの中形がある。310は半欠の穀臼下臼。

1号掘立柱建物（第6・7図）

調査区中央のピット群の中にいくつかの並びがある。明瞭なのは3～8号ピットで、3・5・6・8号ピットが方形に配置し、その間にやや小形の4・7号ピットが存在する。当初、この部分を掘立柱建物跡と考えたが、3・6号ピットの延長線上には西側、1号河道寄りに13・40号ピットが存在する。また5・8号ピットの延長線上に17・9号ピットがあり、それらをつなぐ東西12.2m、南北3.4～3.8mの部分を1号掘立と認識した。西側の辺がわずかに長い長方形となる。その中央西寄りには1号石組が存在する。1号石組は東壁を中央軸線に合わせるようにして9号ピットに接して構築されているため、掘立柱建物の西側に寄っているが、1号石組出入口とみられる落ち込みが建物中央部分に位置している。ピットの直径は70cm～1m、深さ80～1.4mあり、断面を作図したいくつかには、中央に柱痕状の堆積状況を示したものがある。また6号ピットは覆土中から大窯の灰釉皿片が出土したことから、建物は16世紀代と考えられる。柱穴のうち、17号ピットは風化した花崗岩巨礫の脇に礫を穿つよう掘られている。また9号ピットは円筒形の土坑状で、平坦な底の中央底面には礫を数個配している。ほかのピットと比較すると柱穴形態とは異なっている。

6～8号ピットの並びについて、北側に続かないが、南側には8号ピットと近い位置に56号ピットが存在し、さらに柱穴列が南側に延びる可能性があった。そこで埋戻し時に重機で幅2m、長さ5mほどトレシチ状に掘削し、遺構確認を行ったところ、柱穴列が延びないことを確認した。したがって本建物跡は南北3本（西辺では2本の可能性）、東西4本（中央の窓を柱穴とすると4間の可能性）がある。

建物と石組との関連については一体のものとして同時期とする見方と、時期を異にする重複の可能性の両者を考える。前者であれば床下構造と考え、建物から約1.7mはみ出しており、東柱の高さ、建物の軒または外縁的な構造を考慮しなければならない。石組は現状で深さ1m程度であり、そのままで高さが低く、中の活動に支障がある。

ピット（第11～14・31図、図版5）

1号掘立柱建物のピットを含め、計56本のピットがある。シミ状の浅いピットなども多数存在するが、Naをつけたピットは遺構として良いだろうと思われるものに限定し、深さ、直径は表2参照。

ピットのうち、注目すべきものに46号ピットがある。直径0.45～0.6m、深さ約15cmで、調査区外にかかる不整円形の落ち込みであるが、開元通宝2枚、聖宋元宝1枚、計3枚の銭貨がまとまって出土した（316～318）。埋葬墓に副葬された六文銭の半分の可能性があるが、人骨など墓坑関連の出土品はな

い。周辺出土の五輪塔との関連性が考えられ、浅い土坑状遺構とみられる。銭貨は9号ピットからも1点、聖宋元宝が出土している（313）。

44号ピットは上層に集石をもつ円筒形のピット（土坑）で、底面の隅には円周状の溝が巡る。これは近世に特徴的な埋桶遺構とみられ、廃棄時に礫を投入したらしい。

53号ピットは底面に20×25cm大的平石を平らに据えたピットで、礎板石とみられる。それに類似したピットとして55号ピットは直径18cm程度の円窪をピット底面に於いている。両者は1号掘立の内部、または近くに存在するが、直接建物のピット列の一部をなすものではないものの、何らかの柱穴に関わるピットであろう。

覆土に礫が入り込んだ例に54号ピットがある。これは礎板石ではなく、廃棄後に落ち込んだような石の出土状況を呈している。

56号ピットは円形の柱穴状ピットで、調査区南壁にかかって検出されたため、北側からみた断面図を作成した。それによれば覆土中央に柱痕状の落ち込み（2層 黒褐色土）が存在する。1号掘立に関連した柱穴かもしれない。

そのほか、中世関連の遺物には6号ピットの大窯灰釉皿（311）、19号ピットの天目茶碗（314）、45号ピットの土器皿（315）があり、前者は1号石組出土例と同じ頃、16世紀後半代とみられる。

ピットNo.	長径m	短径m	深さm	ピットNo.	長径m	短径m	深さm	ピットNo.	長径m	短径m	深さm
1ピ	0.434	0.422	0.369	20ピ	0.6	0.401	0.48	39ピ	0.591	0.457	0.28
2ピ	0.537	0.453	0.501	21ピ	0.567	0.524	0.342	40ピ	0.988	0.645	0.505
3ピ	0.912	0.803	0.625	22ピ	0.901	0.855	0.509	41ピ	0.549	0.475	0.567
4ピ	0.604	0.531	0.273	23ピ	0.361	0.343	0.228	42ピ	0.404	0.379	0.283
5ピ	1.109	1.039	0.823	24ピ	0.346	0.306	0.34	43ピ	0.395	0.374	0.176
6ピ	0.945	0.731	0.76	25ピ	0.448	0.394	0.45	44ピ	0.7	0.64	-
7ピ	0.649	0.565	0.531	26ピ	0.361	0.307	0.393	45ピ	0.463	0.438	0.381
8ピ	0.814	0.765	0.678	27ピ	0.912	0.735	0.292	46ピ	0.555	0.426	0.16
9ピ	1.044	0.988	0.709	28ピ	0.584	0.533	0.395	47ピ	0.32	0.31	0.286
10ピ	1.024	0.908	0.646	29ピ	0.28	0.234	0.212	48ピ	0.315	0.281	0.305
11ピ	0.492	0.469	0.394	30ピ	0.698	0.563	0.355	49ピ	0.64	0.575	0.348
12ピ	0.369	0.34	0.349	31ピ	0.467	0.406	0.26	50ピ	0.279	0.221	0.154
13ピ	1.218	0.898	0.618	32ピ	0.275	0.25	0.314	51ピ	0.79	0.47	0.738
14ピ	0.734	0.627	0.125	33ピ	0.134	0.306	0.296	52ピ	0.35	0.297	0.352
15ピ	0.871	0.798	0.77	34ピ	0.712	0.506	0.848	53ピ	0.537	0.497	0.56
16ピ	0.573	0.485	0.381	35ピ	0.276	0.271	0.442	54ピ	84	0.56	0.513
17ピ	1.093	0.922	0.689	36ピ	0.319	0.283	0.425	55ピ	0.587	0.458	0.288
18ピ	0.691	0.483	0.334	37ピ	0.367	0.283	0.18	56ピ	0.865	0.795	0.308
19ピ	0.622	0.569	0.524	38ピ	0.304	0.267	0.24				

表2 於曾屋敷遺跡ピット一覧表

溝（31・32図）

調査区内には南北方向に6本の耕作溝が存在する。幅約1m、長さ7~13.5m、深さ約15cmの直線的な溝で、2.5~2.8m間隔で平行に存在している。遺物は中世~近現代まであるが、ピット群を切ることから、この溝はこの土地が畑地利用された頃の所産と考えられることから、近現代のものと考えておく。4号溝は拡張トレンチ内にものび、土地全体に及んでいるようである。2号溝では1号石組上層にも存在し、また6号溝は南端に掘り方が一部残るのみだが、2号河道上層にも存在した。また東端調査区境付近にも搅乱上層にそれらしいものがあったほか、1号溝西側の1号河道の立ち上がり付近にもあった可能性がある。覆土は1号石組上層の1層が相当し、鈍い黄褐色土となっている。出土遺物が図示されているが、いずれも周辺からの混入で、溝の時期とは無関係である。

そのほか、調査区東側には4・5号溝にかかるようにして円形周溝状の溝が存在するが、これは現代、果樹の周りに肥料を埋めた溝であろう。

遺構外（第32図）

土器皿類（334~337・339・340）、土師器黒色土器坏（338）、焰烙、内耳土器（341・342）、砥石（343）、金属製品（344~348）がある。

第4節 於曾屋敷遺跡から出土した炭化種実

バレオ・ラボ

1.はじめに

山梨県甲州市塙山に所在する於曾屋敷遺跡は、中世の典型的な土豪屋敷とされている。発掘調査地点は、於曾屋敷の北東の外郭部分にあたり、屋敷主に関わる親族などの屋敷地と考えられている。ここでは、方形の石垣で囲んだ半地下式貯蔵庫と推定されている1号石組から得られた炭化種実を同定し、保管された種実や、栽培植物の栽培状況について検討する。

2. 試料と方法

試料の採取と水洗、抽出は、山梨文化財研究所によって行われた。試料は、任意に採取された1号石組遺構内の床面直上の堆積土で炭化物が多く含まれていた部分である。遺構の時期は、16世紀後半と推定されている。

水洗は、土塊を乾燥後、乾燥重量11.6kgについて2.38mmと420μm目の篩を用いた水洗選別法によつて行われた。水洗後、炭化材と炭化種実、その他の3種に分類されていた。

同定可能な分類群の抽出・計数・同定は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。試料は、山梨文化財研究所に保管されている。

3. 結果

同定した結果、炭化種実では木本植物で広葉樹のカキノキ属炭化種子の1分類群、草本植物ではハリイ属炭化果実と、ヒエ炭化穎果、ヒエ属炭化穎果、イネ炭化穎果、モロコシ炭化穎果、アワ炭化穎果、オオムギ炭化穎果、イネ科炭化穎果、ササゲ属アズキ亜属炭化種子の9分類群が見いだされた。この他に、破片のために科以上の詳細な分類ができなかった不明炭化芽が得られた。細分に必要な識別点が残存していない一群を、同定不能炭化種実とした。種実かどうかも不明の、炭化した不明炭化種実も得られた（表3）。

以下、産出した種実について記載する（不明種実と同定不能炭化種実は除く）。

イネが最も多く、破片を含めて115点得られた。ヒエ、アワ、アズキ亜属が少量、カキノキ属とハリイ属、ヒエ属、モロコシ、オオムギ、イネ科がわずかに得られた。

次に、得られた炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は、米倉・鷹田（2003-）に準拠し、LAPGⅢリストの順とした。

(1) カキノキ属 *Diospyros* sp. 炭化種子 カキノキ科

上面觀は両凸レンズ形、側面觀は倒卵形。基部がやや曲がり、突出する。表面にはちりめん状のしわが見られる。長さ9.6mm、幅4.8mm。

(2) ハリイ属 *Eleocharis* sp. 炭化果実 カヤツリグサ科

上面觀は両凸レンズ形、側面觀は広倒卵形。基部が肥厚する。長さ2.1mm、幅1.9mm。

(3) ヒエ *Echinochloa esculenta* (A.Braun) H.Scholz 炭化穎果 イネ科

側面觀は卵形、断面は片凸レンズ形で、厚みは

分類群	採取地点	1号石組
	時期	16世紀後半
	重量 (g)	11,600
カキノキ属	炭化種子	1
ハリイ属	炭化果実	1
ヒエ	炭化穎果	23
ヒエ属	炭化穎果	1
イネ	炭化穎果	29 (86)
モロコシ	炭化穎果	1
アワ	炭化穎果	12
オオムギ	炭化穎果	1 (1)
イネ科	炭化穎果	1
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子	5 (40)
不明	炭化芽	1
同定不能	炭化種実	(28)
不明	炭化種実?	1
合計		77 (155)

表3 於曾屋敷遺跡から出土した炭化種実
(括弧内は破片数)

薄くやや扁平である。胚は幅が広く、長さは全長の2/3程度と長い。胚は幅が広いうちわ型。長さ2.1mm、幅1.6mm、厚さ2.0mm。状態が悪いものはヒエ属とした。

(4) イネ *Oryza sativa* L. 炭化穎果 イネ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は長楕円形。一端に胚が残るものと残らないものがある。両面に縱方向の2本の浅い溝がある。長さ5.2mm、幅2.6mm、厚さ2.8mmと長さ4.8mm、幅2.7mm、厚さ1.9mm。

(5) モロコシ *Sorghum bicolor* (L.) Moench
炭化穎果 イネ科

上面観は楕円形、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置にうちわ型の胚があり、腹面側は平坦になる。胚の長さは全長の1/2程度。長さ2.6mm、幅2.6mm、厚さ1.7mm。

(6) アワ *Setaria italica* P.Beauv. 炭化穎果 イネ科

上面観は楕円形、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚があり、長さは全長の2/3程度。長さ1.3mm、幅1.2mm、厚さ1.0mm。

(7) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化穎果
イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝があるが、溝の両端は欠損している。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面は楕円形。長さ6.0mm、幅3.4mm、厚さ2.9mm。

(8) ササゲ属アズキ亜属 *Vigna subgenus*

Ceratotropis spp. 炭化種子 マメ科

完形ならば上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。胚は全長の半分から2/3ほどの長さで、片側に寄ると推定されるが、残存していない。半割の個体でみると、初生葉は中央下端にむかって伸びる。長さ3.6mm、幅2.9mm、厚さ2.5mm。小畠(2008)に示された現生種と大きさを比較すると、すべて野生種に近い大きさである。

4. 考察

16世紀後半の半地下式貯蔵庫と推定されている1号石組から出土した炭化種実を検討したところ、栽培植物のヒエとイネ、モロコシ、アワ、オオムギが得られた。カキノキ属とアズキ亜属には栽培種と野生種が含まれるが、種実の形態と大きさからは明確に区別できなかった。しかし、炭化して上記の栽培種に伴って貯蔵庫から得られており、少なくとも保管されて利用された種実の可能性が高い。イネは横方向に数本の亀裂が入る個体が多く、「乾飯」にするなど、糊摺後に乾燥した状態で保管されていた可能性も考えられる。湿生～抽水～沈水植物であるハリイ属の果実は、イネに随伴して持ち込まれたなど、偶発的な要因で炭化した可能性がある。

熱帯アフリカ原産のモロコシ(タカキビ)は1点であるが、見出された。モロコシは北海道の擦文時代以降に同定例があるものの、本州での確実な出土例は知られていない(石田ほか, 2016)。今後、さらなる類例の追加や時期の検証が望まれる。

以上のように、於曾屋敷遺跡の周辺では、中世の16世紀後半においてカキノキ属の果樹栽培の可能性と、稲作、ヒエやアワ、オオムギなどの畑作が行われていたと推定される。

(佐々木由香・バンダリ・スダルシャン)

【引用文献】

- 石田糸絵・工藤雄一郎・百原 新(2016)日本の遺跡出土大型植物遺体データベース、植生史研究、24, 18-24.
 小畠弘己(2008)マメ科種子同定法、小畠弘己編「極東先史古代の穀物3」225-252、熊本大学。
 米倉浩司・梶田 忠(2003) BG Plants 和名-学名インデックス(YList)、<http://ylist.info>

第4章 総 括

第1節 於曾屋敷および周辺の遺構変遷

この於曾屋敷遺跡の調査は、県史跡於曾屋敷の北東、二重土塁間の堀(内堀と仮称)、外土手外周の堀(外堀と仮称)、外土手および外郭に相当する部分の調査となつた。したがって内堀、外堀、外土手が存在するかどうか、外郭部にどのような施設が検出できるか、といった点に調査のねらいがあつた。

結果的には本文での報告のとおり、内堀には古絵図にある権兵衛川の流路跡(1号河道)が検出されたものの、堀の構造に関する情報は十分に得られたとはいがたい。つまり戦後まで河川としての流路が存在し、川底や川辺がたえず更新される状況にあつたため、本来の遺構構造をとどめていないといえよう。

外土手推定部分は、調査区内では痕跡が全く確認できず、外土手にあたる1号河道脇から五輪塔地輪等がいくつか見つかっている。それらの中には原位置を保つ可能性があるものはないが、地輪のそばからは完形の土器皿が出土したことから、中世末段階にこの部分には外土手が既になかった可能性がある。権兵衛川の取り入れ口にあたるため、もともと外土手は連結せず、北東隅で土塁が分断されていたと考えられ、当初から調査区内では外土手がなかつた可能性もある。古絵図(図4)にも東北隅までは外土手が延びていない様子がうかがえる。

外堀に相当する掘り込みは調査区内には存在しない。古絵図にはコピー右側が切れて全体像が不明だが、外土手脇に外堀相当の水路が描かれている。また注目すべきは権兵衛川が北東角で分岐するように北側の外土手脇に流路を示していることである。於曾公園裏側の外堀にあたる部分は、現在狭い道路になってくぼみ、堀状を呈している。この部分に水路があった可能性があり、外堀の存在は明らかだが、北東部での当初からの欠失状況は明確となった。

今回の調査地点とされた範囲は東西37m×南北16～24mのテラス状の地形で、南側の佐藤家との間には段切状の段差をもつ。地形的には本調査地点から北側にかけて平らに広がり、縁辺にあたる南側には市指定天然記念物の桜の木のほか、昨年春まではケヤキの大木が並んでいた。伐採された年輪からケヤキは100年未満である。また桜は200年以上経てい

るとみえることから、近世、近代以降、現地形は大きく変化していないといえる。

今回の調査で明らかになった掘立柱建物跡と石組遺構は、出土遺物から16世紀後半とを考えられる。東西に長い特徴をもち、石組が併存した可能性を示している。権兵衛川が建物裏側で斜めに横切る限られた地割の中での建物配置である点を勘案すると、本遺構はこの一角の中心的な建物であり、主屋の建物と考えられる。於曾屋敷とこの建物跡との関連は不明ではあるが、掘立柱建物跡がやや東に偏した東西の軸線を持つ点は、屋敷北側の外土手の軸線と類似し、東側内土手と直交方向にあることから、屋敷の向きに合わせたもので、屋敷を意識した配置といえる。また屋敷の内堀のすぐ脇の立地であることから、郭外ではあるが屋敷主と結びつきが強い関係者(親族、家臣団など)の屋敷地として推定しておきたい。

第2節 出土遺物からみた於曾屋敷の時期

今回は於曾屋敷内を調査したわけではないため、本調査区出土遺物をもとに於曾屋敷の時期に言及するのは適当ではないかもしれない。しかし、堀を含めた屋敷の一部、屋敷地隣接地にあたることから、本遺跡出土遺物をもって於曾屋敷そのものの消長を推測することが可能ではないかと考える。

於曾屋敷の年代を考えるうえで参考になるのは、権兵衛川(1号河道)と河道内にある1号集石、1号河道に含まれる可能性が高い1号土坑および周辺出土品である。

平安時代の土器器や須恵器片が少量出土しているが、いずれも角がとれた磨耗品である。ただし屋敷内では宅地開発の調査で平安時代の堅穴が検出されたほか、帝京大の調査では10世紀後半～11世紀頃の脚高高台皿が出土し、この一帯が平安時代に遡る集落域であることが判明している。したがって平安末以前に遡る於曾屋敷に先行する館跡を想定することも可能であるが、遺構として把握できたわけではないため、ここではひとまず勘案しない。ただしそれ以降の館出現に向けた動きとして、注意すべきであろう。

屋敷に関連した遺物で最も古いのは、今回の1号

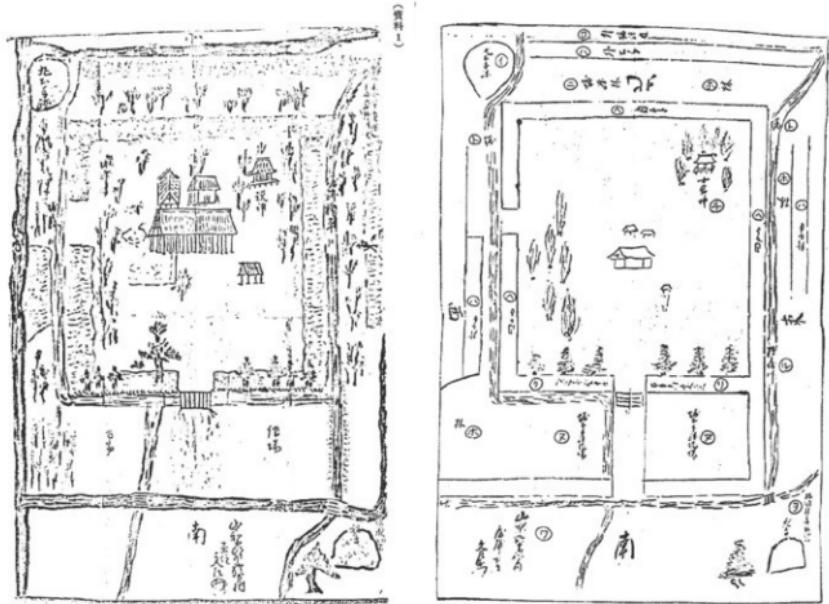


図4 於曾屋敷古絵図

土坑を中心に発見された涅槃片と、1号河道内出土の手づくねかわらけ(手づくね土器皿)である。山梨県内の涅槃焼の出土事例としては、藏骨器として京原遺跡、金地藏遺跡、経塚外容器としては雲峰寺経塚、一の森経塚、篠井山経塚、金峰山山頂遺跡、寺院境内出土例に大善寺、深山田遺跡、館跡出土例に西田町遺跡がある。藏骨器、経塚外容器としての出土例が圧倒的だが、大形の甕であることから本来貯蔵容器として制作された甕が地方では有力層による宗教的容器として貴重品的な価値を帯びていたことがわかる。

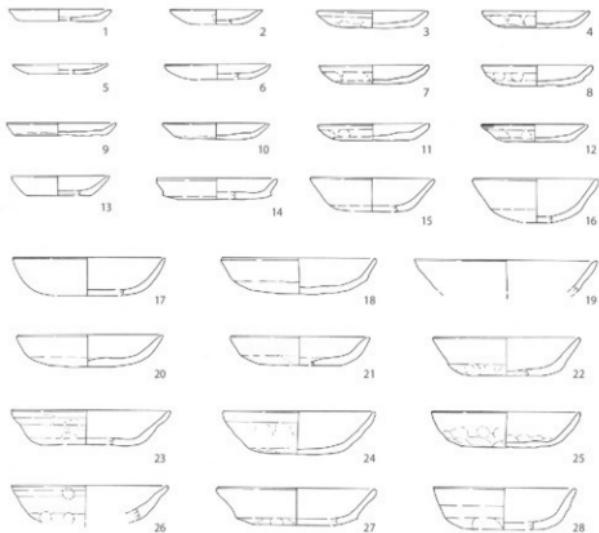
本遺跡と対比できるのは笛吹市一宮町西田町遺跡(一宮町ほか 1997)で、条里溝を一部利用した区画内に配石で根固めした半地下式の倉庫跡と、それに接するようにして東西13.0m・南北4.5mの東西に長い掘立柱建物跡が検出されている(註1)。建物は南北2間(3本柱穴)、東西6間(7本柱穴)で、その南側に1号配石が配置する点は於曾屋敷遺跡とよく似た建物配置構造といえる。ただし、西田町遺跡は12世紀後半~13世紀代とみられ、本遺跡と同一視す

ることはできないし、倉庫跡も西田町遺跡例は非常に大型、複合的である。また西田町遺跡では堀状の浅い落ち込みが北、東側に回り込み、館跡北東部にあたる堀内に円形土坑墓が集中する。その中には常滑三筋甕片が出土し、藏骨器的に用いられたと推測される。つまり屋敷地の北東を墓所にするという点は於曾屋敷遺跡と共通し、構造的類似性を指摘しうるのである。

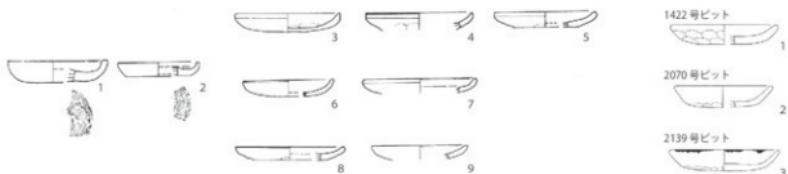
手づくね土器は、底部角を丸く指頭痕調整した皿類で、県内での出土遺跡数は数箇所と少ないが、12~13世紀代に存在することが知られる。とくに鎌倉、伊豆などでは12世紀後半~13世紀前半を中心に行づくね土器が存在し、13世紀後半にはなくなる傾向がある。

韮崎市武田東畠遺跡は、大治3年(1128)に生まれた武田信義の館跡とされる遺跡で、「おやしき」という地名がある。95×57cm、深さ30cmの方形土坑内から破損した手づくね土器がびっしりと出土し、宴に伴う廐棄土坑と考えられている(関間 2015)。同遺跡には一辺4.7mの全面敷石された蔵と考えられる

大師東丹保遺跡 II 区第 1 面



下西畠遺構外



石之坪遺跡東地区 2 号住

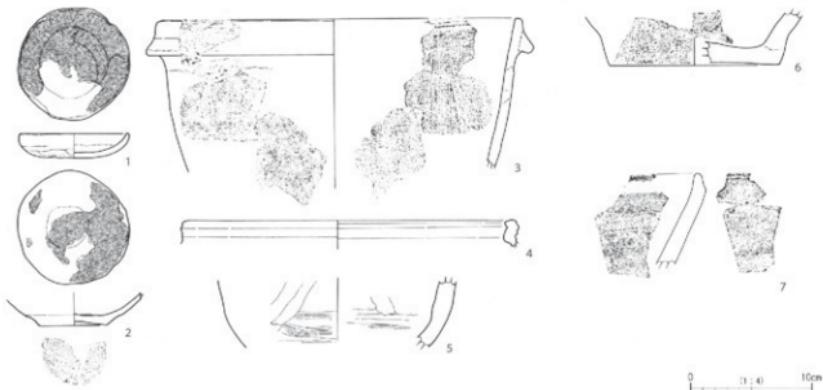


図 5 山梨県内出土の手づくり土器

堅穴状遺構があり、壁には石積がある。

北杜市明野町の深山田遺跡(明野村ほか 2000)は中世在地有力層の屋敷地あるいは寺院跡と考えられ、多数の柱穴群が分布し、14世紀前半～16世紀の五輪塔群が存在する。12世紀以降、近世に至る継続的な遺跡で、12世紀後半～13世紀の常滑・渥美、高麗青磁などとともに手づくね土器3点が出土した。1422・2070・2139号ピットからの出土品で、2070号ピットでは14世紀後半の常滑壺片と共に伴するという。

蘿崎市石之坪遺跡(蘿崎市教委ほか 2000)には二重の方形区画溝、池状遺構を伴う壇状遺構があり、それらは12世紀後半～13世紀前半の遺構群と考えられている。また壇状遺構の北東側には14世紀～16世紀代の五輪塔群を多数伴う墓域(方形集石)があり、13世紀後半の古瀬戸四耳壺、常滑壺片が出土した。それらとともに手づくね土器が出土した2号住がある。2号住は竈がない方形の堅穴で、羽釜、捏ね鉢、外耳鍋を伴う。ここでは二重方形区画溝内を12世紀～13世紀の館跡と考えると、その北東に壇状遺構、方形集石が存在し、於曾屋敷や西田町遺跡同様に北東隅が宗教的、葬送の場となっている。

於曾屋敷に近い下西畠遺跡(山梨県教委ほか 2002)では、遺構外資料として手づくね土器が9点図示されている。青磁碗もあるが、中世的な遺構はない。

甲西町(現南アルプス市)大師東丹保遺跡(山梨県教委ほか 1997)ではⅡ区第1面から柱状高台皿、外耳鍋、捏ね鉢、片口鉢、青磁碗、常滑壺、山茶碗のはか、漆椀、皿、箸などの木製品が多数出土している。掘立柱建物跡が数棟あり、区画溝に囲まれたものもある。遺物は居住域を中心に見つかっており、概ね13世紀代と推測されている。手づくね土器は30点以上図示され、県内では最も出土点数が多い。器形的にはやや大形の壺状と皿状土器があり、皿状のものは漆皿と器形が類似する。またⅢ区1面でも1点図示されている。

そのほか、甲府市武田氏館跡で数点出土し、2016年に調査された甲府市西耕地遺跡でもまとまつた資料が得られている。この西耕地遺跡に関しては館跡の区画溝とみられる遺構がある(註2)。

このように手づくね土器が出土した遺跡には、12～13世紀の館跡を中心とし、京都の土器を模倣した東国武士が用いた中世の土器という性格が与えら

れている。ただ、山梨県内ではまだ資料不足の感は否めず、技法や器形的な特徴が十分に明らかにされているとはいいがたい。

渥美と手づくね土器を中心に山梨県内での遺跡例を概観したが、それらが12～13世紀の館跡を中心とした遺跡に伴う事例が多いこと、館跡の構造として深い堀を伴うものではなく、2条または1条のやや浅い区画溝に囲まれた館の本体と、その北東隅に宗教的、葬送に関わる場があることを石之坪遺跡、西田町遺跡との類似性から指摘した。また建物配置は、南側中央に半地下式の蔵を持つ西田町遺跡との共通点があり、武田東畠遺跡でも半地下式蔵の存在が推定されるなど、主屋と蔵が一体化した屋敷構造のあり方が特徴といえ、12・13世紀以降、16世紀にわたりそうした系譜性がうかがえる。

なお、石之坪遺跡では一辺90mの区画があり、墓域、墳墓堂的な施設を北東側に伴うが、これに類するものとして著名な事例では栃木県下古館遺跡、愛知県田所遺跡などが知られる。於曾屋敷もまた中世初頭の区画構造を継承する形で、中世後期以降、土塁を備えた構造に発達した可能性がある点を推定しておきたい。今回の調査で手づくね土器や渥美などの館跡特有の土器、陶器類が出土したこと、中世初頭にすでに館が成立していた可能性が強まった。当初は二重区画溝であったものがその後、二重土塁、内堀、外堀の成立へつながっていった想像したい。

今回の成果により、12世紀後半頃に館主として想定される於曾四郎光経の伝承が考古学的裏付けを伴って現実味を帯びてきたといえる。ただし、考古学的な調査による館の出現、形成の解明と、館主の比定の間にはなお隔たりがあり、後者の解明には文字史料による補足を要す課題といえる。

【参考文献】

- 塩山市文化財審議委員会 1977『於曾屋敷調査報告書』
山梨県教育委員会ほか 1997『大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区 一般国道52号線(甲西道路)改築工事および中部横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第132集
一宮町教育委員会・西田町遺跡発掘調査団ほか 1997『西田町遺跡調査報告書』一宮町文化財調査

報告 第23集

- 明野村教育委員会・峠北土地改良事務所 2000『深山田遺跡 県営圃場整備事業に伴う奈良・平安時代・中世の遺跡の発掘調査報告書』明野村文化財調査報告 12
- 蘿崎市教育委員会・石之坪遺跡発掘調査会・峠北土地改良事務所 2000『石之坪遺跡(東地区) - 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
- 山梨県教育委員会・山梨県土木部 2002『下西畠遺跡 西畠遺跡 影井遺跡 保坂家屋敷墓・国道411号(塩山東バイパス)建設工事に伴う発掘調査報告書 -』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第196集
- 関間俊明 2015「武田東畠遺跡」「山梨考古」135
- 櫛原功一 2015「山梨県白山平経塚の確認調査」「帝京史学」第30号
- 八重樫忠郎・高橋一樹 2016「中世武士と土器」

【註】

(註1) 西田町遺跡(一宮町ほか 1997) 第16図～第18図の縮尺は1:60ではなく、1:80の誤りである。したがって、本文中の掘立柱建物跡の規模、柱穴間にに関する規模の記載は誤りであり、例えば4号掘立柱建物跡の東西9.7m、南北3.2mは、正しくは東西13m、南北4.4mとなる。

(註2) 本稿記載後、甲府市榎田遺跡(甲府市教委ほか 2016)でも手づくね土器が出土していることがわかった。SP40-49、SD19-86などであり、同遺跡からは外耳鍋なども出土していることから、12世紀後半～13世紀とみてよい。山梨県中北建設事務所・甲府市教育委員会・公益財團法人山梨文化財研究所 2016「榎田遺跡 - 都市計画道路高畠町界仙崎線街路事業に伴う甲府市千塚4丁目3048-9他及び千塚5丁目3046-1地点の発掘調査 -」甲府市文化財調査報告84

表4 於曾屋敷 土器・陶磁器觀察表

国別 番号	地點	掲載 No.	種別・器種	時期	口／底／高(cm)、残存%	技法(外・内・底)・色調 (外・内)・胎土色・鉢色	胎土・焼成・備考	注記
15	1河	1	土師・环	平安、 10c前半	(9.8) / / ~, -	ナデ/ナデ//、橙色	密、白・赤・良、外面黑 斑	1河鑑
15	1河	2	土器・手捏ね皿	13c	(9.2) / (6.6) / 12, 20%	手捏ね/ナデ/手捏ね、橙色	密、白・赤・雲、良、内面 一部黒斑	1河鑑
15	1河	3	土器・手捏ね皿	13c	(10.3) / (5.0) / 31, 45%	手捏ね/ナデ/手捏ね、橙色	密、長・黒・赤・雲・石、 良	1河No.15
15	1河	4	土器・小皿	中世	6.0 / 4.3 / 1.2, はげ完形	ナデ/ナデ//ナデ、橙色	密、長・赤・雲、良	1河
15	1河	5	土器・皿	中世	7.9 / 4.1 / 2.2, 完形	ナデ/ナデ//、純い黄褐色	密、内面薄く黒斑、口脇部斑 痕	1河No.6
15	1河	6	土器・皿	中世	(7.4) / (5.0) / 17, 25%	ナデ/ナデ//系切り、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良	1河
15	1河	7	土器・皿	中世	(7.8) / / ~, -	ナデ/ナデ//、淡い黄褐色	密、白・黒・赤・良	1河
15	1河	8	土器・皿 (灯明皿)	中世	10.0 / 5.6 / 24, 完形	ナデ/ナデ//系切り、橙色	密、白・黒・赤・雲・小 磚、良、灯芯痕、見込部指頭痕	1河No.99
15	1河	9	土器・皿	中世	(11.2) / / ~, -	ナデ/ナデ//、白橙色	密、白・黒・赤・雲・良	1河No.100
15	1河	10	土器・皿	中世	(12.3) / / ~, -	ナデ/ナデ//、純・黃色	密、長・赤・雲・黒・良、 全面薄く黒斑	1河鑑
15	1河	11	土器・皿	中世	(12.0) / / ~, 10%	ナデ/ナデ//、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良	1河鑑
15	1河	12	土器・皿	中世	(10.6) / / ~, -	ナデ/ナデ//、橙色	密、白・黒・赤・雲、良	1河
15	1河	13	土器・皿	中世	(13.0) / / ~, -	ナデ/ナデ//、橙色	密、白・黒・赤・雲、良	1河
15	1河	14	土器・皿	中世	/ (5.6) / / ~, -	ナデ/ナデ//系切り、橙色	密、白・赤・雲、良、内面 一部黒斑	1河鑑
15	1河	15	土器・皿	中世	/ (7.6) / / ~, -	ナデ/ナデ//ナデ、橙色	密、白・黒・赤・雲、良、 底部中央に径9mmの穿孔、 内外面薄く黒斑	1河
15	1河	16	土器・大皿	中世	/ (7.0) / / ~, -	ナデ/ナデ//系切り、純い橙色	密、白・黒・赤・雲、良	1河No.12
15	1河	17	土器・皿	中世	(13.6) / / ~, -	ナデ/ナデ//、淡い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良	1河
15	1河	18	土器・皿	中世	(13.1) / / ~, -	ナデ/ナデ//、橙色	密、白・黒・赤・雲、良、 内外面薄くスス	1河
15	1河	19	土器・大皿	中世	/ (13.5) / / ~, -	ナデ/ナデ//ナデ、橙色	密、長・黒・赤・雲、良	1河
15	1河	20	繩文・深鉢	中期未	/ / /, -	ナデ/繩文/ナデ//、純い黄 褐色	密、白・黒・赤・石・雲、 良	1河
15	1河	21	繩文・深鉢	繩文中	/ / /, -	繩文/ナデ//、黒褐色	密、白・雲、良、内外面 黒斑	1河
15	1河	22	須恵・甕	平安	/ / /, -	ナデ・タキ/ナデ//、灰 色	密、白、良	1河
15	1河	23	須恵・甕	平安	/ / /, -	タキ/ナデ//、灰色	密、白・黒・良	1河
15	1河	24	陶器・甕	中世	/ / /, -	ナデ/ナデ//、灰褐色	密、白、無釉	1河
15	1河	25	須恵・甕	平安	/ / /, -	叩き/ナデ//、	密、白、良	1河
15	1河	26	土師・甕	平安	(28.6) / / ~, -	ハケメ//、褐色	やや粗、長・黒・雲、崩 滅	1河
15	1河	27	陶器・瀬戸美濃、 筋窓	14c	/ / /, -	波状文・稚・三筋/ナデ//、灰 褐色(袖) 肋輪	密、梅瓶形	1河
15	1河	28	陶器・甕	中世	/ / /, -	袖/ナデ//、灰褐色(袖) 灰 釉	密、良、三筋甕	1河
15	1河	29	陶器・常滑・甕	中世	/ / /, -	袖/ナデ/・袖//、褐灰色	密、白・黒・赤、良	1河
15	1河	30	土器・七輪	近代	/ / 21.5 / [19.5], 30%	/ / 22.0 //, 褐色	密、長・赤、良、全面薄 く黒斑	1河
15	1河	31	土器・培塿	近世	(25.0) / (23.4) / 5.6, 20%	ナデ/ナデ//紗底、純い褐色	密、白・黒・赤・雲、良、 内外面薄く黒斑	1河
15	1河	32	土器・甕	中近世	(30.4) / / ~, -	ナデ/ナデ//、橙色	密、白・黒・赤・雲、良、 外面薄くスス	1河
15	1河	33	土器・培塿	近世	(31.0) / (29.2) / 4.5, -	ナデ/ナデ//、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良、 外面スス	1河No.8
15	1河	34	陶器・鉢	中世～ 近世	/ / 10.0 //, -	ナデ・袖/ナデ//、浅褐色 (袖) 鉄輪	密、良	1河No.4
16	1河	35	陶器・急須蓋	昭和初	5.7 / / 3.4, 完形	ナデ・袖・ナデ//、灰褐色 (袖) 茶色	密、良	1河
16	1河	36	陶器・秉燭	近世	(5.8) / 3.0 / 5.2, はげ完形	ナデ/ナデ//系切り、明赤褐色 (袖) 鉄輪	密、良、高台裏面に孔、 灯心台先端にタール	1河
16	1河	37	陶器・油漁利	18c 後 ~19c 前	2.1 / 6.3 / 13.0, 70%	ナデ・袖・ナデ//割り、褐色 (袖) 鉄輪	密、良、口縁欠損部研 磨、孔・把手付	1河
16	1河	38	陶器・汽車土瓶	大正～ 昭和初	(9.5) / / /, -	ナデ・袖/ナデ//、灰黄色 (袖) 灰釉	密、良、外面「けう」	1河
16	1河	39	陶器・汽車土瓶	昭和初	(3.8) / / /, -	型成形、灰褐色(袖) 黄褐色	密、良、外縁・鉄道局指 定	1河
16	1河	40	陶器・汽車土瓶	昭和初	(4.0) / / /, -	型成形、内面施釉(袖) 灰 褐色	密、良、外面「瀬戸」	1河
16	1河	41	陶器・土瓶	昭和初	5.8 / / /, 40%	袖/ナデ・袖//、灰褐色 (袖) 青灰色	密、良	1河
16	1河	42	陶器・鳴德利	近代	2.9 / / /, -	ナデ・灰釉・灰釉//、純い黄 褐色(袖) 灰オーバー色	密、良	1河

団版 番号	地点	樹種 No.	種別・器種	時期	口／底／高(cm)・残存%	技法(外／内／底)・色調 (外／内／胎土色・釉色)	胎土・焼成・備考	注記
16	1河	43	陶器・油壺	昭和	15.4/0.35、完形	スタンプ／輪／ナデ／釉、灰白色・(釉)黄白色・青色	密、良	1河
16	1河	44	陶器・便利	大正～昭和初	~10.0/-,-	ナデ・輪・ナデ・輪／ナデ・輪、灰褐色	密、良、外面部「山駒」 「店」	1河
16	1河	45	陶器・壺		(2.6) /~/-,-	ナデ・輪・ナデ・輪・~、薄い黃 褐色・(釉)灰褐色・黑釉	密、良、釉	1河
16	1河	46	磁器・碗	近世18 c末～ 19c初	(13.6) /6.2 /6.0、40%	ナデ・手描き・ナデ・手描き／ ナデ・輪・薄青色	継密、良、手描き染付 (花)	1河
16	1河	47	磁器・碗	幕末	10.5 /3.8 /5.6、ほぼ完形	輪・手描き・輪・手描き・輪、 灰白色・(釉)白色	密、良、手描き染付 (花、青)	1河
16	1河	48	磁器・碗	明治	11.1 /4.4 /5.6、完形	摺り・摺り／ナデ・灰白色	継密、良、紙摺り	1河
16	1河	49	磁器・碗	明治	11.0 /3.4 /5.0、60%	輪・摺り・輪・摺り・輪、灰白 色・(釉)白色	継密、良、紙摺り(忠 比寿)	1河
16	1河	50	磁器・碗	昭和初	(11.3) /3.8 /6.1、60%	輪・ゴム版・輪・輪・乳白色・ (釉)白色	継密、良、ゴム版(竹、 梅、青)	1河
16	1河	51	磁器・碗	大正～ 戰前	(11.4) /3.8 /6.0、55%	輪・輪・輪・輪・白色・ (釉)白色	継密、良、ゴム版	1河
16	1河	52	磁器・碗	17c後半 大正後半～昭和初	(10.6) /4.3 /57.55%	輪・手描き・輪・輪・灰白色・ (釉)白色	密、良、手描き染付	1河No244
16	1河	53	磁器・碗		12.2 /3.8 /5.1、80%	ゴム版・輪・輪・輪・灰白色 (釉)白色	継密、良、ゴム版(鳳 凰・青)	1河
16	1河	54	磁器・碗	昭和	10.9 /3.9 /5.9、60%	輪・輪・輪・灰白色・(輪)茶 色・綠色	継密、良、釉(ハケメ文 様)	1河
16	1河	55	磁器・碗	昭和初	(11.0) /3.8 /6.1、60%	輪・輪・輪・輪・白色・ (釉)白色	継密、良、ゴム版(山水 圖、綠・青)	1河
16	1河	56	磁器・碗	昭和初	(11.2) /3.8 /6.1、55%	輪・ゴム版・輪・輪・輪・白 色・(釉)白色	継密、良、ゴム版(花、 青)	1河
16	1河	57	磁器・碗	大正～ 戰前	11.2 /3.6 /5.5、75%	輪・ゴム版・輪・輪・乳白色・ (釉)白色	継密、良、ゴム版? (文 字・松・青・綠・ピンク)	1河
16	1河	58	磁器・小碗	明治	(7.6) / (3.3) /4.8、70%	転写／～・輪写落款、灰白色	継密、良、輪版転写・口 唇に輪	1河
16	1河	59	磁器・小碗	明治～ 大正	7.8 /3.2 /4.45、70%	転写／～・灰白色	継密、良、輪版転写(菊 花文・青・青)	1河
16	1河	60	磁器・小碗	大正～ 昭和初	8.0 /2.9 /4.7、ほぼ完形	ゴム版・/～・灰白色	継密、良、ゴム版	1河
16	1河	61	磁器・小碗	大正～ 昭和初	(7.8) / (3.0) /4.6、55%	摺り／～・輪白色	継密、良、紙摺り	1河
16	1河	62	磁器・小碗	大正～ 昭和初	7.8 /2.8 /4.7、完形	ゴム版・/～・灰白色	継密、良、ゴム版	1河
16	1河	63	磁器・小碗	大正～ 昭和初	8.1 /3.0 /4.7、完形	ゴム版・/～・灰白色	継密、良、ゴム版	1河
16	1河	64	磁器・小碗	大正～ 昭和初	8.1 /2.7 /4.9、完形	ゴム版・/～・灰白色	継密、良、ゴム版	1河
17	1河	65	磁器・小碗	大正～ 昭和初	8.3 /3.0 /4.8、ほぼ完形	ゴム版・/～・灰白色	継密、良、ゴム版	1河
17	1河	66	磁器・小碗	大正～ 昭和初	8.3 /2.8 /4.8、ほぼ完形	ゴム版・/～・灰白色	継密、良、ゴム版	1河
17	1河	67	磁器・小碗	大正～ 昭和初	7.9 /2.7 /4.7、60%	ゴム版・/～・灰白色	継密、良、ゴム版	1河
17	1河	68	磁器・小碗	大正～ 昭和初	8.1 /2.7 /4.8、完形	ゴム版・/～・灰白色	継密、良、ゴム版	1河
17	1河	69	磁器・小碗	幕末	7.8 /2.7 /4.6、70%	手描き／～・灰白色	継密、良、手描き染付	1河
17	1河	70	磁器・小碗	大正～ 昭和初	(9.0) /3.0 /4.1、70%	手描き・手描き／～・灰白色	継密、良、手描き(色 板・木・青・黄)	1河
17	1河	71	磁器・小碗	明治～ 大正	(8.0) /3.3 /4.65、70%	転写／～・灰白色	継密、良、輪版転写(鳥 と雀・青・赤)	1河
17	1河	72	磁器・小碗	大正	(7.8) / (3.3) /4.7、50%	転写／～・灰白色	継密、良、網版転写	1河
17	1河	73	磁器・小碗	大正～ 昭和初	(8.0) /2.8 /4.8、70%	ゴム版・/～・灰白色	継密、良、ゴム版	1河
17	1河	74	磁器・小碗	大正～ 昭和初	(7.8) /2.8 /4.7、65%	ゴム版・/～・灰白色	継密、良、ゴム版	1河
17	1河	75	磁器・青磁・小碗	昭和	(7.7) /3.3 /4.3、75%	ナデ・輪・ナデ・輪・巴高台、 灰白色・(釉)黑色氣泡入り	継密、良	1河
17	1河	76	陶器・碗	昭和	8.1 /3.2 /4.3、完形	輪・盛り込み・輪・無釉・薄い黃 色・(釉)灰白色	継密、良、盛り込み(白・茶、 青)	1河
17	1河	77	陶器・万古・小碗	昭和	7.1 / (3.2) /4.5、ほぼ完形	ナデ・ナデ・ナデ・印・輪・白 釉	継密、良、底「萬古」	1河
17	1河	78	磁器・壺	昭和初	(7.3) /3.0 /3.1、70%	～・ゴム版・/～・灰白色	継密、良、内面「乃湯 塚」	1河
17	1河	79	磁器・小碗	昭和初	(8.4) /3.4 /4.5、80%	輪・輪・輪・輪・明緑色・(釉)綠 色	継密、良	1河
17	1河	80	磁器・小碗	昭和初	(8.2) / (3.6) /4.5、45%	輪・ゴム版・輪・ゴム版・無 釉・灰白色・(釉)薄綠色	継密、良、外面部「山梨 県山」田淵酒造場「醸造 」朝代をば八千代と ぞなく(鏡)、内面「酒 山」	1河

団体番号	地点	固有No.	種別・器種	時期	口／底／高(cm)・残存%	技法(外／内／底)・色調(外／内)・胎土色・釉色	胎土・焼成・備考	注記
17	1河	81	磁器・环	昭和初	5.6/2.2/3.0, ほぼ完形	釉・釉・ゴム版／文字、白色・(釉)白	緻密、良、内面(星・桜、金・ピンク)「満州派遣」「武勇」「第四回 肌旋記念」、底「丸峰」	1河
17	1河	82	磁器・环	昭和初	5.6/2.4/3.1, ほぼ完形	釉・ゴム版／釉・釉、白色・(釉)白色	緻密、良、外面部の繪「酒貰ふて今日も翌の版づつみ」	1河
17	1河	83	磁器・鉄兜形环	昭和初	5.6/0.4(1.8)/2.8, ほぼ完形	星形／文字、繪／飛行機形、白色・(釉)茶色	緻密、良、内面(鉄兜、板、金・ピンク)「凱旋記念」	1河
17	1河	84	磁器・环	大正～昭和初	(6.2)/2.6/4.2, 60%	転写//~, 灰白色	緻密、良、外面部文	1河
17	1河	85	磁器・环	幕末	6.3/2.9/4.3, 75%	手描き//~手描き落款、灰白色	緻密、良、外面部文	1河
17	1河	86	磁器・环	昭和初	5.4/2.0/3.0, 70%	転写?//転写?//~, 灰白色	緻密、良、転写、外面部「高砂」、内面鉄兜、銃・国旗・桜・茶(赤・黄・青)	1河
17	1河	87	陶器・小碗	昭和	5.6/3.2/4.6, 完形	型成形、内外浅黄色・(釉)綠釉	緻密、良、緑釉	1河
17	1河	88	陶器・环	昭和	5.9/2.6/3.2, ほぼ完形	ナデ・釉・ナデ・釉・ナデ・純い黃褐色・(釉)褐色	緻密、良、	1河
17	1河	89	磁器・环	昭和	(5.5)/2.0/3.0, 70%	型成形、灰白色(釉)薄青色	緻密、良、浮滑転写	1河
17	1河	90	磁器・环	大正	(5.5)/3.2/6.15, 70%	転写//~, 灰白色	緻密、良、開板転写(釣り人・風景画)	1河
17	1河	91	磁器・环	明治～大正	(5.4)/3.2/5.9, 80%	転写//~, 灰白色	緻密、良、風景画	1河
17	1河	92	磁器・碗	大正後半～昭和初	5.6/3.0/5.8, 完形	釉・釉・釉、明緑灰色(釉)綠色	緻密、良	1河
17	1河	93	磁器・碗	昭和	(5.9)/3.2/5.7, 70%	型成形、ゴム版／釉・釉・灰白色(釉)黃白色	緻密、良、ゴム版(竹に雀、黒・茶)	1河
17	1河	94	磁器・碗	昭和初	(6.2)/3.2//~, 50%	釉・釉・釉、灰白色(釉)薄綠色・黑色	緻密、良、	1河
17	1河	95	磁器・鉢	昭和初	10.6/4.6/5.8, 完形	釉・釉・釉、灰白色・(釉)黃白色	緻密、良、外面部に2つの突起状文様	1河
17	1河	96	磁器・鉢	大正～昭和初	11.0/4.0/5.1, 60%	釉・ゴム版／釉・ゴム版／釉、乳白色(釉)白色	緻密、良、ゴム版(梅花)	1河
17	1河	97	磁器・皿	明治	11.0/6.5/2.5, 60%	ナデ・ナデ・転写染付／ナデ・白色	緻密、良、開板転写(松等)	1河
17	1河	98	磁器・皿	大正	12.8/7.6/1.9, 50%	ナデ・ナデ・転写//ロクロナ・乳白色	緻密、良、開板・鋸版転写(桜・筆・絆・赤・黄)	1河
17	1河	99	磁器・皿	大正～昭和初	(12.8)/8.0/3.0, 45%	ナデ・ナデ・転写//釉・白色	緻密、良、鋸版転写(赤)	1河
17	1河	100	磁器・皿	近世18c末～19c初	9.7/6.6/2.0, 80%	ナデ・手描き//ナデ・手描き//ナデ・無釉・乳白色	緻密、良、手描き染付	1河
17	1河	101	磁器・皿	明治	12.8/7.6//~, ほぼ完形	ナデ・ナデ・富士の船//ナデ・乳白色	緻密、良、船はほとんど褐色	1河
18	1河	102	磁器・鉢	昭和	(15.4)/8.0/6.0, 50%	ナデ・染付//ナデ・ゴム印//無釉・乳白色	緻密、良	1河
18	1河	103	磁器・鉢	昭和	14.5/6.6/5.0, 50%	ナデ・ナデ・転写//ナデ・乳白色	緻密、良、開版・鋸版転写(桜・竹・赤・緑・青)	1河
18	1河	104	磁器・皿	大正10年10月14日	19.0/11.8/3.9, ほぼ完形	ナデ・ナデ・国鉄マーク//釉・文字、乳白色	緻密、良、底部外面部「鐵道五十年祝典記念 名古屋鐵道局 大正十年十月十四日」「日本陶器會社 RC NORITAKE NIPPON TOKI KAISHA」	1河
18	1河	105	磁器・大皿	明治	27.6/16.0/3.6, 60%	ナデ・手描き染付//ナデ・手描き染付//ナデ・乳白色	緻密、良、手描き染付(山水画)	1河
18	1河	106	磁器・ヒトリ	大正～昭和初	2.0/4.4/14.8, ほぼ完形	ナデ・ブリント染付//ナデ・乳白色	緻密、良、転写?文字・乳白色	1河
19	1河	107	ガラス瓶・小瓶	昭和初	0.9/1.6/4.2, 完形	型成形、薄青緑色透明		1河
19	1河	108	ガラス小瓶	昭和初	1.3/2.3/4.4, 完形	型成形、無色透明		1河
19	1河	109	ガラス・瓶	昭和初	1.4/2.5/5.4, 完形	型成形、無色透明	肩に「インキ浦 フレンジ」	1河
19	1河	110	ガラス瓶・毛染	昭和初	1.6/3.0/6.1, 完形	型成形、無色透明	外面部墨、「みや吉染」、底「山二」	1河
19	1河	111	ガラス瓶・毛染	昭和初	1.5/2.7/6.3, 完形	型成形、無色透明	外面部「みや吉染」、底「3」	1河
19	1河	112	ガラス瓶・毛染	昭和初	1.7/2.7/5.9, 完形	型成形、薄青緑色透明	外面部「みや吉染」、底「山三」	1河
19	1河	113	ガラス瓶	昭和初	1.7/2.7/6.0, 完形	型成形、無色透明	外面部墨、「山三」	1河
19	1河	114	ガラス瓶・美瓶	昭和初	1.9/2.1/7.8, 完形	型成形、無色透明	底「TMC」	1河

図版番号	地点	樹種No.	種別・器種	時期	口／底／高(cm)、残存%	技法(外／内／底)・色調(外／内／底色・釉色)	胎土・焼成・備考	注記
19	1河	115	ガラス瓶・薬瓶	昭和初	(1.1) / 2.5 / 77, ほぼ完形	型成形、茶色透明	外面日盛、「王置コロダイン」	1河
19	1河	116	ガラス瓶	昭和初	1.0 / 2.8 / 71, 完形	型成形、無色透明	外面「マメラッカー 藤姫品」、底「[21]」	1河
19	1河	117	ガラス瓶	昭和初	1.3 / 3.5 / 91, 完形	型成形、無色透明		1河
19	1河	118	ガラス瓶・口薬	昭和初	0.8 / 2.4 / 57, 完形	濃青色半透明	外面「ロート口薬」「本舗 山田民」	1河
19	1河	119	ガラス小瓶・薬瓶	昭和初	0.9 / 2.3 / 60, 完形	型成形、濃青色半透明	外面「黒蝶々」『宅間謙製』	1河
19	1河	120	ガラス・瓶	昭和初	1.0 / 2.3 / 61, 完形	型成形、無色透明	外面「西田宋賀堂製」	1河
19	1河	121	ガラス瓶	昭和初	1.0 / 2.0 / 61, 完形	型成形、無色透明	外面「西田宋賀堂製」	1河
19	1河	122	ガラス瓶・薬瓶	昭和初	1.0 / 3.0 / 71, 完形	型成形、濃青色半透明	外面「止痛丁醜」「星鶴 銀樂株式会社」	1河
19	1河	123	ガラス瓶・毛染	昭和初	0.9 / 3.0 / 72, 完形	型成形、無色透明	外面「黒蝶々」「宅間謙製」	1河
19	1河	124	ガラス瓶・毛染	昭和初	1.0 / 2.9 / 84, 完形	型成形、濃青色半透明	外面「志らが赤毛染 ナイスク、底「T.M.」	1河
19	1河	125	ガラス瓶・薬瓶	昭和初	1.0 / 3.1 / 77, 完形	型成形、茶色透明	外面日盛、「中川小堀料院」	1河
19	1河	126	ガラス瓶・金治水	昭和初	10 / 3.2 / 8.8, 完形	型成形、無色透明	外面「外用 金治水」「東京 尾澤製」	1河
19	1河	127	ガラス瓶	昭和初	1.5 / 5.0 / 90, 完形	型成形、無色透明		1河
19	1河	128	ガラス瓶・調味料	昭和初	1.6 / 4.0 / 8.3, 完形	型成形、無色透明	底「AJINOMOTO」	1河
19	1河	129	ガラス瓶・口薬	昭和初	1.2 / 0.5 / 5.8, ほぼ完形	型成形、茶色透明	外面「SANTENDO」。グラスティックの蓋付	1河
19	1河	130	ガラス瓶・ハッカ水	昭和初	1.1 / 14 / 61, 完形	無色透明	瓢箪形	1河
19	1河	131	ガラス瓶・ハッカ水	昭和初	1.1 / 17 / 6.6, ほぼ完形	型成形、薄青緑色透明	瓢箪形	1河
19	1河	132	ガラス瓶・ハッカ水	昭和初	0.8 / 20 / 12.9, 完形	型成形、無色透明	瓢箪形	1河
19	1河	133	ガラス瓶・甘味料	昭和初	0.9 / 1.5 / 9.1, 完形	型成形、薄青緑色透明		1河
19	1河	134	ガラス瓶・ハッカ水	昭和初	0.9 / 2.1 / 13.1, 完形	型成形、薄青緑色透明	人物形、腹に「K」	1河
19	1河	135	ガラス瓶・インク瓶	昭和初	1.4 / 4.0 / 3.5, 完形	型成形、薄青緑色透明		1河
19	1河	136	ガラス瓶	昭和初	2.1 / 5.4 / 99 / 70, 完形	型成形、茶色透明		1河
19	1河	137	ガラス瓶・クリーム	昭和初	3.3 / 4.0 / 3.9, 完形	型成形、白色不透明	底「KING」	1河
19	1河	138	ガラス瓶・クリーム	昭和初	4.2 / 4.7 / 6.3, 完形	型成形、白色不透明	底「KANEBO」「20-4」	1河
19	1河	139	ガラス瓶	昭和初	[2.9] / 7.0 / [7.5], ほぼ完形	無色透明		1河
19	1河	140	ガラス瓶・金平糖	昭和初	[13.9] / 5.9 / 2.6, ほぼ完形	型成形、無色透明	鉄砲形	1河
19	1河	141	ガラス瓶・味の素	大正	2.3 / 4.8 / 15.8, 完形	無色透明	底部「味の素」	1河
19	1河	142	ガラス瓶・洋酒瓶	大正～昭和初	1.4 / 6.1 / 15.7, 完形	無色透明		1河
19	1河	143	ガラス皿・パレット	昭和初	9.9 / 6.7 / 1.0, 55%	型成形、白色不透明	底「實用新案登録第一八」	1河
19	1河	144	磁器・皿・パレット	昭和初	6.5 / 6.1 / 1.0, 25%	表面に釉、裏面無釉		1河
19	1河	146	ガラス瓶・栄養ドリンク	大正～昭和初	1.8 / 3.8 / 10.0, 完形	赤褐色透明	底部近くに「TAISHO PHARM.CO」	1河
19	1河	147	ガラス瓶・牛乳瓶	昭和	3.6 / 4.5 / 14.0, 完形	無色透明	外面に印刷 文字「SNOW BRAND MINERAI MILK」。底部近く「800cc 33 YT」	1河
19	1河	148	ガラス瓶	大正～昭和初	2.0 / 6.3 / 17.7, ほぼ完形	薄青緑色透明	口縁内面磨耗	1河
19	1河	149	ガラス瓶	大正～昭和初	1.7 / 7.0 / 19.8, 完形	薄青緑色透明	内面黒色付着物	1河
19	1河	150	ガラス瓶・牛乳瓶	大正～昭和初	1.8 / 5.8 / 16.5, 完形	薄青緑色透明	外面「均質牛乳 登録商標 TO&CO」底「TH」	1河
20	1河	151	ガラス瓶	大正～昭和初	1.9 / 5.0 / 20.0, 完形	濃緑色		1河
20	1河	152	ガラス・瓶	大正～昭和初	1.6 / 5.9 / 24.9, 完形	濃緑色	外面「金線」	1河
20	1河	153	ガラス瓶	大正～昭和初	1.8 / 5.3 / 24.5, 完形	薄青緑色透明	底部近くに「正 300m 」。底「SN 67 4 16」	1河
20	1河	154	ガラス瓶・ビール瓶	大正～昭和初	1.7 / 7.0 / 28.5, 完形	茶色半透明	肩に「大日本ビール」。登録商標、底部に記号	1河
20	1河	155	ガラス瓶・ビール瓶	大正～昭和初	1.7 / 7.0 / 28.7, 完形	茶色半透明	底部に記号、全体磨耗	1河
20	1河	156	ガラス瓶	大正～昭和初	(2.0) / 5.6 / 25.3, ほぼ完形	薄青緑色透明		1河
20	1河	157	ガラス瓶	大正～昭和初	- / 6.5 / -, -	薄青緑色透明	底部星印	1河
24	2河	198	土器・皿	中世	(8.3) / - / -, -	ナデ/ナデ/-、純・黃褐色	密、白・黒・赤・青・良	2土
24	2河	199	陶器・志野・皿	中世末	(11.4) / - / -, 25%	ナデ/釉/ナデ/釉、茂黄色	密、白、良	2土No165

国財 番号	地点	固有 No.	種別・器種	時期	口／底／高(cm)・残存%	技法(外／内／底)・色調 (外／内)・胎土・鉢色	胎土・焼成・備考	注記
24	2河	200	土器・皿	中世～ 近世	(12.4) / (7.0) / 29, 30%	ナデ/ナデ/糸切り、橙色	密、長・赤・雲・良、外面部黒変	2土No180
24	2河	201	土器・皿	中世	(13.0) / (7.8) / 31, 15%	ナデ/ナデ/糸切り、純い黄褐色	密、白・黒・赤・良、外面部黒変	2土
24	2河	202	土器・皿	中世	- / (7.2) / -, -	ナデ/ナデ/糸切り、純い橙色	密、長・赤・雲・良、外面部一部黒変	2土
24	2河	203	土器・香炉	中世～ 近世	- / 6.0 / -, -	ナデ/ナデ/、純い黄褐色、三足付	密、長・石・やや不良、磨耗	2土
24	2河	204	陶器・志野・皿	17c 前 楽	(13.0) / (7.9) / 22, -	沈練・釉/ナデ/・棲・釉/削り・釉	密、良、施釉	2土
24	2河	205	陶器・香炉	近世	(7.7) / -, -	ナデ/ナデ/、灰白色・(釉) 灰釉	密、長・良	2土
24	2河	206	天目茶碗	中世	(10.4) / -, -	ナデ/ナデ/、灰褐色・(釉) 鉄釉	密、白・良	2土
24	2河	207	陶器・瀬戸美濃・ 碗	18c 中 ～後半	6.4 / 3.4 / 3.2, 75%	削り・釉/ナデ/削り、淡黄色	密、良	2土
24	2河	208	陶器・瀬戸美濃・ 碗	19c 前 中	(10.5) / (4.7) / 4.7, 50%	ナデ・釉/ナデ・釉/削り・浅 黄色・(釉)灰白色	密、良	2土
24	2河	209	陶器・瀬戸美濃・ 仏飯器	18c 後 半～19 c	(7.5) / 4.8 / 5.6, 45%	ナデ/ナデ/、灰色・(釉)灰 オリーブ色	密、良	2土
24	2河	210	磁器・紅皿	近世	11.6 / 1.3 / 15, 70%	型成形、灰白色、内面施釉	緻密、良、菊花形	2土
24	2河	211	肥前・磁器・ 東廣 碗蓋	18c 末 ～19c	(9.6) / 5.2 / 2.8, 45%	ナデ・手描き/ナデ・手描き/ ナデ・灰白色	緻密、良、手描き染付	2土
24	2河	212	肥前・磁器・ 東廣 碗蓋	18c 末 ～19c	9.6 / 5.5 / 2.7, 75%	ナデ・手描き/ナデ・手描き/ ナデ・灰白色	緻密・良、手描き染付	2土
24	2河	213	瀬戸美濃・磁器・ 皿	19c 中	(13.0) / (6.9) / 3.2, 50%	ナデ・手描き/ナデ・手描き/ ナデ・灰白色	緻密、良、手描き染付	2土
24	2河	214	磁器・肥前・碗	19c 中	(6.8) / (3.8) / 6.0, 30%	ナデ・染付/ナデ/ナデ・釉・ 黄白色	密、良、手描き染付	2土
24	2河	215	瀬戸美濃・磁器・ 端反碗	19c 前 中	(10.2) / 3.6 / 5.9, 50%	ナデ・手描き/ナデ・手描き/ ナデ・灰白色	緻密、良、手描き染付	2土
24	2河	216	磁器・蓋	昭和初	29 / 15 (描み) / 23, 完形	型成形、灰白色、色鉢	緻密、良、色鉢手描き	2土
24	2河	217	土器・擂鉢	中世	- / (14.0) / -, -	ナデ/ナデ/・脚目/、橙色	密、長・石・雲・赤・良、 底部再加工痕	2土No136
24	2河	218	土器・培塿	近世	(31.7) / (32.0) / 4.5, 5%	ナデ/ナデ/・砂鉄・純い褐色	密、白・黒・赤・雲・良、 外面部スス・内面黒変	2土No154
25	2河	220	繩文・深鉢	前期	- / / -, -	繩文/ナデ/、純い黄褐色 純い褐色	密、長・石・角・赤・雲・ 良	2土
25	3河	224	土器・皿	中世	(11.5) / (7.0) / 22, 30%	ナデ/ナデ/、橙色	密、白・黒・雲・良、内外 面部黒変	道
25	3河	225	土器・皿	中世	(15.9) / / -, -	ナデ/ナデ/、橙色	密、白・黒・赤・雲・良、 口部タルル	道
25	3河	226	土器・皿	中世	- / 7.0 / -, 30%	ナデ/ナデ/糸切り、橙色	密、白・黒・赤・雲・良	No109
25	3河	227	土器・培塿	近世	- / / -, -	ナデ/ナデ・内耳/、褐色	密、白・黒・赤・雲・良、 外面部一部黒変	道
25	3河	228	土器・火もらい	近世～ 近代	- / 13.5 / 18.1, 60%	ナデ・型押し火/ナデ/削り・ 黄褐色・外面部黒変	密、白・赤・雲・良	No149
26	3河	229	陶器・灰おとし	19c	9.4 / 9.7 / 7.6, 70%	ナデ・釉/ナデ/・削り・浅黄色・ (釉)白・茶色	やや密、白・良、鉄絞	No114
26	3河	230	陶器・皿	明治	9.0 / 3.5 / 2.3, 完形	ナデ・釉/削り・灰褐色・(釉)	密、良、外面部スス・内面 トラン詩	No143
26	3河	231	陶器・皿	明治	9.8 / 4.4 / 2.0, 完形	削り/ナデ・釉/削り・灰褐色 (釉)灰褐色	密、良、底部スス	No162
26	3河	232	陶器・小碗	昭和初	(7.9) / 3.8 / 4.4, 45%	釉・透け釉・釉・灰褐色・(釉) オーバー灰褐色	緻密、白・良、盛り給 (梅・茶・白・青)	No143
26	3河	233	灰釉陶器・皿	平安	- / (7.0) / -	ナデ・釉/ナデ/付高台・削 り・灰白色	密、良	道
26	3河	234	陶器・蓋	大正～ 昭和初	13.2 / 4.5 / 2.6, はげ完形	釉・釉/、純い黄褐色・(釉) 暗赤褐色	密、白・黒・良	No126
26	3河	235	陶器・蓋	大正～ 昭和初	10.9 / 3.8 / 2.9, はげ完形	釉・釉/、灰白色・(釉)黑色	密、白・良	No147
26	3河	236	陶器・万古・土瓶	大正～ 昭和初	6.2 / 4.7 / 6.0, 80%	ナデ/ナデ/・布目・墨書・暗赤 褐色	密、良、胴部印「萬 古」・底「日鳳」にふ れて若葉哉」	道
26	3河	237	陶器・蓋	大正～ 昭和初	7.3 / 2.8 / 1, はげ完形	釉/ナデ/糸切・(釉)淡黄色	道No141	
26	3河	238	陶器・土瓶	大正～ 昭和初	8.6 / 7.1 / 7.7	ナデ・削り・釉/ナデ/	密、白・良、底周辺スス	No141
26	3河	239	陶器・壺(深美)	中世	- / / -	格子目文/ナデ/、黄褐色/ 灰黄色	密、白・黒・良	道
26	3河	240	繩文・深鉢	繩文 中期	- / / -	繩文・側背起綻/ナデ/、灰 黄褐色・明赤褐色	密、白・黒・赤・良	道

図版番号	地点	測定No.	種別・器種	時期	口／底／高(cm)・残存%	技法(外／内／底)・色調(外／内／胎土色・釉色)	加工・焼成・備考	注記
26	3河	242	磁器・碗	明治末～大正	8.0／3.4／5.4, 完形	ナデ・輪写／ナデ／ナデ、白色釉上に鋼版輪写(青・赤・彩玉)	密、良	道No.139・151
26	3河	243	磁器・碗	明治末～大正	8.0／3.5／5.2, ほぼ完形	ナデ・輪写／ナデ／ナデ、白色釉上に鋼版輪写(青・赤・彩玉)	密、良	道No.137
26	3河	244	磁器・碗	明治末～大正	4.4／3.2／4.3, 完形	ナデ・輪写／ナデ／ナデ、乳白色釉上に鋼版輪写(青・茶・松・緑・もみじ)	密、良	道No.140
26	3河	245	磁器・碗	明治末～大正	7.8／3.8／4.2, ほぼ完形	ナデ・輪写・吹き絵／ナデ・吹き絵／ナデ、白色釉上に鋼版輪写(緑・もみじ)・吹き絵	密、良	道No.153
26	3河	246	磁器・碗	明治末～大正	8.0／3.8／4.0, ほぼ完形	ナデ・輪写・吹き絵／ナデ、白色釉上に鋼版輪写(緑・もみじ)・吹き絵	密、良	道No.156
26	3河	247	磁器・小碗	戦前	8.0／3.6／4.5, 完形	釉・底・文字／釉・文字／無釉、淡綠色釉上にゴム版繪付け(藍)	密、良、外「山梨縣塙山田蓮造場」「御代をは千代とぞなく」内「霧酒塙乃山」	道No.120
26	3河	248	磁器・瓶	明治末～大正	11.8／4.6／5.1, ほぼ完形	摺り／摺り／、白色(釉)白	綴密、良、型紙摺り	道
26	3河	249	磁器・碗		(11.8)／4.0／5.8, 60%	摺り／摺り／ナデ、白色釉上に型紙摺り	綴密、良	道
26	3河	250	磁器・皿	戦前	(11.0)／7.2／25, 60%	ナデ・染付／ナデ・染付／ナデ、灰白色釉上に手描き染付(緑青、葡萄)	密、良	道
26	3河	251	磁器・皿	明治末～大正	10.6／6.2／2.1, 完形	ロクロナデ・ロクロナデ／ロクロナデ・乳白色釉上に鋼版輪写(赤・青・青)	綴密、良	道No.158
26	3河	252	磁器・皿		10.8／5.6／2.0, ほぼ完形	ナデ・輪写／ナデ／ナデ、乳白色釉上に鋼版輪写(緑)	密、良	道No.161
26	3河	253	磁器・皿	明治10～30年代	12.8／7.6／1.9, 80%	ナデ・ナデ・摺り／ナデ、白色釉上に型紙摺り(紫)	密、良	道No.150
26	3河	254	磁器・皿	明治10～30年代	16.4／8.4／2.4・70%	ナデ・摺り／ナデ・摺り／ナデ、乳白色釉上に型紙摺り(紫)	密、良、摺り	道No.148
27	3河	255	磁器・輪花皿	明治10～30年代	15.0／7.6／4.4・ほぼ完形	ロクロナデ・ロクロナデ・蛇の目高台・灰白色	綴密、良、染付	道No.164
27	3河	256	磁器・輪花皿	明治10～30年代	15.6／7.8／4.3・70%	ロクロナデ・ロクロナデ・蛇の目高台・乳白色	綴密、良・染付	道No.138
27	3河	257	磁器・皿	明治10～30年代	20.8／8.6／3.3, 55%	ナデ・摺り／ナデ・摺り／ナデ、灰白色釉上に型紙摺り(紫)	密、良、摺り	道No.155
27	3河	258	磁器・小碗	昭和初?	8.8／5.2／4.0, 80%	釉・種・種・白色・(釉)黒褐色・白色	綴密、良	道No.130
27	3河	259	磁器・段重(白粉入)	明治	12.6／12.4／4.1, 60%	摺り・釉・釉／、乳白色・(釉)白色	綴密、良、型紙摺り	道No.134
27	3河	260	ガラス・小瓶	大正～昭和初	1.2／～／6.9, 完形	型成形、淡青色透明		道
27	3河	261	ガラス・インク瓶	大正～昭和初	1.4／5.4／4.2, 完形	型成形、淡緑色透明		道No.125
27	3河	262	ガラス・インク瓶	大正～昭和初	1.4／4.4／3.9, 完形	型成形、淡緑色透明		道
27	16組	265	土器・皿	中世	(8.4)／～／～	ナデ・ナデ／、淡い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良	16組
27	16組	266	土器・皿	中世	(9.1)／～／～	ナデ・ナデ／、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良	16組
27	16組	267	土器・皿	中世	(11.0)／～／～	ナデ・ナデ／、暗褐色・暗端黒色	密、白・黒・赤・雲、良、内面薄く黒変	16組
27	16組	268	土器・皿	中世	(10.6)／～／～	ナデ・ナデ／、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良	16組
27	16組	269	土器・皿	中世	(12.6)／～／～	ナデ・ナデ／、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良、内面薄く黒変	16組
27	16組	270	灰釉・皿	中世	(10.5)／(5.8)／2.6, 20%	釉・釉／削り。(釉)灰オリーブ色	密、良	16組No.64
27	16組	271	常滑・鉢	中世	～／～／～	ナデ・ナデ／、純い黄褐色	密、良、良	16組
27	16組	272	土器・内耳	中世	～／(27.0)／13.0-	ナデ・ナデ／砂目、黒褐色／純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良、外側スヌ	16組 No.65・97・107
27	16組	273	織文・深鉢	中期初	～／～／～	織文・沈模・ナデ／、純い黄褐色／純・褐色	密、白・黒・赤・雲、良	16組
27	16組	274	織文・深鉢	後期初	～／～／～	ナデ・沈模・ナデ／、純い黄褐色／暗褐色	密、白・黒・赤・雲、良、内面コゲ	16組
28	1土	276	土器・皿	中世	(8.0)／(4.8)／19, 20%	ナデ・ナデ／系切り、純い黄褐色	密、白・黒・雲、良、外側薄く黒変	道No.23
28	1土	277	土器・皿	中世	(11.0)／～／～	ナデ・ナデ／、淡い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良	1土
28	1土	278	土器・皿	中世	(11.2)／～／～	ナデ・ナデ／、淡い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良、外一部黒変	1土
28	1土	279	土器・皿	中世	12.2／6.2／3.2, 完形	ナデ・ナデ／系切り、灰黄色	密、白・黒・赤・雲、良、内外面黒変	1土No.94
28	1土	280	土器・皿	中世	(13.0)／(7.0)／3.2, 20%	ナデ・ナデ／削り、灰黃褐色	密、白・黒・赤・雲、良、内外面黒変	1土No.204
28	1土	281	土器・皿	中世	(12.6)／～／～	ナデ・ナデ／、明赤褐色	密、白・黒・赤・雲、良	1土No.19

国歴番号	地点	周朝No.	種別・器種	時期	口／底／高(cm)・残存%	技法(外／内／底)・色調(外／内)・胎土色・鉢色	胎土・焼成・備考	注記
28	1土	282	土器・皿	中世	~6.0/~、30%	ナデ・ナデ/・糸切り、橙色	密、白、黒・赤・雲、良、内外面薄く黒変	道No.24
28	1土	283	白磁・壺	中世	~7.0/~、~	釉・釉/~、底オーリーブ色	密、白・黒、良	1土No.93
28	1土	284	深美・甕	13c	~7.0/~、~	叩き・ナデ・ナデ//、灰黄褐色	やや密、白、良	1土No.102
28	1土	285	陶器・甕	13c	~7.0/~、~	叩き・ナデ・ナデ//、黃褐色	やや密、白・黒、良	1土No.91
28	1土	286	深美・甕	13c	~7.0/~、~	ナデ・竹管文・ナデ//、灰黄褐色	密、白・黒、良	1土No.198
28	1土	287	常滑・甕	中世	~7.0/~、~	ナデ・釉・ナデ//、(外)赤褐色(内)灰褐色	密、白・赤・小窪、良	1土No.202
29	1配石	289	土器・皿	中世	(10.7) / (6.0) / 22、30%	ナデ・ナデ//、淡・橙色	密、白・黒・雲、良	1河No.252
29	1配石	290	土器・皿	中世	(13.0) / (7.0) / 30、20%	ナデ・ナデ/・ナデ、橙色	密、白・黒・赤・雲、良	1配石No.199
29	1配石	291	陶器・甕	近世	~6.2/~、30%	ナデ・釉・ナデ・釉//、浅黄色(・釉)純い褐色	やや密、良、内外面跳ね	配石No.81
29	1配石	292	常滑・甕	中世	~(12.6) / ~、~	ナデ・釉・ナデ//、(釉)純い褐色	密、白・黒、良	1配石No.197
29	1配石	293	陶器・深美・甕	13c	~7.0/~、~	叩き・ナデ//、灰黄色	密、白、良	1河No.69
29	1配石	294	陶器・常滑・甕	中世	~7.0/~、~	叩き・ナデ//、浅黄色	密、白・黒、良	1河No.62
29	1配石	295	深美・甕	13c	~7.0/~、~	ナデ・ナデ//、純い褐色	密、白・黒、良	1土No.201
29	1配石	296	信楽器・甕	平安	~7.0/~、~	タタキ・ナデ//、暗灰黄色	密、白・黒、良、消耗	1配石No.188
29	1配石	297	常滑・甕	中世	~7.0/~、~	ナデ・ナデ//、黄灰色	密、白・黒・赤、良	1配石
29	1配石	298	土器・鉢	中世	(33.2) / ~、~	ナデ・ナデ//、暗褐色	密、白・黒・赤・雲、良	1配石No.192
29	1配石	299	土器・培塿	近世	(21.8) / (12.0) / 8.7、~	指頭痕・ナデ・ナデ//、純い褐色	密、白・黒・赤・角、良、内外面薄く黒變	1河No.245
29	1配石	300	土器・内耳鍋	中世	(28.5) / ~、~	ナデ・ナデ//、純い黄褐色	密、長・角・赤・雲・小窪、内面変色	1河No.40
29	1配石	301	土器・鍋	中世	(30.4) / ~、~	ナデ・ナデ//、純い赤褐色	密、白・角、良	1河No.44
31	6ビ	311	灰釉・皿	16c	~(6.0) / ~、~	ナデ・ナデ//前引、浅黄色(・袖)オーリーブ色	密、白・赤、良、断面崩耗	6ビNo.173
31	19ビ	314	天目茶碗	中世	(12.0) / ~、~	釉・釉//、純い黄褐色(・袖)黒色	密、白・赤、良	19ビNo.209
31	45ビ	315	土器・小皿	中世	(7.6) / (5.0) / 2.5、25%	ナデ・ナデ//、明志褐色	密、長・黒・赤・雲、良	45ビNo.212
31	51ビ	320	織文・深鉢	中期末	~7.0/~、~	ナデ・沈綴・織文・ナデ//、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良	51ビNo.214
31	2清	321	土器・小皿	中世	(7.2) / (4.1) / 1.9、~	ナデ・ナデ/・糸切り、明褐色	密、白・黒・赤・雲、良	2清
31	2清	322	土器・皿	中世	(13.0) / ~、~、10%	ナデ・ナデ//、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良、内外面薄く黒變	2清
31	4清	323	土器・小皿	中世	(8.4) / (5.6) / 1.7、~	ナデ・ナデ/・糸切り、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良	4清No.45
31	4清	324	土器・皿	中世	(11.9) / ~、~	ナデ・ナデ//、純い橙色	密、白・黒・赤・雲、良	1清No.54
31	4清	325	志野・皿	中世末	~(5.8) / ~、~	ナデ・ナデ/・割り、(袖)灰白色	密、白・黒・小窪、良、黄褐色	4清No.67
31	4清	326	陶器・擂鉢	近世～近代	~(7.0) / ~、~	ナデ・擂目・ナデ/・割り、(袖)基褐色	密、白・黒・赤、良	4清No.51
31	4清	327	織文・深鉢	中期末	~7.0/~、~	ナデ・隣継・織文・ナデ//、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲・小窪、良	4清No.50
32	5溝	328	土器・皿	中世	(8.0) / (4.2) / 2.0、20%	ナデ・ナデ/・糸切り、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良、内外面黒變	5溝
32	5溝	329	陶器・擂鉢	近世	(32.4) / ~、~	ナデ・ナデ・節引//、暗灰色	やや密、白・赤・小窪、良	4溝No.55
32	5溝	330	土器・培塿	近世	(30.0) / (30.0) / 4.9・10%	ナデ・ナデ/・錐底・純い褐色	密、白・黒・赤・雲、良	4溝No.98
32	6溝	331	土器・皿	中世	(13.2) / ~、~、15%	ナデ・ナデ//、黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良	6溝No.88
32	6溝	332	土器・皿	中世	(12.8) / (7.0) / 3.0、20%	ナデ・ナデ/・糸切り、橙色	密、白・黒・赤・雲・小窪、良	6溝No.90
32	6溝	333	土器・内耳	中世	~(24.0) / ~、~	ナデ・ナデ/・紺底、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲・小窪、良	6溝No.87
32	道傍外	334	土器・小皿	中世	(7.8) / (5.0) / 2.3、20%	ナデ・ナデ/・糸切り、明赤褐色	やや密、長・赤・角、良	外
32	道傍外	335	土器・小皿	中世	(7.6) / (5.0) / 2.3、20%	ナデ・ナデ/・糸切り、灰黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良、内面薄く黒變	外
32	道傍外	336	土器・皿	中世	(14.0) / ~、~	ナデ・ナデ//、純い黄褐色	やや密、白・黒・雲・石、内面変色	外
32	道傍外	337	土器・环	平安	(13.6) / ~、~	ナデ・ナデ//、純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良、内面稍粗	外
32	道傍外	338	土器・环(土師器・34)	平安	(16.4) / ~、~	ナデ・ナデ・黑色//、(外)純い黄褐色	密、白・黒・赤・雲、良、黒色土器	外
32	道傍外	339	土器・皿	~	~(6.6) / ~、~	ナデ・ナデ/・糸切り、橙色	密、白・黒・赤・雲・小窪、良、内面薄く黒變	外
32	道傍外	340	陶器・皿	中世	(9.2) / ~、~	ナデ・ナデ・釉//、灰黄色(・袖)灰オーリーブ色	密、白、良、口部に釉	外
32	道傍外	341	土器・火鉢	近世～近代	(27.4) / ~、~	ナデ・ナデ//、橙色	やや密、白・黒・赤・雲、良、外側スリ	外
32	道傍外	342	土器・培塿	近世	~7.0 / (29.0)	ナデ・ナデ/・錐底、黑褐色/明褐色	密、長・角・赤・雲、良、径2mmの孔	道No.37

表5 於曾屋敷 石器觀察表

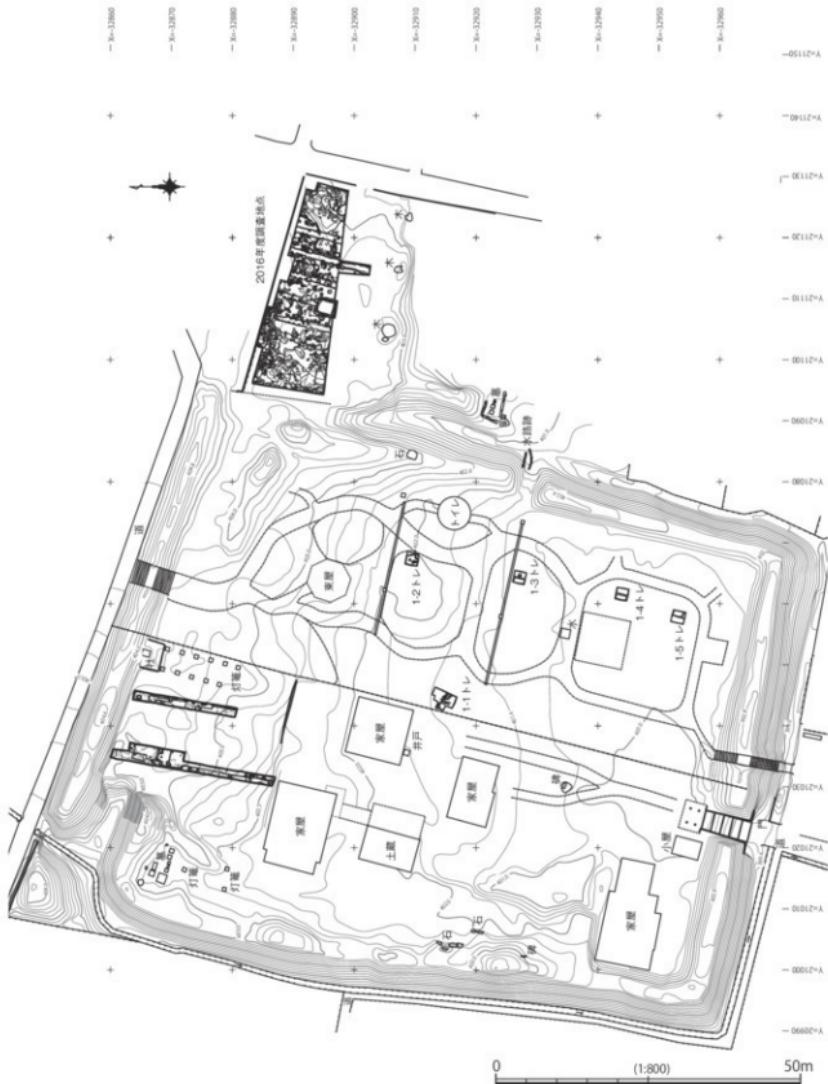
図版	地點	掘歎No.	分類	長／幅／厚(cm)	重さ(g)	石材	色調	注記	備考
21	1戸	180	磨石	2.3×2.3×0.5	3.60	砂岩板岩	黒色	1戸	
21	1戸	183	斧	10.5×5.4×1.2	92.72	玄武岩	青灰色	1戸No.17	
21	1戸	184	石鉢	[12.1]×[10.4]×[7.4]	61.8	玄武岩	暗オリーブ色	1戸No.2	
21	1戸	185	空風輪	17.1×12.2×-	2580.1	安山岩	灰白色	1戸No.3	工具類
22	1戸	186	空風輪	19.4×13.5×-	3674.5	安山岩	灰白色	1戸No.246	工具類
22	1戸	187	水輪	20.1×21.3×11.1	5840.0	安山岩	灰白色	1戸No.251	測量器具
22	1戸	188	水輪	17.9×17.9×11.8	5760.0	安山岩	灰黄色	1戸No.241	工具類
23	1戸	189	水輪	21.6×21.9×16.6	11600.0	安山岩	純い黄色	1戸No.248	工具類
23	1戸	190	水輪	22.2×22.1×15.0	11800.0	安山岩質灰岩	青褐色	1戸No.249	工具類、圓筒形
23	1戸	191	水輪	25.6×24.8×15.2	20800.0	火山輝石灰岩	淡黄色	1戸No.240	測量器具
23	1戸	192	臼	40.2×[23.7]×17.9	17000.0	安山岩	灰黄色	1戸No.250	F1, 半丸
23	1戸	193	臼	24.5×[13.9]×9.2	3250.0	安山岩	黄褐色	1戸No.239	F1, 圓, 1/3
25	2戸	221	砥石	7.3×2.0×2.1	55.47	綠色輝石岩	灰白～青褐色	21No.145	
25	2戸	222	臼	30.0×16.5×11.0	4860.0	玄武岩	黃褐色	21No.219	F1, 半丸
25	2戸	223	四面	15.4×20.4×11.0	3071.0	安山岩	純い黄褐色	21No.77	半丸
28	1戸	225	地盤	19.8×20.4×16.5	11000.0	安山岩	灰黄色	1石柱No.258	
29	1配石	302	石鉢	25.0×11.8×-	611.3	安山岩	暗オリーブ色	1戸No.232	工具類、破片
29	1配石	303	四面	14.5×13.7×8.3	2317.7	花崗岩質綠岩	純い黄褐色	1戸No.32	安存
29	1配石	304	空風輪	18.4×10.1×-	1954.5	火山輝石灰岩	灰白色	1戸No.221	完存, 工具類
29	1配石	305	空風輪	20.7×11.4×-	2755.4	安山岩	灰白色	1戸No.222～223	完存, 工具類
29	1配石	306	火輪	20.3×21.0×8.4	4120.0	安山岩	灰オーラ色	1戸No.231	工具類
30	1配石	307	地盤	21.5×21.5×15.5	10800.0	安山岩質灰岩	純い黄色	1戸No.230	破損, 摺合, 工具類
30	1配G	308	地盤	16.5×16.2×11.4	4220.0	安山岩	黑色	1戸No.233	完存, 工具類
30	1配石	309	地盤	21.1×20.8×16.6	11600.0	火山輝石灰岩	淡黄色	1戸No.229	工具類, 完存
31	1配石	310	石臼	35.2×18.8×16.3	10000.0	安山岩	純い黄色	1戸No.226～227	F1, 半丸
32	造橋外	343	砥石	70.3×37.2×8.8	93.26	綠色輝石岩	灰白色	21No.79	

表6 於曾屋敷 土製品觀察表

図版	地點	掘歎No.	種別	時期	長／幅／厚(cm)	重さg	材質・整形技 巧等	色調 (外・内)	残存率 %	注記	備考
19	1戸	145	研磨器・フック	大正～昭和	6.0×5.7×1.8	28.5	塑成形	白色	100	1戸	
20	1戸	158	研磨器・機械部	大正～昭和	2.9×29.9×3.5	21.2	塑成形	白色	100	1戸	
20	1戸	159	研磨器・機械部	大正～昭和	2.5×25.3×3.0	14.0	塑成形	白色	100	1戸	
20	1戸	160	研磨器・機械部	大正～昭和	2.4×24.2×2.9	13.3	塑成形	白色	100	1戸	
20	1戸	161	研磨器・刃物	大正～昭和	16.1×15.4×8.8	7.2	黒色も、塑成形	白色	100	1戸	木棒
20	1戸	162	研磨器・刃物	大正～昭和	3.3×3.1×1.5	53.5	塑成形	白色	90	1戸	着物の女性、革を持つ孔あり
20	1戸	163	研磨器・グーフ	大正～昭和	1.6×3.2×-	9.3	塑成形	白色	-	1戸	
20	1戸	164	土器・瓶	大正～昭和	3.9×31.1×11	5.4	塑成形	純い黄褐色	100	1戸	中央孔。裏面削り孔2つ
20	1戸	165	研磨器・集穀器	昭和	1.9×1.9×0.6	1.9	塑成形	白色	100	1戸	
20	1戸	166	セワロイド・輪	大正～昭和	3.6×8.1×0.2	4.4	塑成形	黒色	100	1戸	
20	1戸	167	セワロイド・輪	大正～昭和	2.1×29.9×0.3	3.6	塑成形	暗赤褐色	100	1戸	
20	1戸	168	セワロイド・輪	大正～昭和	2.9×11.5×0.3	4.9	暗赤褐色	100	1戸		
20	1戸	169	セワロイド・輪	大正～昭和	3.5×11.4×0.3	4.2	暗赤褐色	100	1戸		
20	1戸	170	セワロイド・輪	大正～昭和	4.4×10.4×0.2	6.0	黒色	100	1戸		
20	1戸	171	セワロイド・輪	大正～昭和	5.3×10.7×0.2	5.5	赤褐色	60	1戸		
20	1戸	172	セワロイド・丸	大正～昭和	9.6×1.5×0.3	2.7	暗赤褐色	100	1戸		
21	1戸	173	ハブラシ	大正～昭和	14.8×11.0×0.5	6.8	橙色	100	1戸	表面削印「完全消毒 ミカ ナ農園子」10	
21	1戸	174	ハブラシ	大正～昭和	14.1×0.9×0.6	4.9	黄褐色	100	1戸	「時製」	
21	1戸	175	ハブラシ	大正～昭和	14.5×1.0×0.5	6.4	淡黄色	100	1戸	表面削印「エスピス農園子」10	
21	1戸	176	ハブラシ	大正～昭和	14.3×1.0×0.4	4.2	黄褐色	100	1戸		
21	1戸	177	ハブラシ	大正～昭和	15.2×1.2×0.5	8.8	金具付	浅黄色	100	1戸	表面削印「完全消毒 ミカ ナ農園子」10
21	1戸	178	泥ぬれこ	近世～近代	16.2×20.0×0.7	21	塑成形	橙色	100	1戸No.207	
21	1戸	179	土鉢	近世～近代	1.7×18.4×2.1	4.1	塑成形, 内2口	純い前赤色	100	1戸No.210	伴1.5mmの孔
21	1戸	181	丸瓦?	中世?	8.3×8.0×1.5	-	内外ナメ	白色	-	1戸	
21	1戸	182	丸瓦?	中世?	6.2×5.2×1.3	-	内外ナメ	白色	-	1戸	
25	2戸	219	新瓦瓦	古代	14.2×22.9×9.3	-	三つ口・連瓦	暗灰	-	21No.181	
26	3戸	241	輪打刀	?	-	-	-	-	-	詳細定説、各細部付着	

表7 於曾屋敷 金属製品觀察表

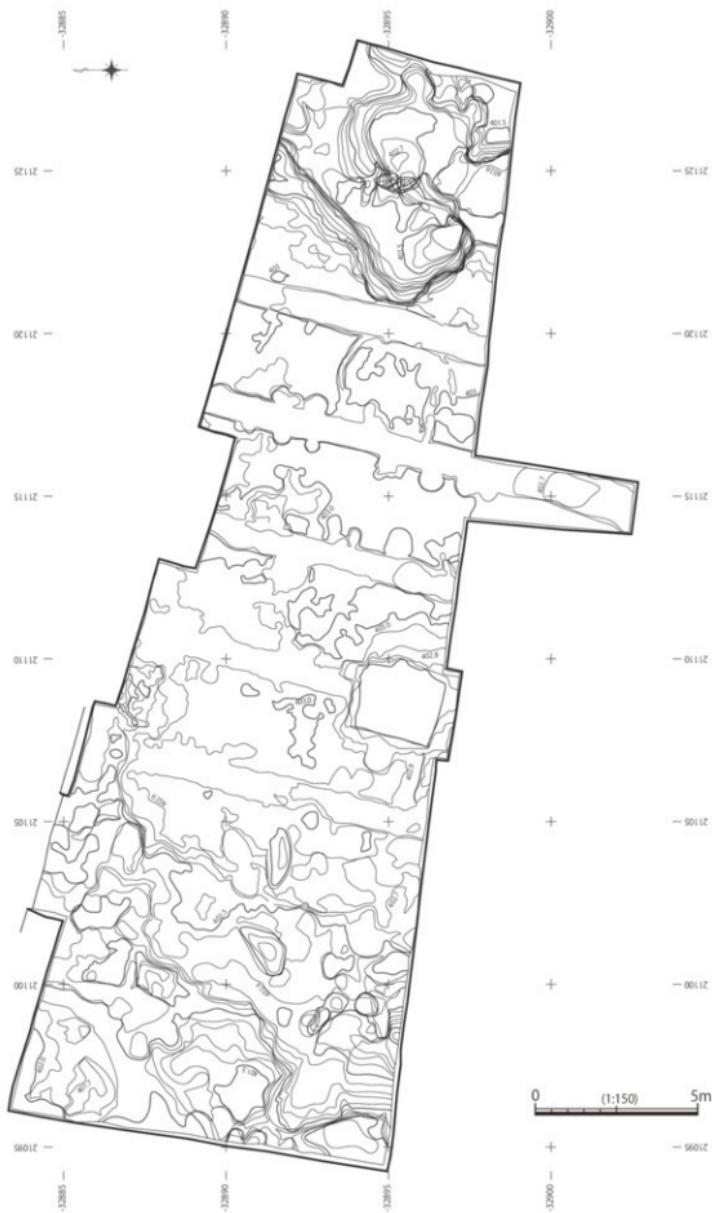
図版	地點	掘歎No.	種別	材質	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	詳記
24	1戸	194	鍛貨	鋼	2.20	2.35	0.15	1.69	「雲水堂」, 斧れ	1戸
24	1戸	195	鍛貨	鋼	2.70	2.75	0.20	2.72	「文久元年」(万治元年, 1860) , 斧れ	1戸
24	1戸	196	鍛貨	鋼	2.30	2.20	0.10	2.58	「半鍛」, 昭和10年(1937)	1戸
24	1戸	197	キセラん覆百	鋼	5.40	1.25	1.20	9.19	-	カクラン
27	3戸	263	鍛貨	鋼	2.75	2.60	0.15	2.67	「文久元年」(万治元年, 1860)	カクランNo.117
27	3戸	264	波	金屬	6.00	6.90	0.10	15.85	メキ	カクラン
28	1戸	288	キセラん覆百	鋼	4.40	1.05	0.90	3.91	-	1戸No.200
31	6戸	312	針状	鉄	5.50	1.55	0.90	10.27	-	6戸No.194
31	9戸	313	鍛貨	鋼	2.40	2.50	0.20	3.18	「聖宋元宝」(1101)	9戸No.189
31	46戸	316	鍛貨	鋼	2.45	2.40	0.15	2.43	「開元通宝」(621)	46戸No.215
31	46戸	318	鍛貨	鋼	2.25	2.45	0.20	3.31	「聖宋元宝」(1101)	46戸No.217
31	50戸	317	刀子	鉄	6.65	1.70	0.40	8.16	「開元通宝」(621)	50戸No.213
32	造橋外	344	不明	鉄	2.05	1.80	0.10	3.17	表裏文様, 表は菊花?	9
32	造橋外	345	金属棒	鋼	11.05	0.70	0.55	22.82	-	外No.26
32	造橋外	346	針	鉄	7.80	1.15	0.55	6.63	-	外No.1
32	造橋外	347	角針	鉄	6.60	0.90	0.40	3.32	-	外No.28
32	造橋外	348	不明	鉄	17.65	2.20	0.95	50.54	-	外No.68



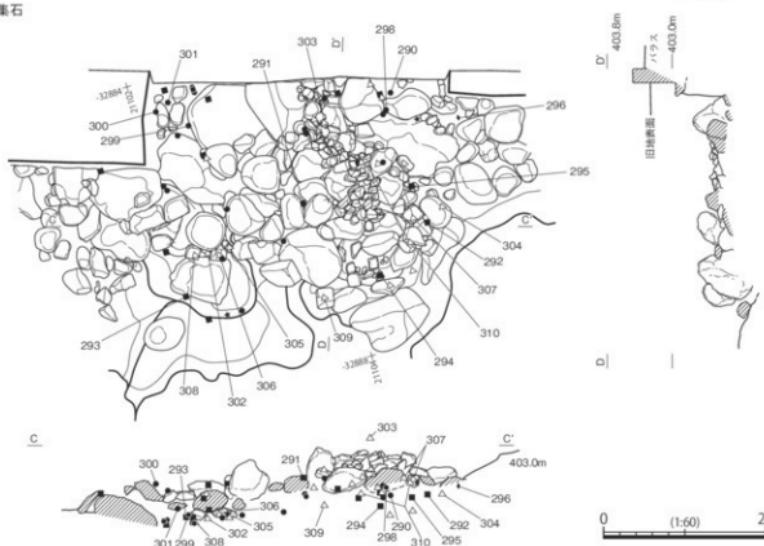
第1図 於曾屋敷全体図



第3図 調査区遺構図

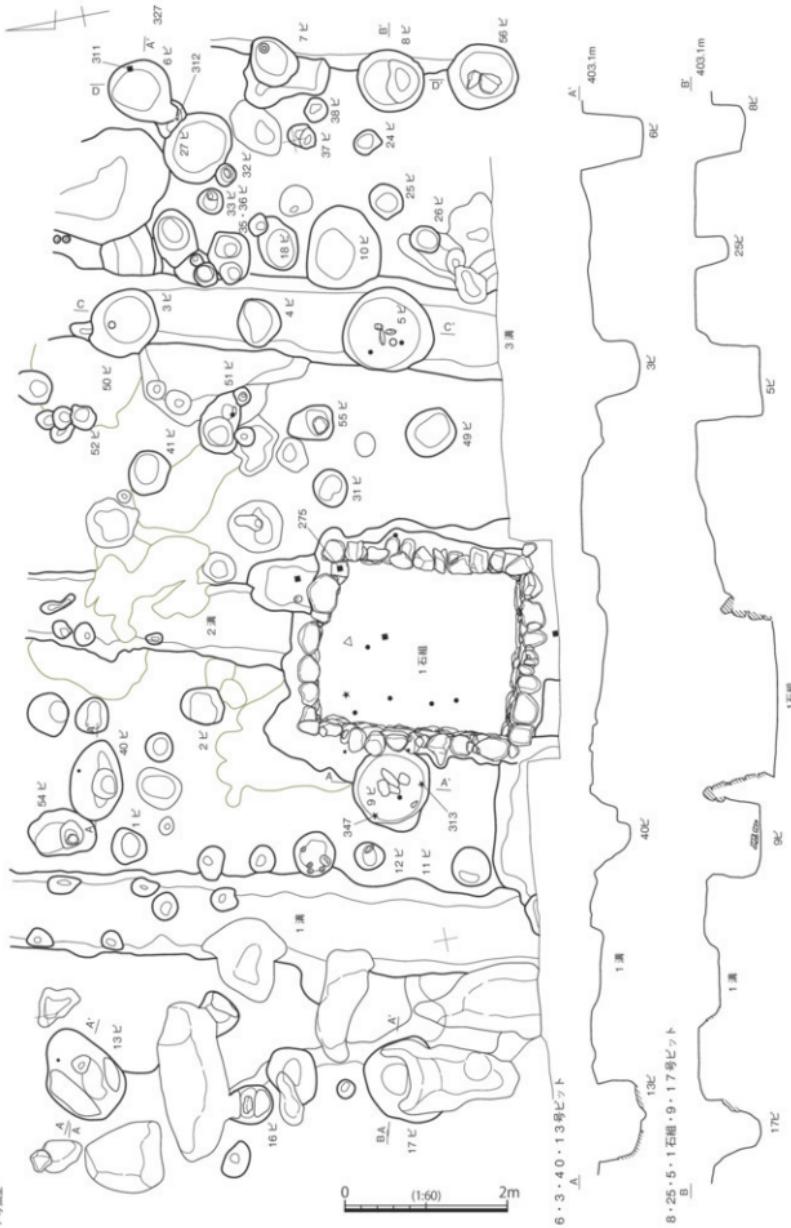


第4図 調査区等高線

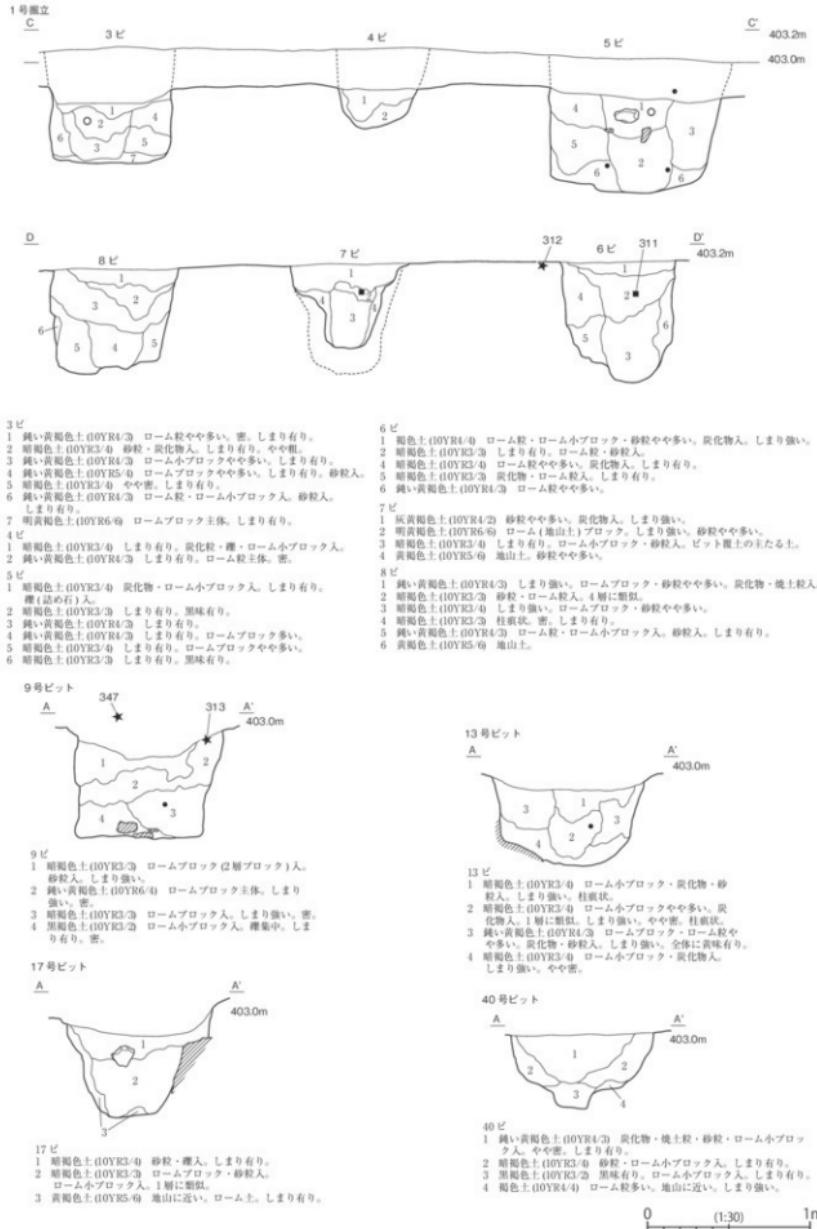


第5図 1号河道及び1号集石

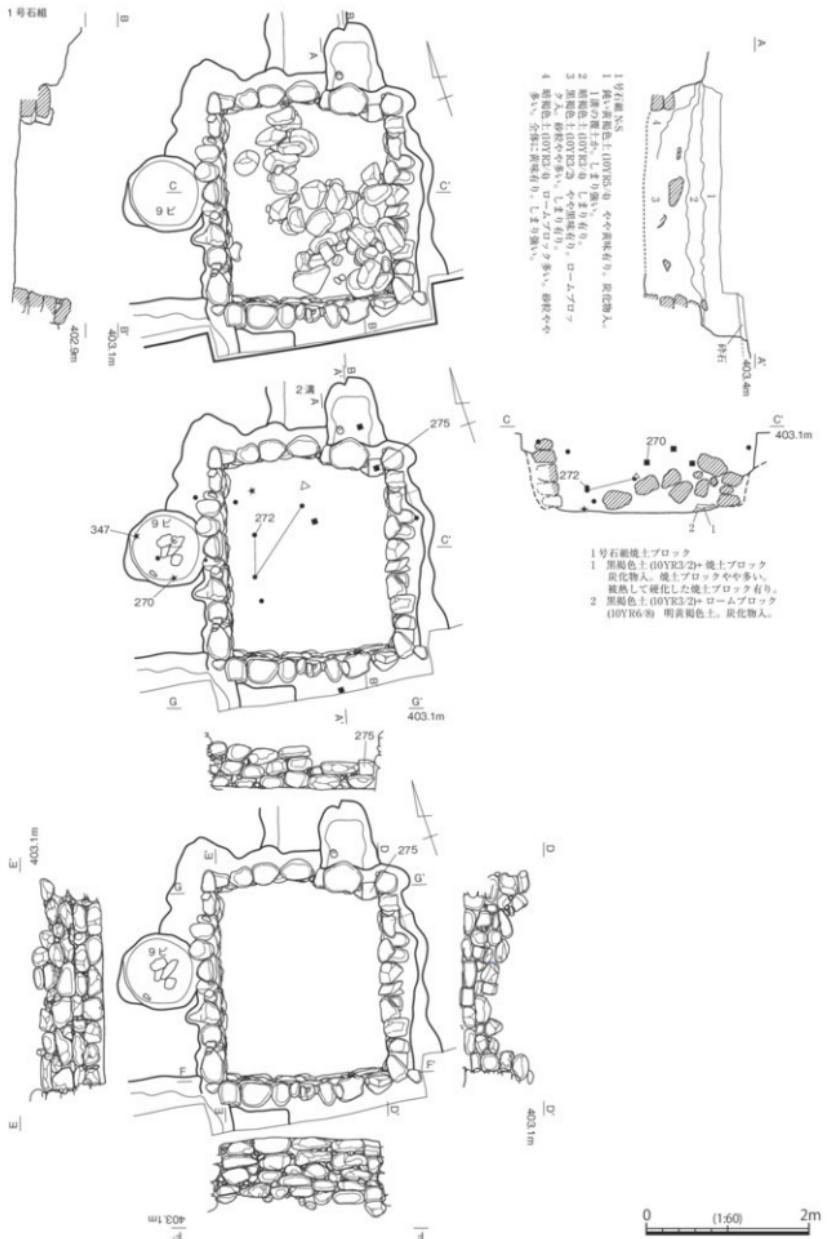
1号掘立



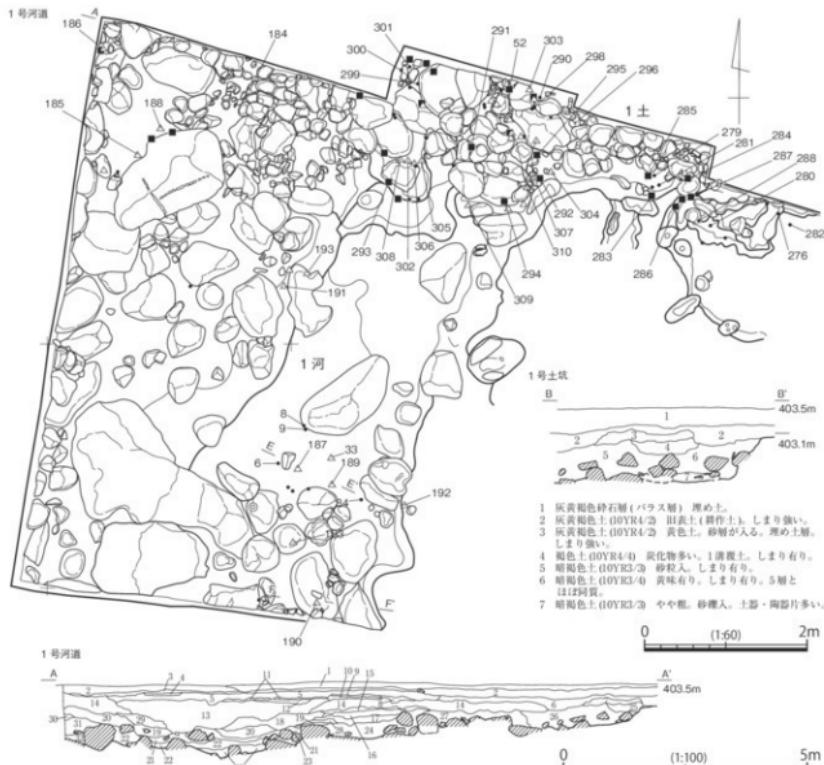
第6図 1号掘立柱建物跡(1)



第7図 1号掘立柱建物跡(2)



第8図 1号石組



- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 深めの黒、グリーン、しまり弱い。

2 黄褐色土 (10YR4/2) 砂利層 (パラソ)、しまり強いくらい。

3 黑褐色土 (10YR2/2) 化學物質や多量。黒味強い、しまり弱い。

4 黄褐色土 (10Y5/6) 深め。ローム土。

5 褐色土 (10Y4/4) 化學物質少、砂粒や多量。ロームブロック人。しまり強いくらい。

6 斜面土 (10YC3/2) 砂粒少、せんげややく。

7 黄褐色土 (10YR4/2) 砂利層、しまりやや弱く。

8 黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒体、化學物質や多量。

9 黄褐色土 (10YR4/2) しまり強いくらい、砂粒多い。埋めか。

10 黄褐色土 (10YR4/4) 砂利層、ビニールゴム人。しまり弱い。埋めか。

11 明褐色土 (10YR5/2) ローム土。砂粒多。しまり弱い。ビニール人。

12 黄褐色土 (10YR4/2) ブルック層を有する。砂粒多。しまり弱い。

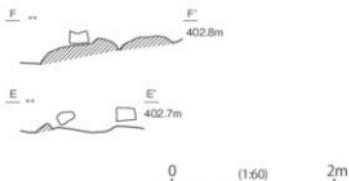
13 黄褐色土 (10YR4/2) 化學物質入。大正一昭和の廻船など。

14 黄褐色土 (10YR4/2) 化學物質少、しまりやや弱い。やや密。

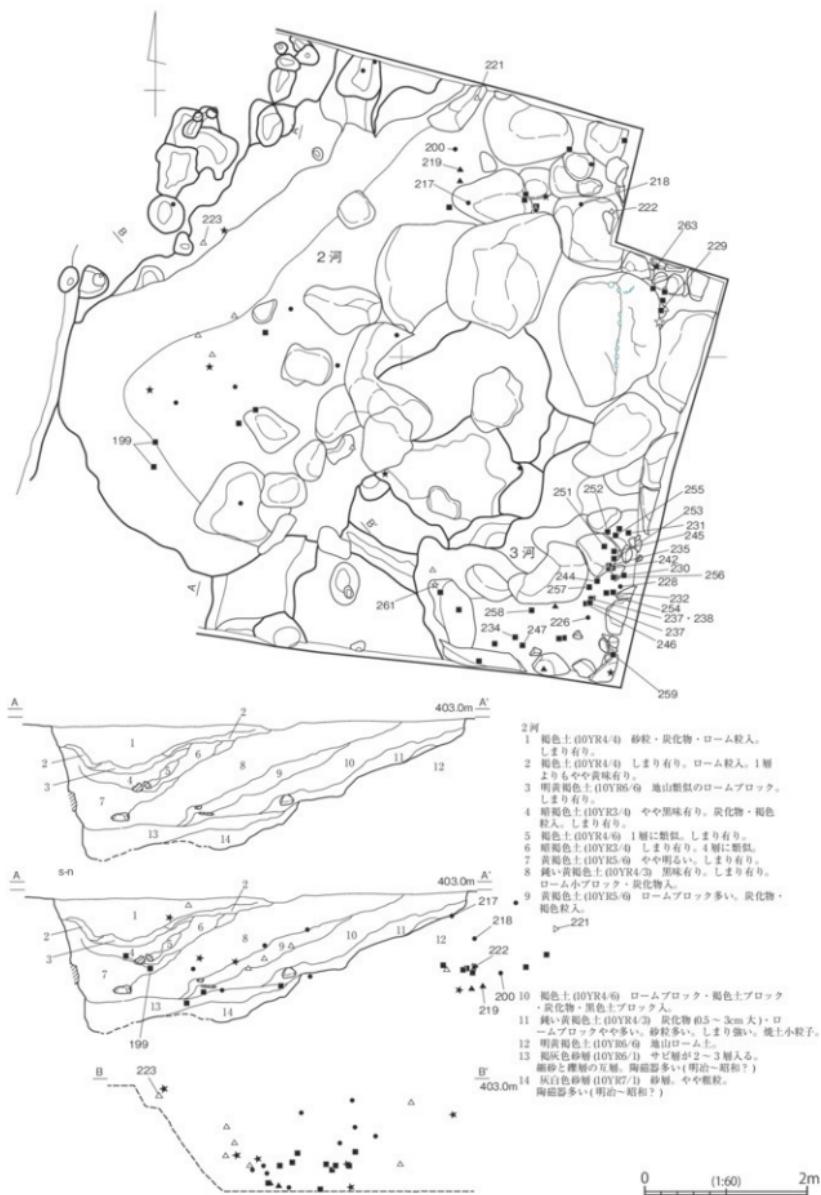
15 白灰褐色土 (10YR2/2) 磷酸鉄鉱層。しまり弱い。

16 黃褐色土 (10YR4/2) しまりやや弱い。砂粒や少、化學物質入。

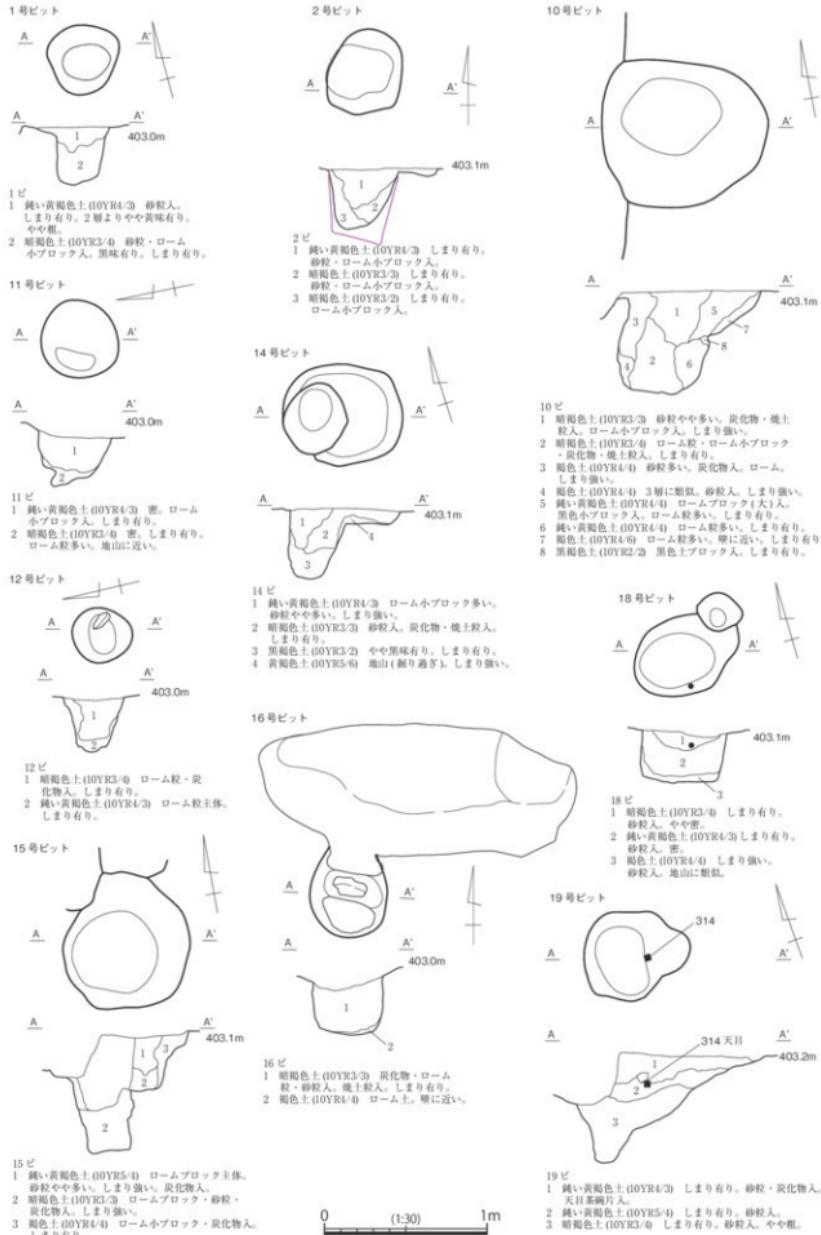
17. 青い薄荷緑色 (10YR 2/7) 3 セラフやホウズキ。
18. 青い薄荷緑色 (10YR 2/8) 2 セラフ、花世界や多い。
19. 青い薄荷色 (10YR 2/9) 3 花世界、織密な薄荷や多い。
20. 薄荷緑色 (10YR 2/10) 2 やすらぎのある静かな。静か。
21. 青い薄荷緑色 (10YR 2/12) 2 鮎や陶器の万人受け。
22. 青い薄荷緑色 (10YR 2/13) 2 鮎や陶器の万人受け。
23. 青い薄荷緑色 (10YR 2/14) 2 やすらぎのある静かな。静か。
24. 青い薄荷色 (10YR 2/15) 3 花世界が多い。ローズ粒入。
25. 青い薄荷色 (10YR 2/16) 3 しまりやく。花世界や多い。
26. 青い薄荷色 (10YR 2/17) 3 しまりやく。ローズ粒入。
27. 青い薄荷色 (10YR 2/18) 4 やすらぎや静かな。ローズ粒入。
28. 青い薄荷色 (10YR 2/19) 3 しまりやく。静かな。しまりやく弱い。
29. 青い薄荷色 (10YR 2/20) 3 しまりやく。静かな。しまりやく弱い。
30. 青い薄荷色 (10YR 2/21) 3 しまりやく。静かな。しまりやく弱い。
31. 青い薄荷色 (10YR 2/22) 3 しまりやく。静かな。しまりやく弱い。
32. 青い薄荷色 (10YR 2/23) 2 しまりやく。静かな。しまりやく弱い。



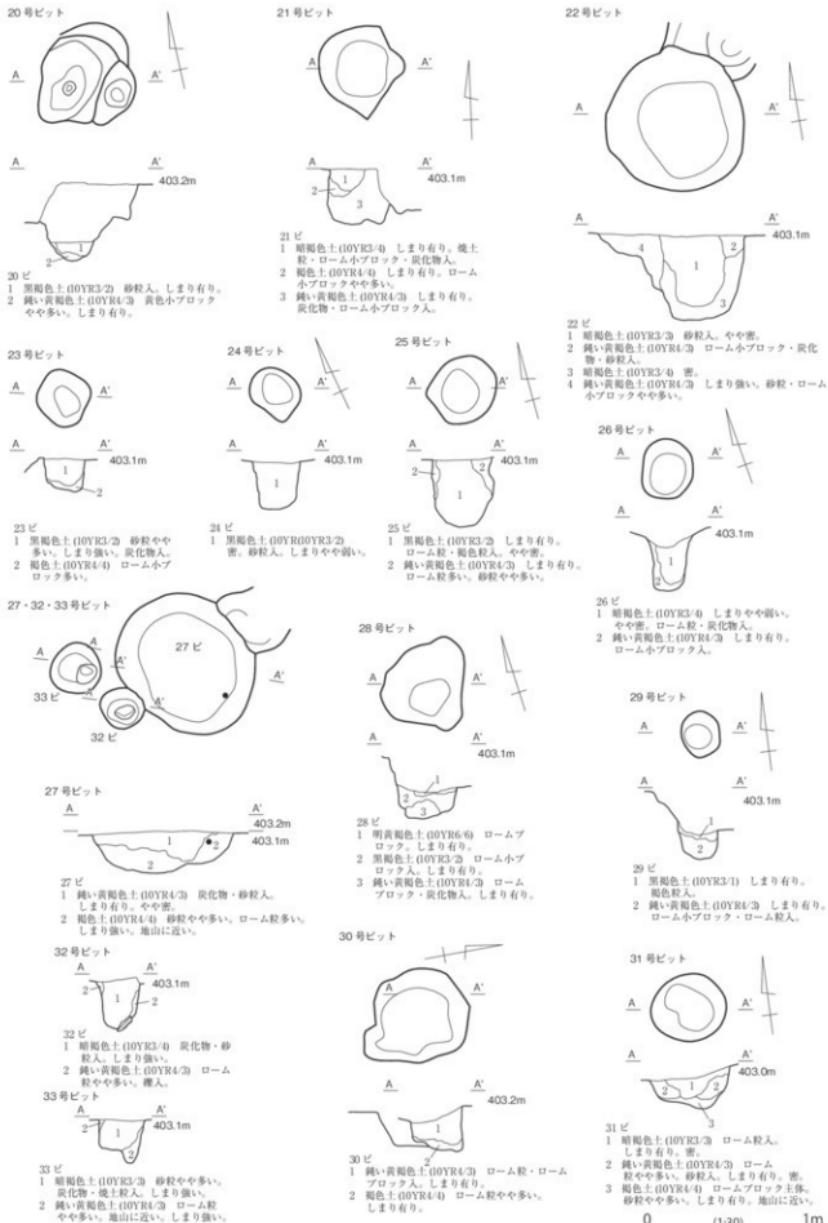
第9図 1号河道：1号土坑周辺



第10図 2号河道・3号河道



第11図 ピット(1)

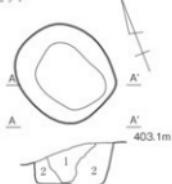


第12図 ピット(2)



第13図 ビット(3)

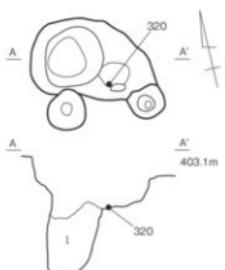
49号ピット



49ピット

- 1 剛褐色土 (10YR3/4) しまり有り。
砂粒入。塊状有り。
2 錫い黄褐色土 (10YR4/3) しまり有り。
砂粒入。ローム粒や多い。

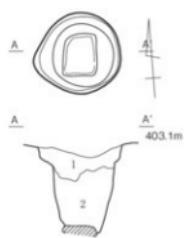
51号ピット



51ピット

- 1 剛褐色土 (10YR3/3) しまり弱い。密。

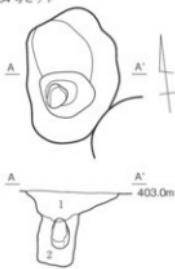
53号ピット



53ピット

- 1 黒褐色土 (10YR4/4) 硫化物・ローム
粒・砂粒入。
2 剛褐色土 (10YR3/4) ローム小プロ
ック入。しまり有り。

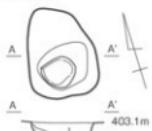
54号ピット



54ピット

- 1 剛褐色土 (10YR3/3) 砂粒・ローム
粒入。しまり有り。
2 錫い黄褐色土 (10YR4/3) ローム小
ブロックや多い。しまり有り。
硫化物入。

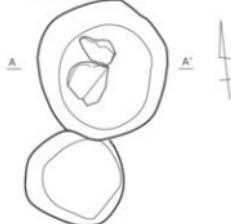
55号ピット



55ピット

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 硫化物入。
しまり有り。密。
2 錫い黄褐色土 (10YR4/3) ローム
粒や多い。しまり有り。密。

56号ピット

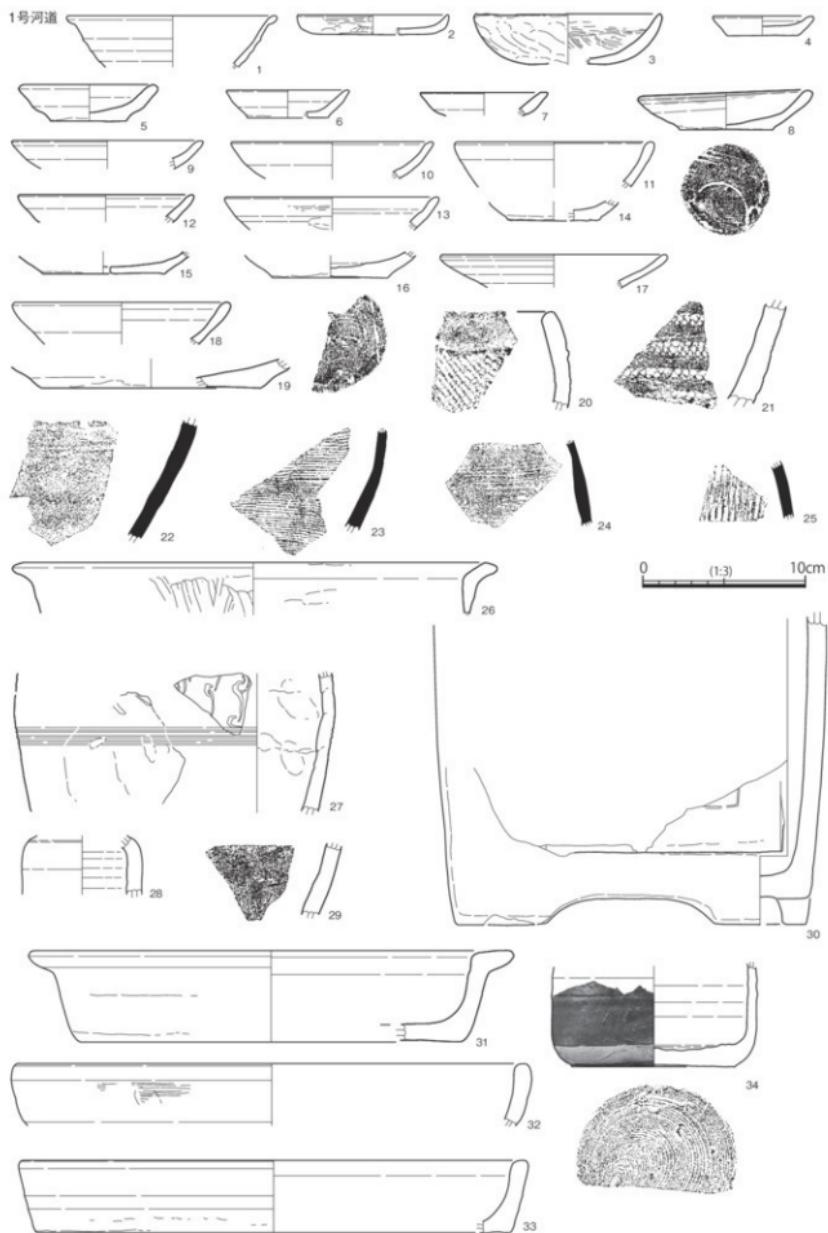


56ピット

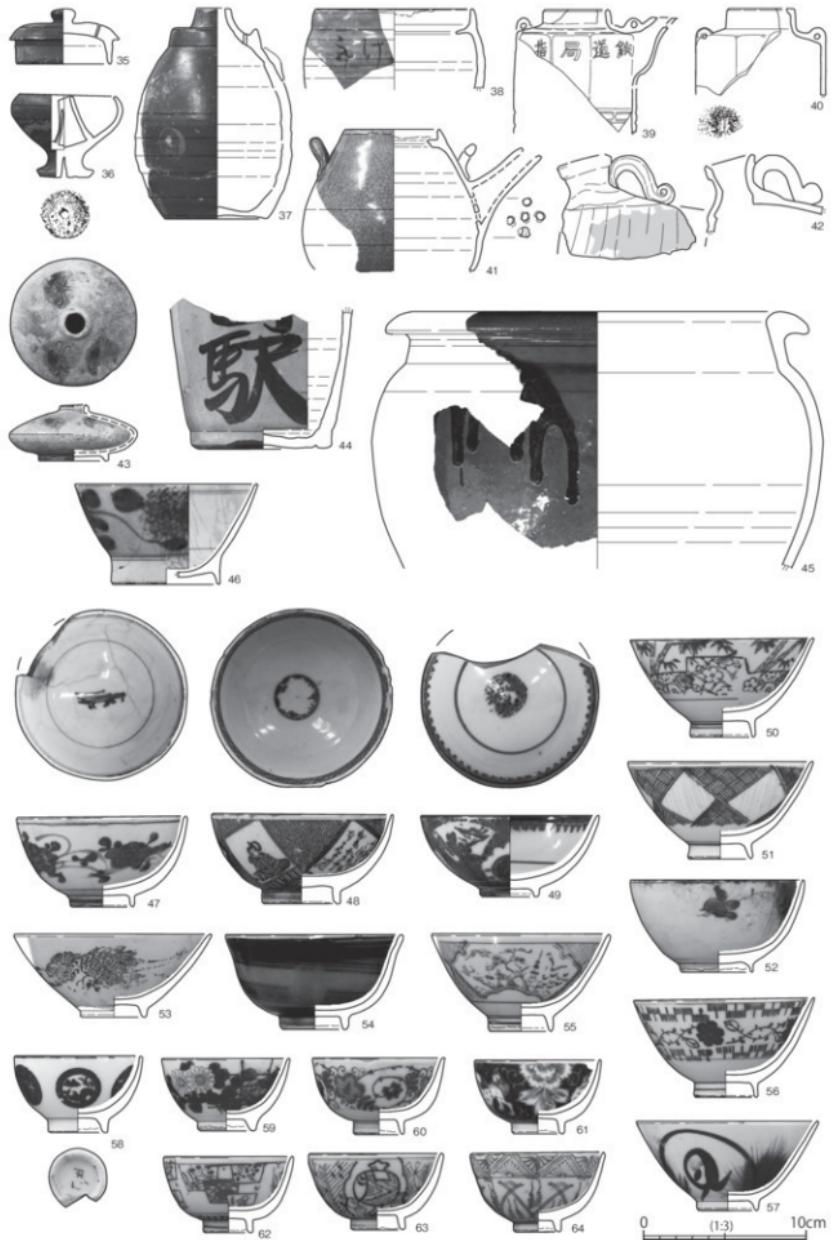
- 1 剛褐色土 (10YR3/3) 表土。砂粒や多い。
2 黒褐色土 (10YR3/2) ロームブロック・砂粒入。しまり有り。黒味有り。
3 黑褐色土 (10YR3/3) ローム粒・砂粒入。しまり有り。黒味有り。
4 黄褐色土 (10YR4/4) ローム粒や多い。地山に近い。しまり有り。



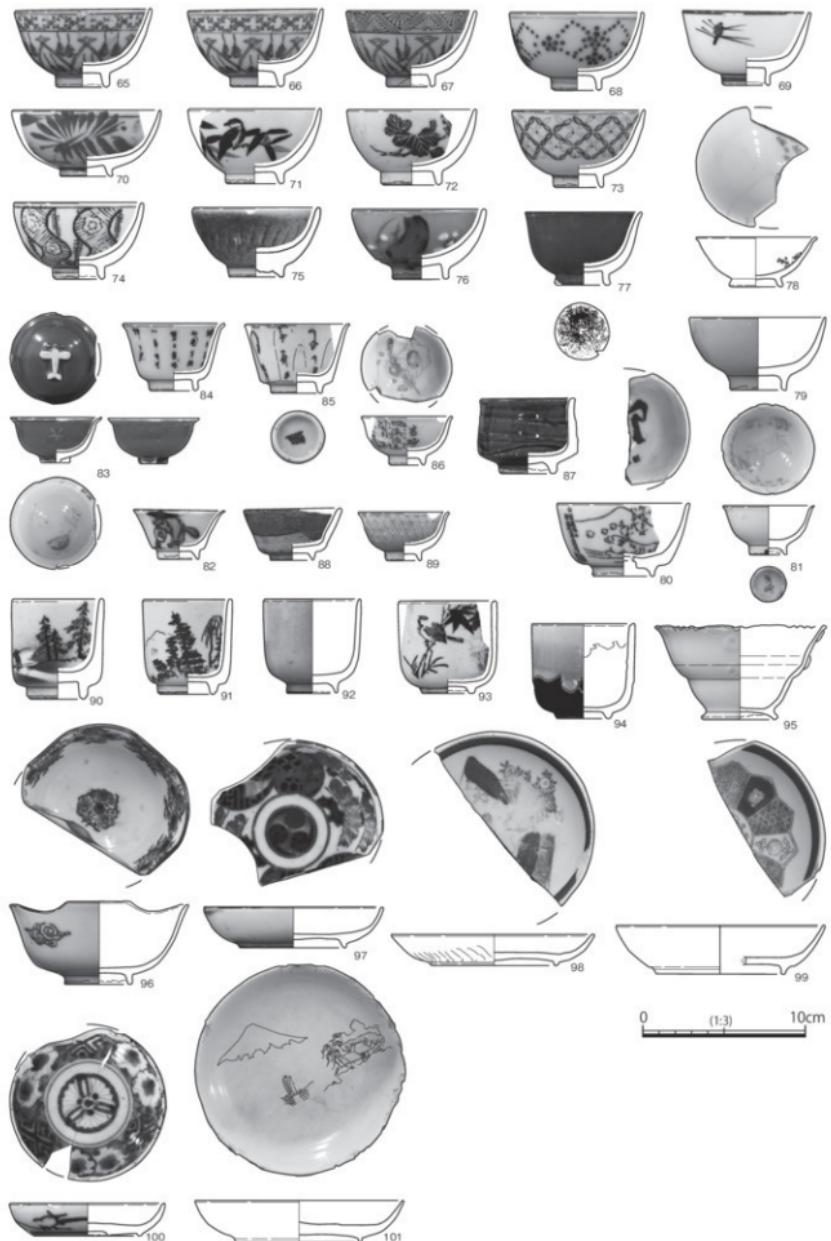
第14図 ピット(4)



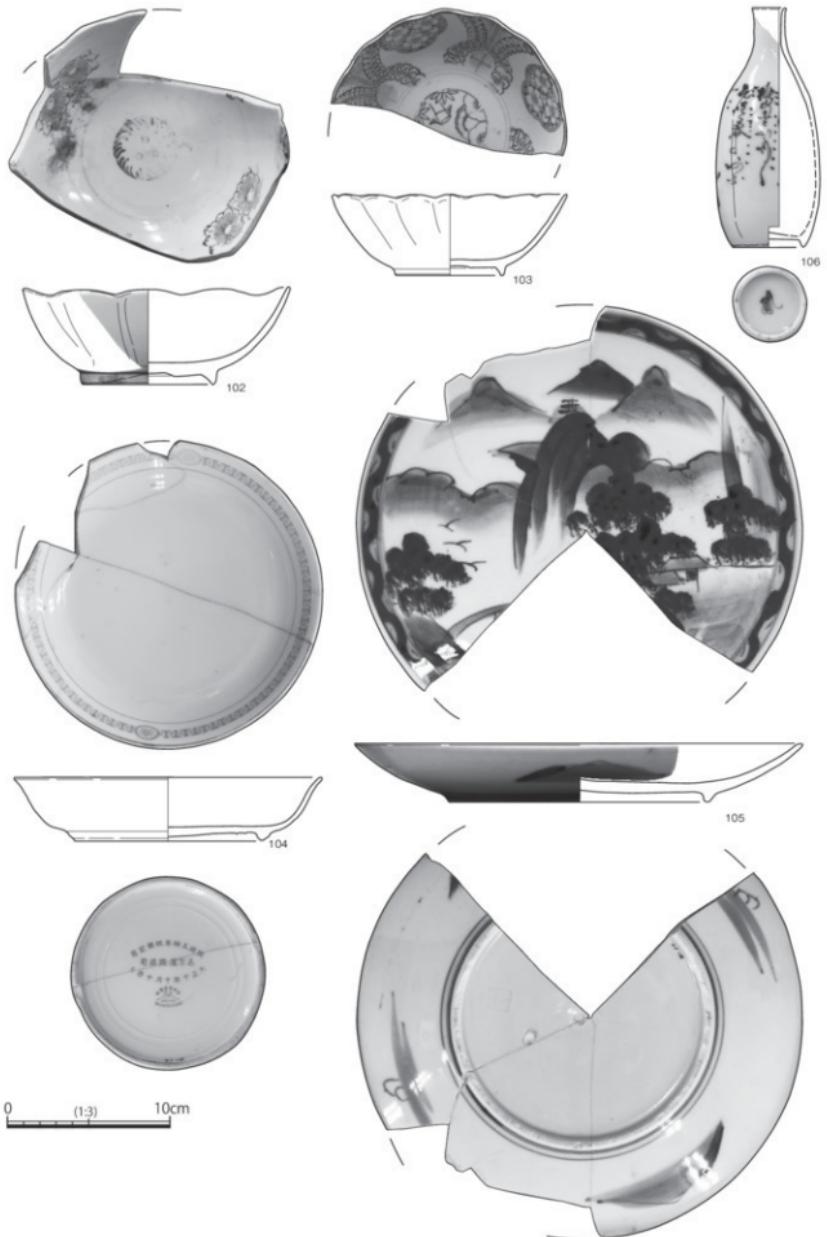
第15図 1号河道(1)



第16図 1号河道(2)



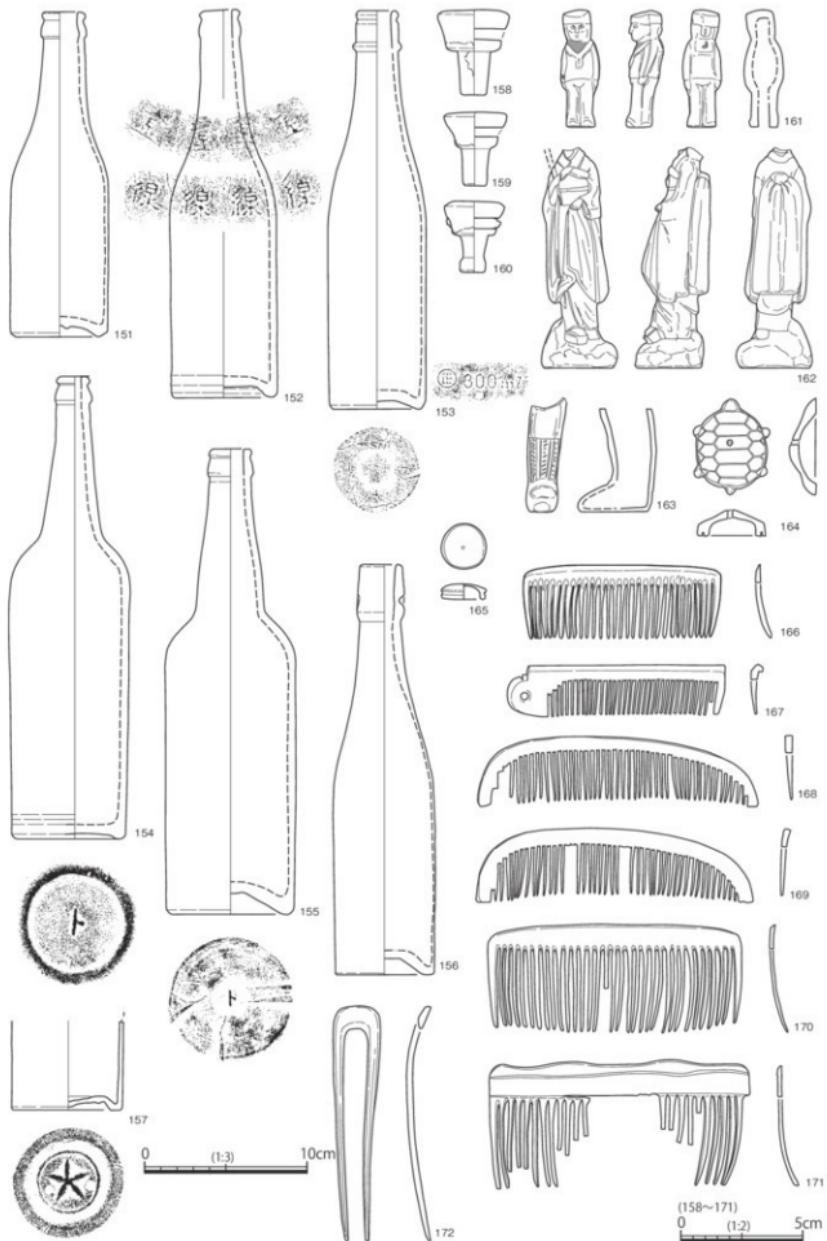
第17図 1号河道(3)



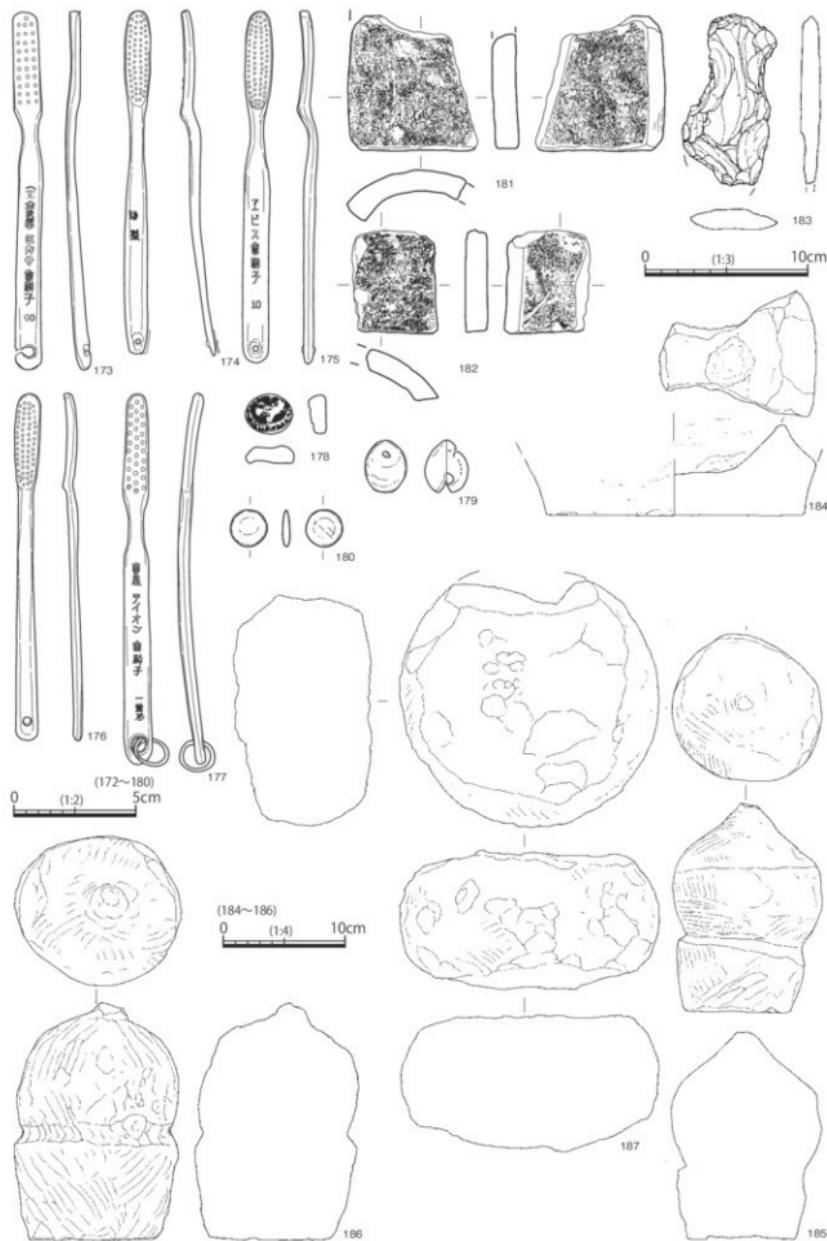
第18図 1号河道(4)



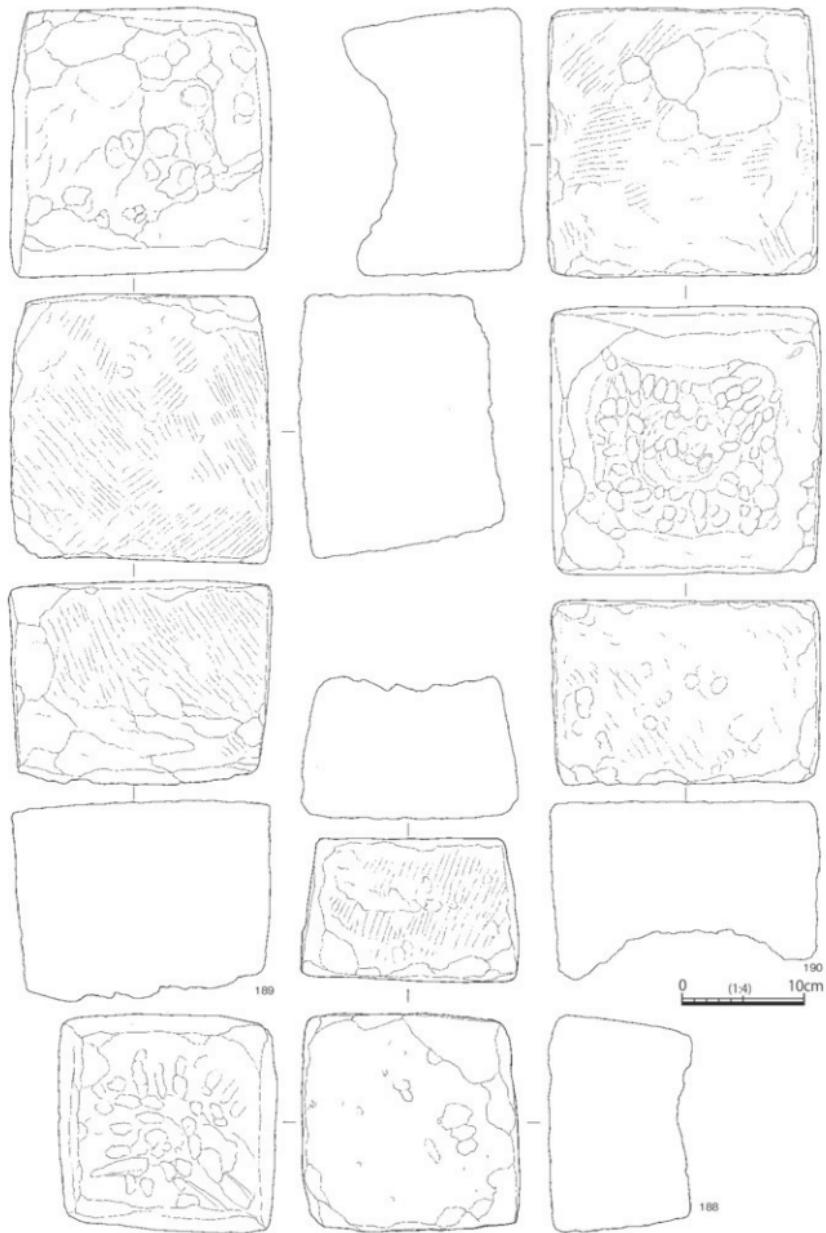
第19図 1号河道(5)



第20図 1号河道(6)

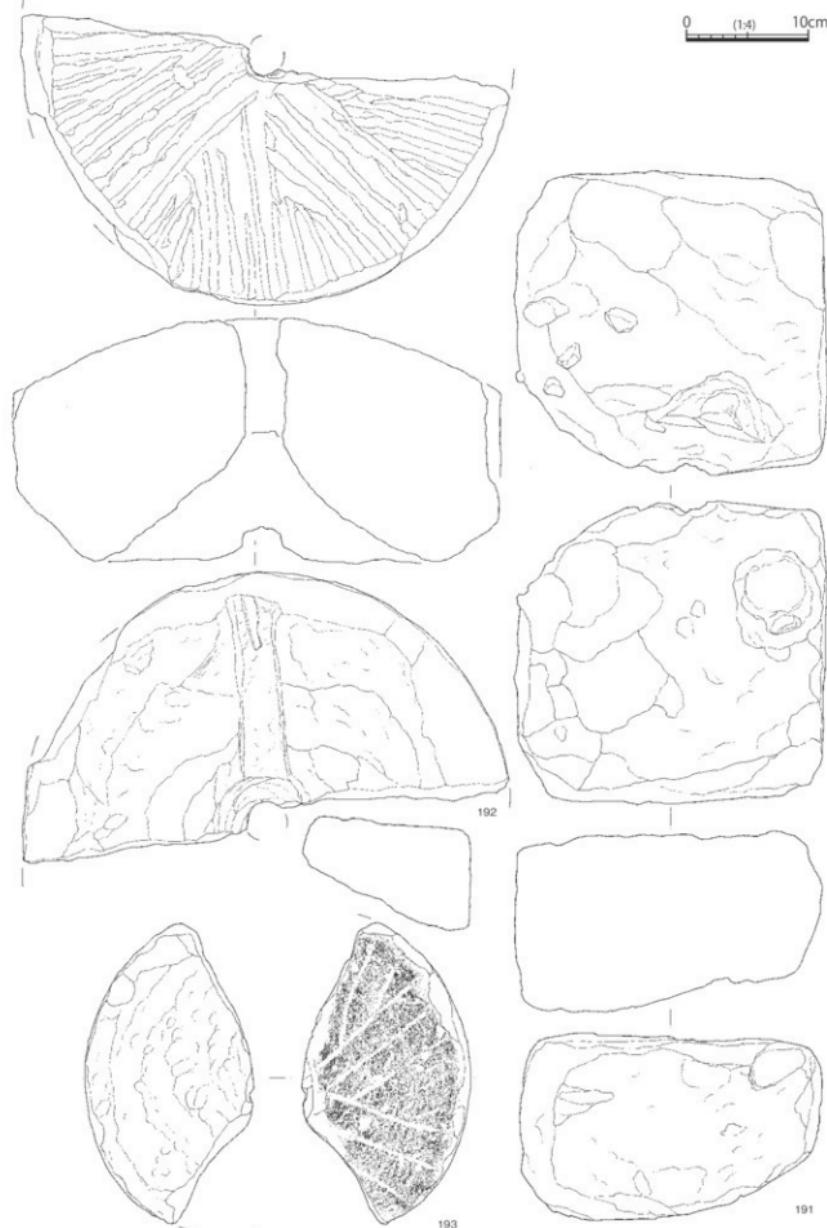


第21図 1号河道(7)



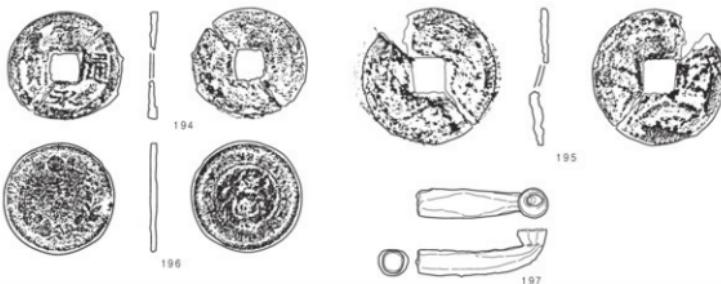
第22図 1号河道(8)

0 (1:4) 10cm

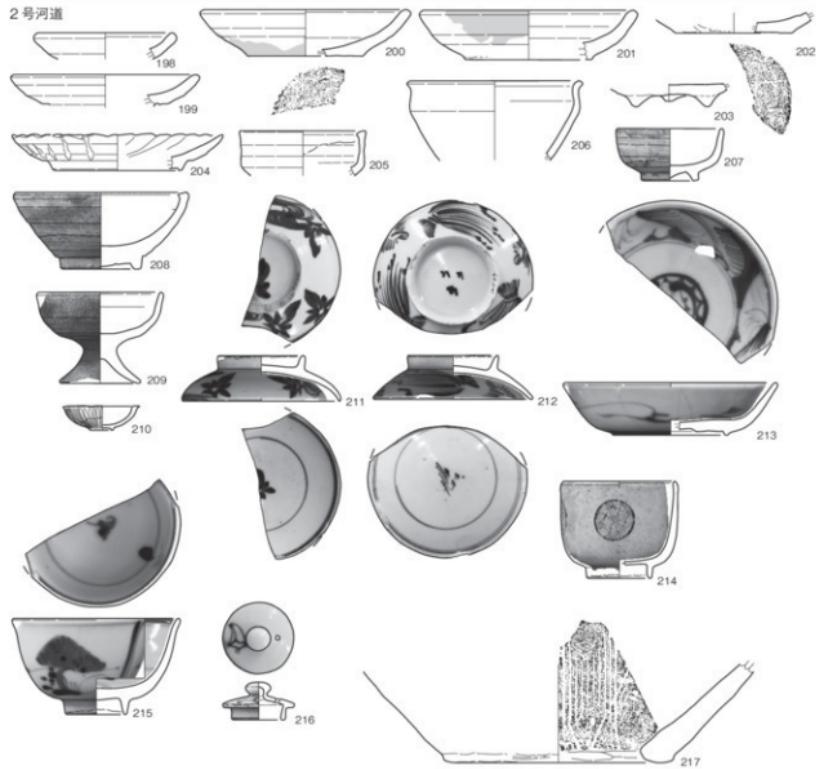


第23図 1号河道(9)

1号河道



2号河道



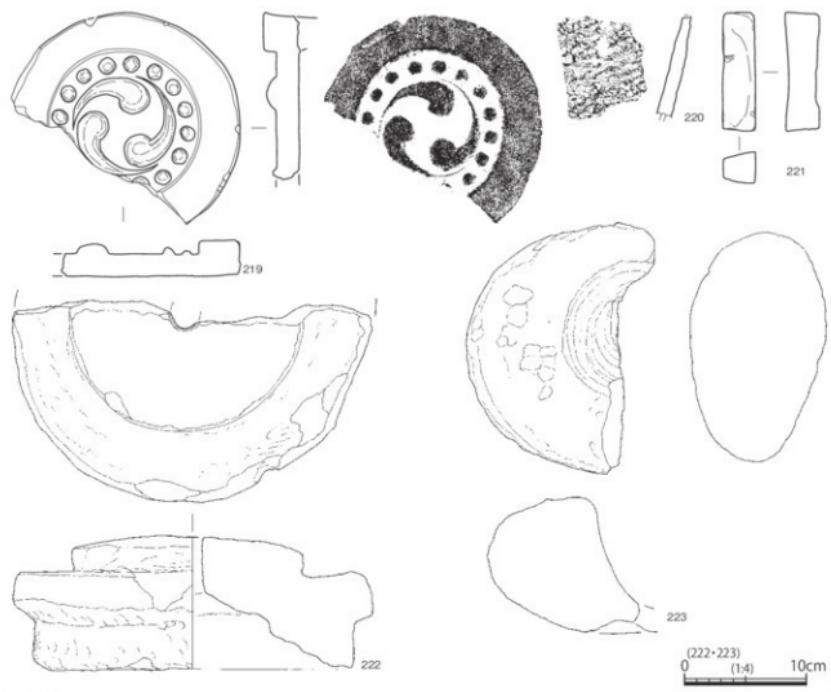
(金属製品)
0 (1:2) 4cm

(鉢底)
0 (1:1) 2cm

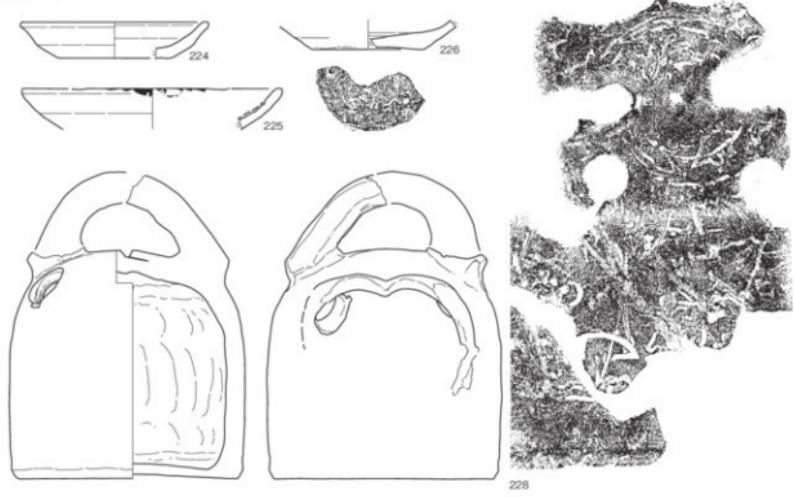
0 (1:3) 10cm



第24図 1号河道・2号河道



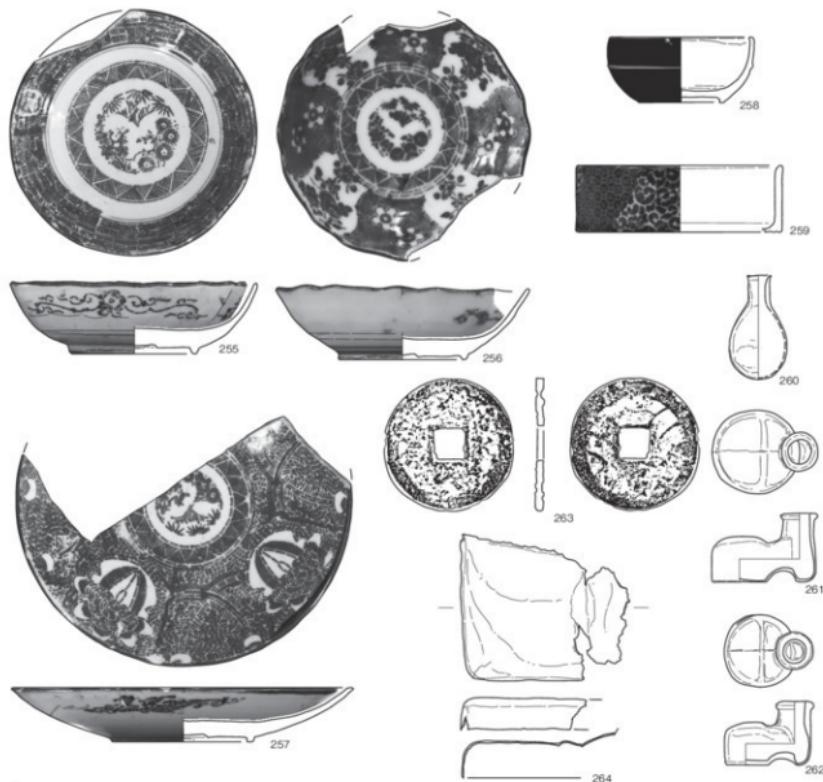
3号河道



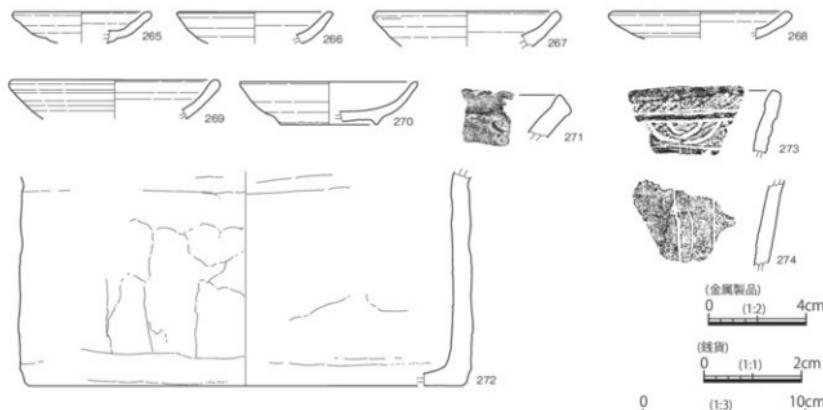
第25図 2号河道(2)・3号河道(1)



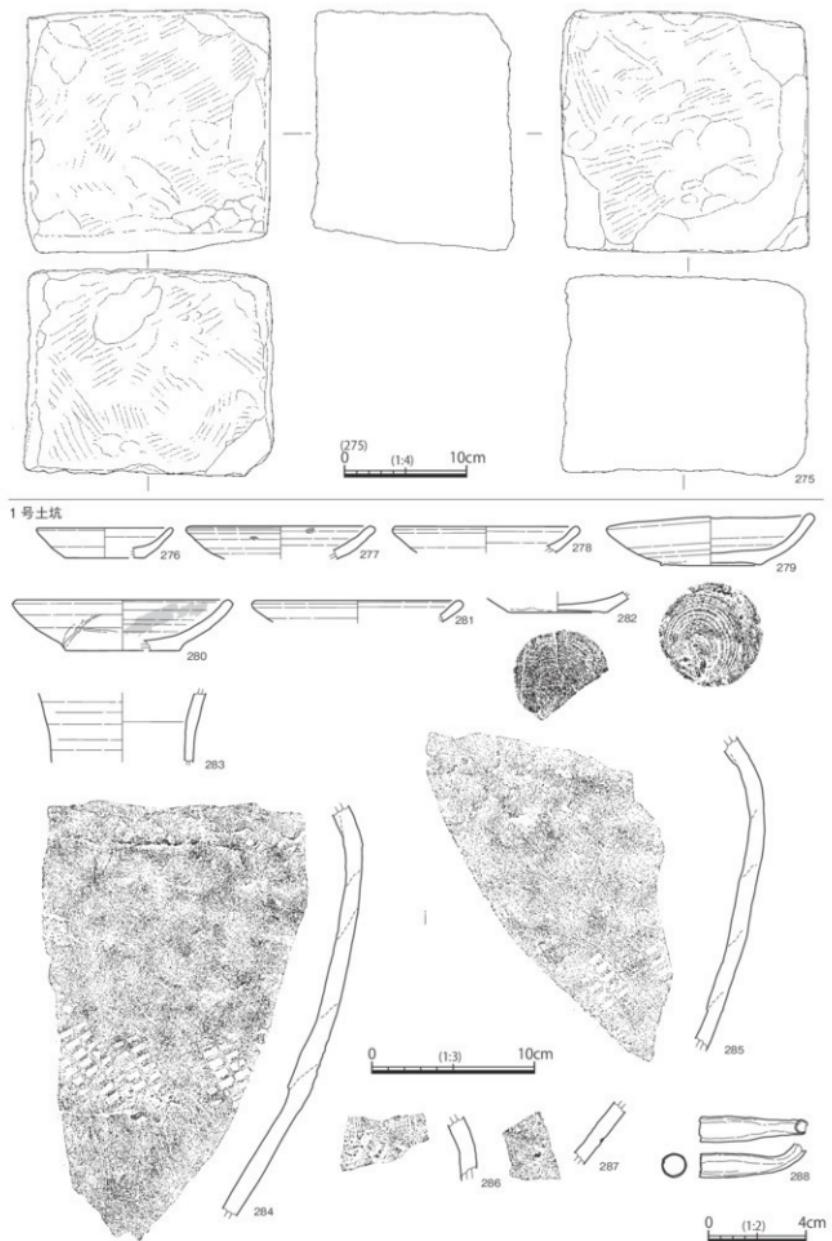
第26図 3号河道(2)



1号石組

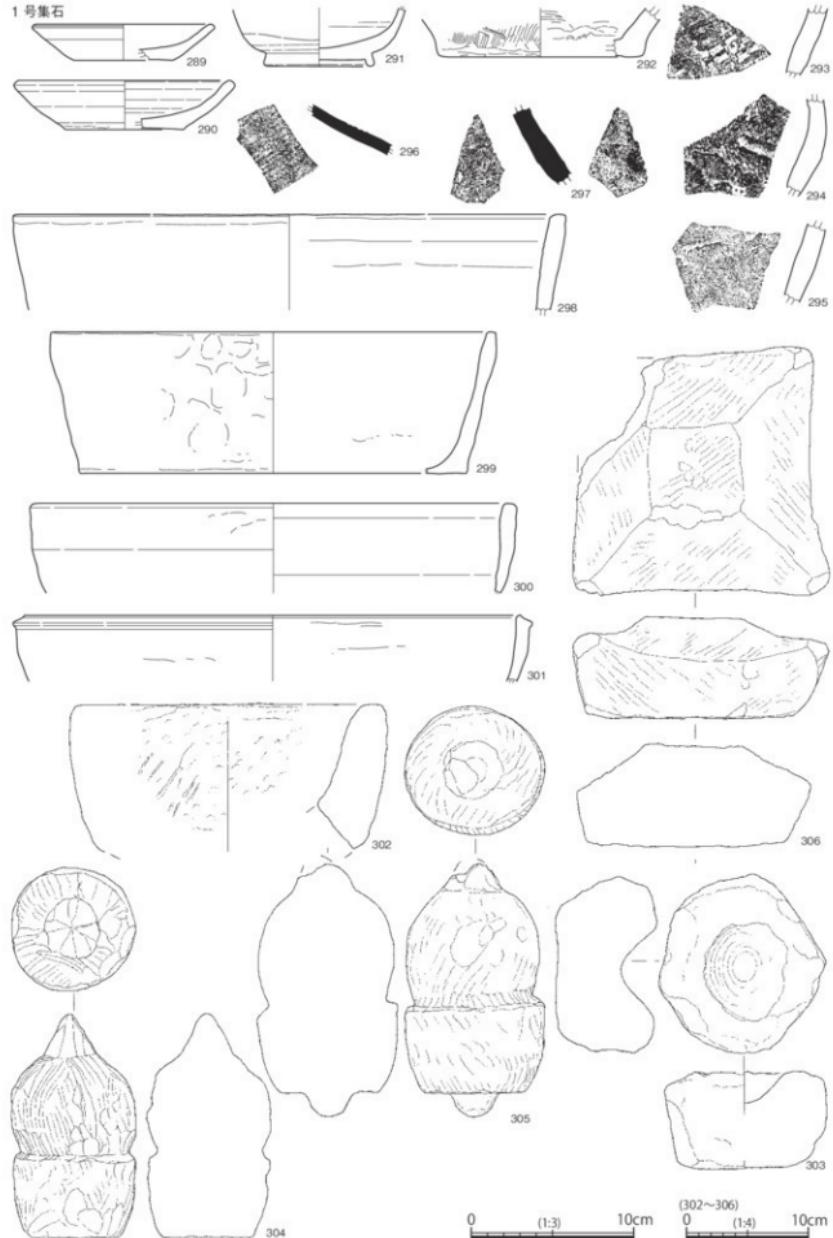


第27図 3号河道(3)・1号石組(1)

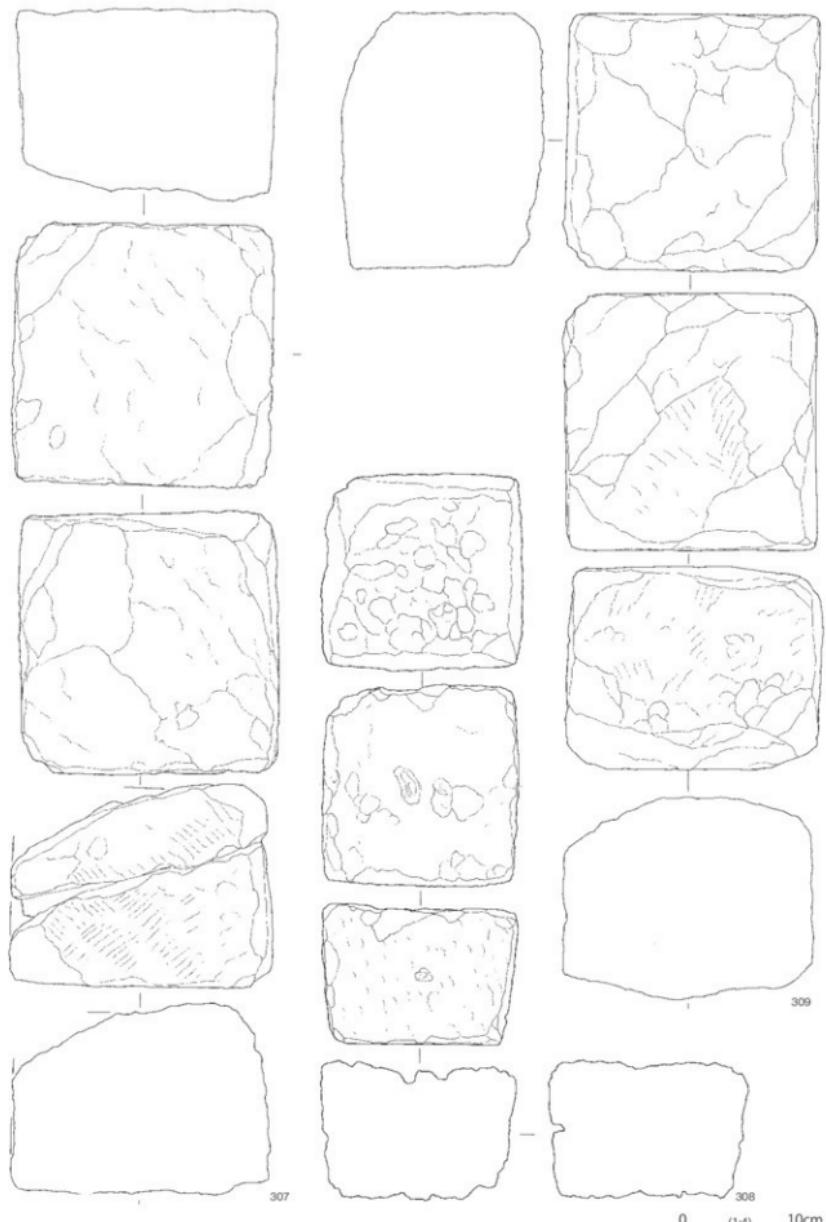


第28図 1号石組(2)・1号土坑

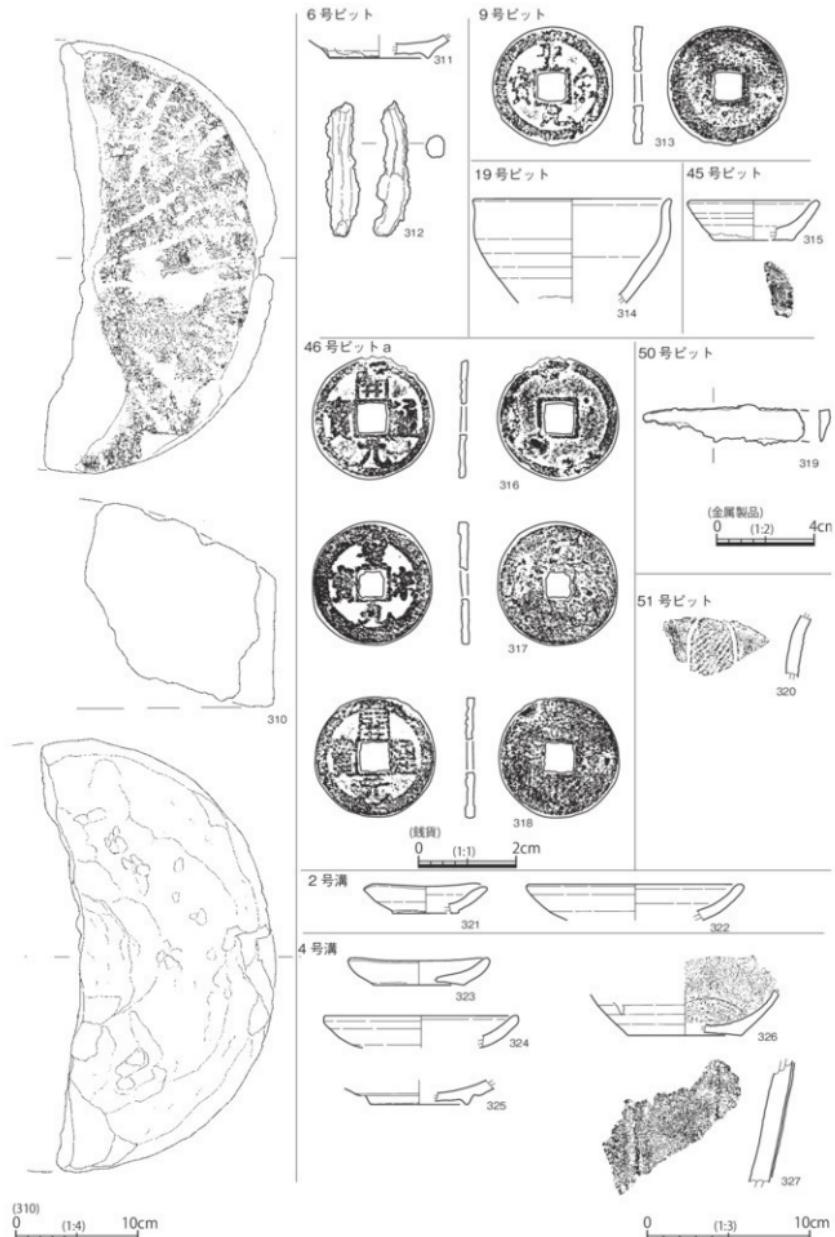
1号集石



第29図 1号集石(1)



第30図 1号集石

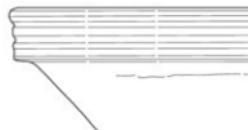


第31図 1号集石(3)・6~51号ピット・2~4号溝

5号溝



328



329



330

6号溝



331

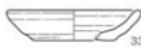


332



333

遺構外



334



336



335



337



338



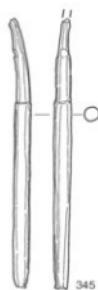
339



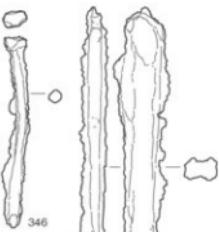
340



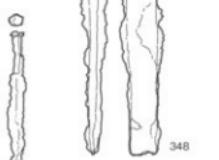
341



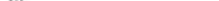
345



346



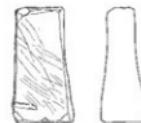
347



348



342



343



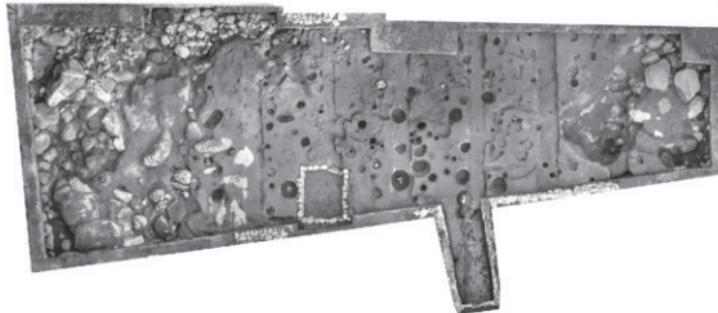
344

(錢貨)
0 (1:1) 2cm

(金屬製品)
0 (1:2) 4cm

0 (1:3) 10cm

第32図 5・6号溝・遺構外



1 調査区全体写真



2 調査前風景



3 調査区全景



4 調査区西侧



5 調査区西側



6 調査区中央



7 調査区東側



1 1号河道調査風景



2 1号河道内矢穴をもつ礎



3 1号河道内1集石



4 1号河道内1集石



5 1号集石中の五輪塔



6 1号集石中の五輪塔



7 1号集石中の五輪塔



8 1号集石中の五輪塔



1 1号石組作業風景



2 1号石組内躰出土状況



3 1号石組完成状況



4 1号石組南側石積



5 1号石組西側石積



6 1号石組北側石積



7 1号石組東側石積



8 1号石組北東隅



1 1号石組南西隅



2 1号石組北東隅出入口



3 1号石組と周辺ビット群



4 1号土坑出土状況



5 1号河道南側五輪塔等出土状況



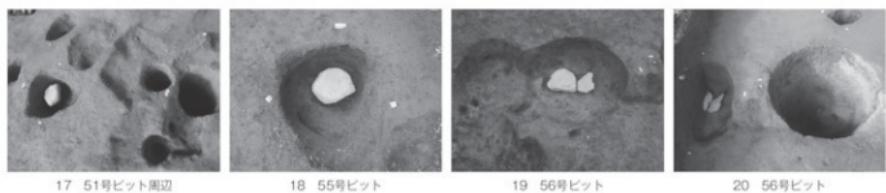
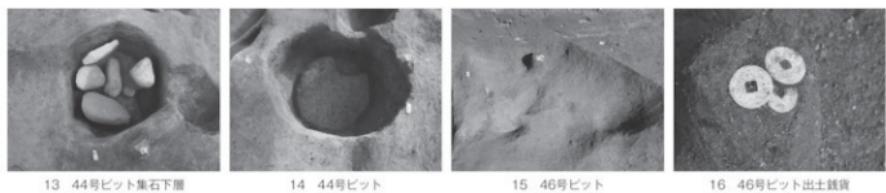
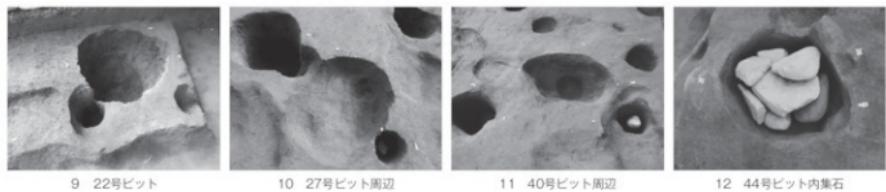
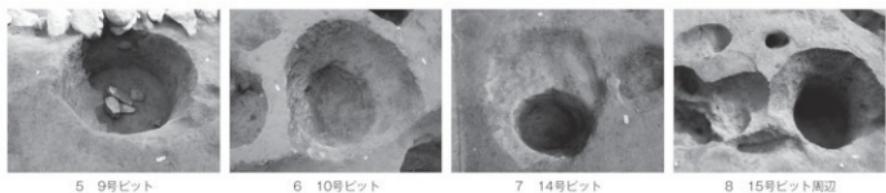
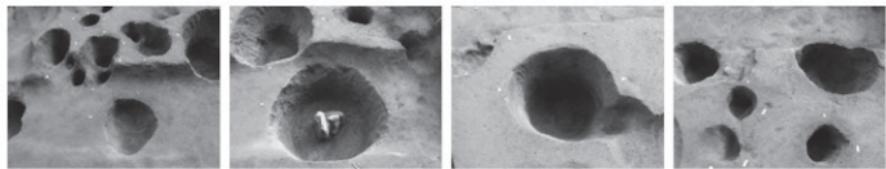
6 1号河道南側五輪塔等出土状況



7 1号河道内五輪塔等出土状況



8 1号河道内五輪塔等出土状況





1 2・3号河道完掘状況



2 2号河岸土層断面



3 2号河道完掘状況



4 2号河道調査風景



5 2号河道完掘状況



6 3号河道内矢穴をもつ礫



7 3号河道内茶臼出土状況



8 甲州市文化財審議会視察



9 見学会風景



10 ポール撮影風景



11 1号石組養生状況

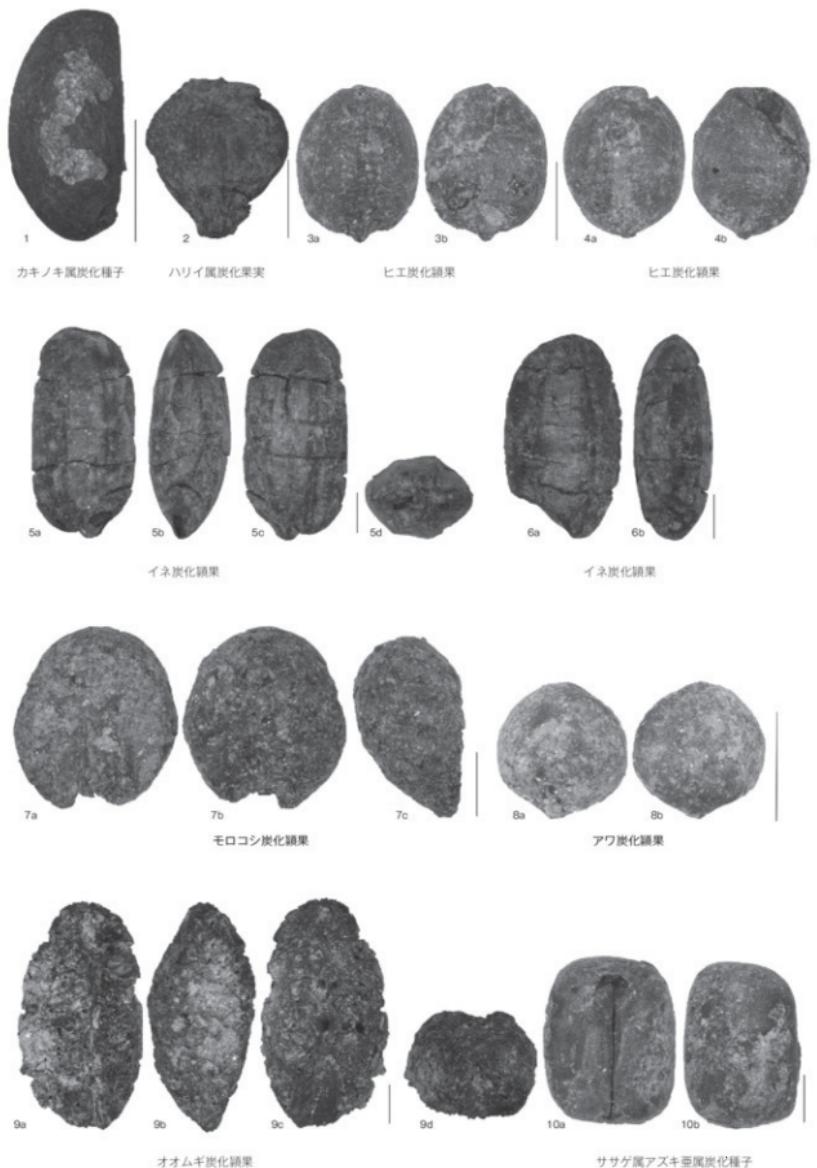


12 埋戻し風景









スケール 1.5mm、2-10.1mm

於曾屋敷遺跡の1号石組から出土した炭化種実

報告書抄録

ふりがな	おぞやしきいせき
書名	於曾屋敷遺跡
副書名	於曾公園整備事業に伴う発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	甲州市文化財調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	柳原功一・佐々木由香・パンダリ・スダル・シャン
編集機関	公益財団法人 山梨文化財研究所
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566-2 TEL 055-263-6441
発行年月日	西暦2017年3月15日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号			
おぞやしきいせき 於曾屋敷遺跡	こうしょうしまんじもおぞらひ 甲州市塙山下於曾地内	19213	塙50	35°42' 11.8913"	138°43' 59.8161"	2016(平成28)年 9月7日～11月2日	330m ²	於曾公園整備 事業に伴う

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
於曾屋敷 遺跡	館跡	中世・ 近世・ 近代	掘立柱建物跡・ 石組・集石・ 土坑・河道	土器類・陶器(渥美・ 瀬戸美濃ほか)・銭貨・ 近代陶磁器・ガラス製品・ 五輪塔・石臼ほか	13c頃とみられる渥美甕片、14c頃の瀬戸美濃壺片のほか、同時期の手づくね土器など出土。東側の堀に相当する流路跡を確認。明治～昭和初期の陶磁器類、五輪塔など出土。

要約	山梨県史跡於曾屋敷の外郭、北東地点の調査。二重土塁の土塁間では古絵図に記載された権兵衛川の跡を検出。付近はかつて五輪畠と呼ばれ、五輪塔が多数出土したということであるが、川底や周辺から五輪塔が出土した。また川跡の覆土中には明治～昭和初期の陶磁器類、ガラス瓶類が多量に出土し、それらの中には国鉄塙山駅に關係したものが含まれる。また渥美甕や手捏ねかわらけ片が数点見つかり、館跡が13cに遡る可能性が高まった。遺構としては掘立柱建物跡、方形の石組遺構があり、覆土中遺物から16c頃と推測される。方形石組遺構は半地下式の貯蔵穴とみられ、石積みは平積で古面を呈し、土間直上の土壤からはイネ等の炭化種実が検出され、中世の食糧に関するデータが得られた。
----	--

於曾屋敷遺跡

－於曾公園整備事業に伴う発掘調査報告書－

平成29年(2017) 3月15日

編集 公益財団法人 山梨文化財研究所
〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566-2
TEL 055-263-6441

発行 甲州市・甲州市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所

印刷 (株)帝京サービス